

新南部遺跡群 (12次)

—白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

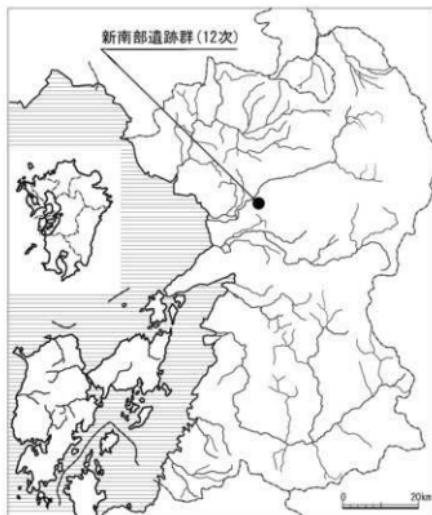
熊本県教育委員会

2018. 3

発行者：熊本県教育委員会
所属：教育総務局文化課
発行年度：平成29年度

新南部遺跡群（12次）

— 熊本県熊本市所在の埋蔵文化財 —



熊本県教育委員会

2018. 3

序 文

熊本県教育委員会では白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、新南部遺跡の発掘調査を実施し、この一帯は遺跡の宝庫で、新南部遺跡群は今回で第12次調査となります。

調査の結果、弥生時代や古代の生活の痕跡を確認することができました。
弥生時代は中期、古代は8世紀の住居地での生活、また出土遺物の土器、石器などから自然の恵みを享受したその様子を垣間見ることが出来、今後の白川流域の歴史解明の一助となりました。

本調査も平成24年7月に発生した「熊本広域大水害」に起因する復興事業に伴うもので、水は生活に恩恵を与えますが、また時には災害を引き起こすという両面を持ち、改めて自然を考える機会にもなり、このことは、私たちの生活においてこれから精神的な糧ともなりましょう。

本報告が地域の発展とともに、貴重な歴史の情報として引き継がれ、これから生かされていくことを望んでおります。なお、本調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成30年3月31日

熊本県教育長 宮尾千加子

例　　言

- 1 本書は、熊本県熊本市東区に所在する新南部遺跡群12次調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県災害対策班及び熊本県土木部の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成28年度に実施し、株式会社アートの補助委託事業である。整理報告作業は平成29年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図をもとに作成した。
- 6 現地での遺構実測・写真撮影は調査員、補助委託業者

が実施した。遺物の実測・製図は、春川香子・濱崎清子・立石美代子・山下義満が主に実施し、一部株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。遺物洗浄・接合・復元は、熊本県文化財資料室で行った。

遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・野下智美が行った。

- 7 本書の執筆は、山下が行った。
- 8 整理後の資料は熊本県文化財資料室で保管されている。
- 9 本書の編集は、熊本県教育総務局文化課が行い、春川の援助を得て山下が担当した。

凡　　例

- 1 方位／座標／標高 國土座標第II系を基準とし、方位もそれに準じた。標高は東京湾平均海面 (Tokyo Peil [T.P.]) による。
- 2 遺構名略号 遺構は、住居・土坑・溝・ピット・集石・不明遺構と区別し、掲載順にS-001から遺構名を付け、調査時の遺構名を()で示し、巻末に一覧表を載せた。図版中のPはピットの略記号である。
- 3 遺構図版 縮尺／線種 縮尺はキャプション及びスケールで図示した。遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。
- 4 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では—ラインの内側をポイントとしている。
- 5 遺物図版 縮尺 土器は1/3、石器は1/6・2/3・1/2・2/5で掲載し、図中に縮尺を示した。

6 遺物図版 外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶした。接合痕跡は、断面の内側に細線を入れている。赤彩、石器の使用痕については、以下の通りである。

■赤彩、■磨痕、■敲打痕

土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。

- 7 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。
- 8 色調 本書で用いた土壤・胎土色調名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」を用いた。青磁片については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第2版(1986)を用いた。

本文目次

第 1 章 調査の経過	
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査及び整理の組織	1
第 3 節 調査と整理の経過	2
第 2 章 新南部遺跡群の位置と環境	3
第 3 章 調査の成果	
第 1 節 調査の方法	9
第 2 節 基本土層	9
第 3 節 調査成果	12
第 4 章 遺物	88
第 5 章 総括	104
出土遺物観察表	108
遺構一覧表	
写真図版	
報告書抄録	

図版目次

第1図	白川関連遺跡地図 (S=1/50,000)	4	第40図	S-015 完掘状況・遺物出土状況	48
第2図	新南部遺跡群周辺地図 (S=1/25,000)	4	第41図	S-016 床面検出状況・遺物出土状況及び 遺物実測図	49
第3図	1工区・2工区構造配置図	10	第42図	S-017 出土遺物実測図	50
第4図	1工区基本土層・2工区レンチ 101 土層断面図	11	第43図	S-017 硬化面検出状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	51
第5図	S-001 完掘状況	16	第44図	S-017 完掘状況及び出土遺物実測図	52
第6図	S-002 完掘状況	17	第45図	S-018 床面検出状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	53
第7図	S-003 完掘状況及び遺物出土状況	18	第46図	S-018 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	54
第8図	S-001 出土遺物実測図 1	19	第47図	S-019 完掘状況及び遺物出土状況	55
第9図	S-001 出土遺物実測図 2	20	第48図	S-019 完掘状況及び出土遺物実測図	56
第10図	S-001 出土遺物実測図 3	21	第49図	S-020 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	57
第11図	S-002 出土遺物実測図 1	22	第50図	S-021 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	58
第12図	S-002 出土遺物実測図 2	23	第51図	S-022 完掘状況及び出土遺物実測図	59
第13図	S-003 出土遺物実測図	24	第52図	S-023 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	60
第14図	S-004 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	25	第53図	S-024 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	64
第15図	S-005 完掘状況	26	第54図	S-025・S-026 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	65
第16図	S-005P1 ~ P7 断面図 及び上層遺物出土状況	27	第55図	S-027・S-028・S-029 完掘状況	66
第17図	S-005 下層遺物出土状況 及び遺物実測図	28	第56図	S-030・S-031・S-032・S-033 完掘状況	67
第18図	S-005 出土遺物実測図 1	29	第57図	S-034・S-035・S-036・S-037 完掘状況	68
第19図	S-005 出土遺物実測図 2	30	第58図	S-038・S-039・S-040・S-041・S-042・S-043 完掘状況及び出土遺物実測図	69
第20図	S-006 床面検出状況及び遺物出土状況	31	第59図	S-044・S-045・S-046 完掘状況 及び出土遺物実測図	70
第21図	S-007 完掘状況及び出土遺物実測図	32	第60図	S-047 上面・下面遺物出土状況	71
第22図	S-008 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	33	第61図	S-048 遺物出土状況	72
第23図	S-008 出土遺物実測図 1	34	第62図	S-047・S-048 完掘状況 及び出土遺物実測図	73
第24図	S-008 出土遺物実測図 2	35	第63図	S-047・S-048 出土遺物実測図 1	76
第25図	S-009 完掘状況及び遺物出土状況	36	第64図	S-047・S-048 出土遺物実測図 2	77
第26図	S-009 出土遺物実測図	37	第65図	S-047・S-048 出土遺物実測図 3	78
第27図	S-010 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	38	第66図	S-049 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	79
第28図	S-011 完掘状況	39	第67図	S-049 出土遺物実測図	80
第29図	S-011 蓋断面図及び遺物出土状況	39	第68図	S-050 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	81
第30図	S-011 出土遺物実測図	40	第69図	S-051 完掘状況	82
第31図	S-012 完掘状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	41	第70図	S-052・S-053・S-054・S-055・S-056 S-057・S-058・S-059 完掘状況 及び出土遺物実測図	84
第32図	S-013 完掘状況	42	第71図	S-060・S-061・S-062・S-063・S-064 完掘状況及び出土遺物実測図	85
第33図	S-013 蓋実測図・遺物出土状況 及び遺物実測図	42			
第34図	S-013 出土遺物実測図	43			
第35図	S-014 完掘状況	44			
第36図	S-014 蓋実測図・遺物出土状況 及び遺物実測図	44			
第37図	S-014 出土遺物実測図 1	45			
第38図	S-014 出土遺物実測図 2	46			
第39図	S-015 床面検出状況・遺物出土状況 及び遺物実測図	47			

第72図	S-065・S-066 完掘状況	87	第80図	出土遺物実測図 8	98
第73図	出土遺物実測図 1	91	第81図	出土遺物実測図 9	99
第74図	出土遺物実測図 2	92	第82図	出土遺物実測図 10	100
第75図	出土遺物実測図 3	93	第83図	出土遺物実測図 11	101
第76図	出土遺物実測図 4	94	第84図	出土遺物実測図 12	102
第77図	出土遺物実測図 5	95	第85図	出土遺物実測図 13	103
第78図	出土遺物実測図 6	96	第86図	白川流域時期別遺跡分布図	106
第79図	出土遺物実測図 7	97			

表 目 次

第1表	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 1	5
第2表	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 2	6
第3表	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 3	7
第4表	出土遺物観察表	108

写真図版目次

図版 1	1 工区全景 東→	119	図版12	出土遺物 (109・111・113~118)	130
	2 工区全景		図版13	出土遺物 (119~126)	131
図版 2	S-005 完掘状況 西→	120	図版14	出土遺物 (127~134)	132
	S-008 遺物出土状況 南西→		図版15	出土遺物 (135~142)	133
	S-010 完掘状況 北西→		図版16	出土遺物 (143~150)	134
図版 3	S-013 竪部分検出状況 東→	121	図版17	出土遺物 (151~158)	135
	S-015 完掘状況 南西→		図版18	出土遺物 (159~166)	136
	S-016 遺物出土状況 南西→		図版19	出土遺物 (167~174)	137
図版 4	S-022 完掘状況 北東→	122	図版20	出土遺物 (175~179・181)	138
	S-017 遺物出土状況 北西→		図版21	出土遺物 (30・103・104・112・196 199・204・224)	139
	S-018 遺物出土状況 南西→		図版22	出土遺物 (188~195・197・198 200~203・205~208)	140
図版 5	S-047 遺物出土状況 西→	123	図版23	出土遺物 (23・28・56・63・67・96 98・101・102・110 209~212・214・218)	141
	S-027 完掘状況 北西→		図版24	出土遺物 (15・17・59・64・77 100・221・222)	142
	S-063 耳環出土状況 南東→		図版25	出土遺物 (13・14・69・180・184~187 225~228)	143
図版 6	出土遺物 (1~8)	124			
図版 7	出土遺物 (9・12・16・18~20・25・35)	125			
図版 8	出土遺物 (36・39・41~43・47・48・53)	126			
図版 9	出土遺物 (54・57・58・60・65・66 70・74~76)	127			
図版10	出土遺物 (79~91)	128			
図版11	出土遺物 (92~95・105~108)	129			

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

調査の原因は平成24年7月12日に発生した熊本広域大水害の復興事業によるものであり、詳細な経緯は、「新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」（熊本県文化財調査報告 第320集 2016）を参照された。

今回報告する新南部遺跡群については、平成26年8月27日の試掘・確認調査を皮切りに平成26年8月27日、10月20日の計3回の試掘・確認調査を実施している。その結果、今回の調査区内において、弥生、古代の遺物の存在を確認した。この調査結果について平成27年11月2日付け教文第1521号で熊本土木事務所に通知した。

その後、平成27年5月27日付け央土災対12号の熊本県知事名で文化財保護法第94条第1項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成27年5月28日付け文振発000370号で熊本市教育長から熊本県教育長あて進達された。工事内容と試掘・確認調査の結果を照らし合わせた結果、発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を教文第2530号で熊本市教育長、熊本県知事あて通知した。

第2節 調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

1 発掘調査の組織（平成28年度）

調査責任者 平井 貴（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

調査総括 岡本真也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 左座 守（主幹兼総務文化係長） 稲本尚子（参事） 天草英子（主任主事）

試掘担当 古城史雄（主幹） 廣田静学（主幹）

調査担当 1工区 山下義満（参事） 中野幸太郎（文化財保護主事） 2工区 中村幸弘（参事）

調査受託業者 株式会社 アート（調査補助委託業務）

調査作業員

上村久子 緒方久美子 清田博文 斎藤敏哉 斎藤 稔 佐藤幸也 鈴木典子 武内雅成

田中鳴海 谷川清 塚本勇 辻崎秀幸 永田宗一 西岡泰代 西坂章宏 西山雅廣 濱村經也

早田咲百合 東康晴 平野浩治 藤本浩樹 松井昭子 松浦 守 松崎仁美 松本博樹 松山誠一

溝口彩日 村口康弘 村山國誠 森 直人 森川謙 森川征子 森田幸雄 吉田熊一 吉村 力

渡辺由佳里

2 整理の組織

整理責任者 岡村郷司（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

整理総括 岡本真也（主幹兼文化財調査第2係長）

整理事務局 左座 守（主幹兼総務文化係長） 稲本尚子（参事） 竹馬牧子（主任主事）

整理担当 山下義満（参事） 泰川香子（臨時整理補助員）

整理作業員

榎原英子 重永照代 立石美代子 田中洋子 中尾規子 中島幸子 二田美記子 濱崎清子

久野成實 松本加代子 柳瀬英一郎

第3節 調査と整理の経過

1 調査の経過

平成28年8月18日から実施した。本調査が1・2工区と着手時期に分かれているのは本体工事の関係によるものであるが、調査開始まで試掘データを基に表土剥ぎを1・2工区まで終了させ、調査開始後、間を置かずに標準的グリットを設定した。1工区調査は平成28年8月16日から平成28年10月17日までの約3ヶ月、2工区は平成28年11月1日から平成29年2月23日までの約4ヶ月である。

以下は調査日誌から抜粋する。

平成28年8月18日作業員説明会後 調査区清掃、精査開始。毎朝 調査開始時は「今日の安全目標」を定め、安全に対し意識付けを行った。本体工事に伴い南側は1割・北側は2割勾配の傾斜を求められ、以後、これに従う。調査開始時期、この時点で弥生土器・土師器・須恵器・近世磁器・黒曜石片が出土。9月1日 台風13号接近のためプレハブ、現場の養生を行う。

9月5日 これまで表土剥ぎの面（基本土層第③層）で精査後検出を行った。当初、調査区東側の遺構確認は困難のため、手掘りにより掘削を開始し基本土層第③層での検出を試みる。9月9日 東側は、掘削後切り合いの住居地プランを検出した。切り合い不明のためサブトレーンチを設定し、新旧関係を把握し掘削を行い、弥生中期（黒髪式）の住居地と判断した。また調査区北側には粘土面が数ヵ所検出されたため、竈と想定し周囲を精査すると方形プランが検出された。この頃（9月中旬）から遺構の検出が顕著になる。

10月6日 S-063のピット状の掘り込み下層から耳環が出土した（第71図）。この希少な装飾品に作業員一同色めきだった。またこの1工区で確認される粘土面は住居に伴う竈で時期は8世紀頃と推定した。調査の終盤に入り、大型の構造遺構（S-047）が検出され、この遺構には夥しい遺物が廃棄されていたため、この記録に時間を要した。10月13日は近隣の公園に野外学習中の熊本市立西原小学校2年生児童に遺跡説明を行う。10月15日全景写真撮影を行い1工区は終了した。

2工区は11月1日より開始。清掃から行ったが調査区には後世の搅乱も多く、これを取り除く作業に時間を費やした。11月中旬 住居と想定される遺構が検出され始め、また清掃時の遺物も1工区と差異がないため、2工区は1工区の連続性と思われる。また一部、土層確認のため包含層掘削を行ったところ調査区南端下層より縄文後晩期の土器が出土した。以後、この時期の遺構検出に努めたが困難を極める。

遺構検出面は基本土層の第③層で、弥生、古代が重複しているため、新旧関係を明確に確認した後、検出に努める。また調査区全体を精査の結果、北側は川砂の埋土層であり遺構は残存していないようである。

12月に入り、住居地を中心に遺構検出に入り、7基の住居プランを確認した。プラン確認後は掘削に入る。12月8日 調査区東側の精査後、大型の円形プラン（S-005）を確認。この遺構の掘削に入る。

平成29年に入り、掘削を終えた遺構の記録に入りながら他の遺構検出に努め、調査は目的に応じ分散化する。1月23日 調査区内を横断していた工事用道路が取り除かれ、この未調査区域の調査に入り、これにより全面調査になる。2月の後半に調査は終了予定としているため、記録化の作業が中心となる。2月8日天候暴り 実機による空撮を行う。後半は天候にも恵まれ記録化も順調に進み、2月23日をもって調査は終了した。

2 整理の経過

整理は平成 29 年 4 月 16 日より 1 工区の整理作業を開始した。1 次整理として、まず遺物の洗浄から注記までをセットとし、次に遺物の接合及び石膏入れを行い、この作業が終了後、遺物の選別を行った。

2 次整理作業の主な業務は、図面の検討から行い、製図作業に移っていった。また製図作業と並行して遺物の実測図を作成していく。また実測の一部は委託業務とした。これらの作業が終了後、遺物写真撮影を行った。

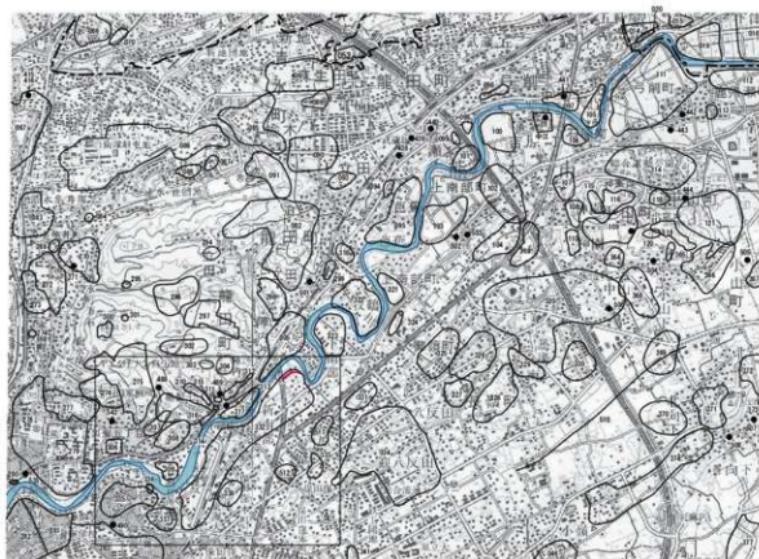
第2章 新南部遺跡群の位置と環境

遺跡の所在する熊本市東部の白川流域の地理的環境、歴史的環境については、「新南部遺跡群（10 次・11 次）吉原遺跡－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」（熊本県文化財調査報告第 320 集 2016）10 頁～12 頁に記載されているので、ここでは新南部遺跡群の立地を中心として記述する。

熊本市東部の東区新南部に所在する新南部遺跡群は、一級河川「白川」に沿う遺跡でこの「白川」は阿蘇カルデラを源流とし、西南西にむかって貫流し、大きく蛇行を繰り返しながら有明海に注ぐ。その中途箇所に新南部遺跡群が存在する。広域の新南部に広がるこの遺跡群は昭和 25 年に発見され、繩文後晩期（御領式・北久根山式・太郎追式）を中心とする遺跡として「新南部遺跡 A 地点」として周知される。後年、近隣に発見される北久根山遺跡もこの新南部遺跡群（43-201-332）に包括され、広大な範囲の遺跡となる。

遺跡の周囲は同事業で調査を行った下南部遺跡群（熊本県文化財調査報告第 325 集 2016）、近年、平成 25 年に熊本県が調査を行った新南部遺跡群（10 次・11 次）、吉原遺跡（43-201-100）（熊本県文化財調査報告第 320 集 2016）も弥生中期を中心とした遺跡である。このことからも白川流域の新南部遺跡群近隣には本遺跡と同様の性格を持つものも多い。

白川を挟み北側には立田山を含む丘陵地帯が東西に延び黒石原台地の一端を成し、南には託麻三山と称される小丘陵を含む託麻台地がほぼ東西に広がりを見せている。遺跡は白川が北に大きく蛇行して作る突出部の標高 25 m の丘陵低地に占有する。



第1図 白川関連遺跡地図 S=1/50,000



第2図 新南部遺跡群周辺地図 S=1/25,000

(遺跡番号は旧番号で表示した)

熊本県(43)熊本市(201)

田番号	被番号	道路名	発着地	時代	種別	指定	由道跡名	備考
067	407	渋水町道跡群	渋水町山東など	縦文～古墳	包廃地			柏山便松群。山安寛代・土師器、八景水谷縦文前後地盤
082	370	羽田	鶴羽町	古代・中世	包廃地		飛田雄跡	
083	409	龜井道跡群	渋水町龜井	縦文～中世	包廃地		龜井道跡、龜城跡、龜井金剛院跡、龜井松山墓地	城は復光院寺内。板碑天文2年銘
084	401	万石宿和田地蔵	渋水町万石	縦～中世	包廃地			
085	380	楓木	渋水町楓の木	縦文・弥生	包廃地			縦文草・前、後、晚、雙柵群
086	384	近倉山中腹	渋水町免谷	縦～中世	包廃地			
087	385	近倉山山頂	渋水町免谷	縦～中世	包廃地			
088	386	岩屋山	渋水町免谷	旧～中世	包廃地			
089	379	楓	鶴羽町	縦～中世	包廃地			
090	381	室ノ前道跡群	渋水町福木・室の前	旧～中世	包廃地		室の前道跡・一丁番道跡	
091	382	庵ノ前	渋水町免谷・上羅田	旧石器・弥生	包廃地			早期住居跡2・墓・基壇跡、縦文報告書あり
092	389	道ノ上道跡群	鶴羽町譚内など	縦文～平安	包廃地		道ノ上妻裕群・絆が丘道跡、緋ヶ山ノ神道跡、室の前慶應道跡・長達寺裏跡	室の前御跡は平安朝か?
093	382	老街跡	渋水町福木・町鶴	縦～中世	包廃地			
094	387	吉ノ平	鶴羽町上立田	縦～中世	包廃地			
095	388	竹ノ後・巴東道跡群	鶴羽町上立田竹の後	縦文～平安	包廃地		竹ノ後道跡・竹ノ後妻相群・巴東道跡	竹の後文後期後期土器・合口雙柵・土偶
096	375	弓削小塙根穴群	鶴羽町弓削小塙根	古墳				50基以上
097	374	弓削原	鶴羽町弓削原	縦～中世	包廃地			
098	376	弓削平ノ下A	鶴羽町弓削平の下	縦～中世	包廃地			
099	377	弓削平ノ下B	鶴羽町弓削平の下	縦～中世	包廃地			
100	680	吉原	吉原町難田	縦文～平安	包廃地			縦文後後期(南福寺・中津)・後生後期、会良平安住跡上器
101	378	片鹿踏	鶴羽町弓削片鹿踏	縦文	包廃地			
102	684	北上道跡群	石門町平	縦文・古代	包廃地		北上道跡・北上道跡	縦文兜形土器、布日瓦
103	685	上南部	上南部町村下	縦文	包廃地			縦文前段・後期・弛期・後收期氣泡發掘調查、市報告書あり
104	696	俵谷松ノ上	上南部町	縦～中世	包廃地			
105	373	法王鶴	鶴羽町	縦文・弥生	包廃地			
106	681	石原町	石原町	縦～中世	包廃地			
107	693	石原屋々井	石原町原々井	縦文	包廃地			縦文危険
108	688	神園山	長原町	縦～中世	包廃地			
109	695	神園山道跡群	長原町・小山町	奈良・平安	包廃地		神園山道跡群・中山道跡群・西福寺跡・西福寺墓地・花園光持(14年)・板碑	
110	694	神園山田度數	小山町・長原町	平安・中世	包廃地		太神荒碑・?田川觀音寺跡	
111	677	託麻弓削道跡群	弓削町	縦文	包廃地		弓削上古道遺跡・弓削原宮道跡	縦文前期・後期・弛期
112	678	赤瀬橋	鶴羽町赤瀬	縦文・弥生	包廃地		赤瀬河原道跡	復調査あり
113	679	弓削南寺跡	鶴羽町弓削	中世	寺社			
114	682	山尻道跡群	鶴羽町弓削山尻	弥生	包廃地		山尻道跡・石原庵・平道跡・下南原地巣跡	弥生時代を中心とした大集落
115	689	神園山石屋	長原町下の山	古代	包廃地			
116	690	神園山城跡	長原町下の山	中世	城			
117	696	正平塚(石燃跡)	小山町	中世	石造物	市		西跡寺跡・正平12年銘、翠灰岩製、石工藤原助次
118	691	平山尾度數	平山町	古式・中世	包廃地			
119	697	小山城跡	小山町	中世	城			
120	698	小山上の山	小山町	縦～中世	包廃地			
121	692	平山石ノ本	平山町	旧石器～縦文	集落			国体金壇、縦文調査報告書あり
126	406	吉開前	渋水町龜井	縦文～中世	包廃地			
270	402	渋水町谷口	渋水町万石	旧石器～平安	包廃地		旧石器	
271	402	万石宿松古墳群	渋水町大字万石	古墳			万石道跡	縦文調査あり
272	442	松崎道跡群	渋水町松崎	弥生～平安	包廃地		松崎豐紀道跡・松崎中世道跡・松崎薦山天神跡	2基円墳
273	442	松崎八幡路式道跡	渋水町松崎上里敷	古墳	埋葬		松崎石碑	
274	444	室園	渋水町室園	縦～中世	包廃地			
275	592	黒星町下立田道跡群	黒星町	古墳～江戸	包廃地		白石古墳・白石道跡・立田南中後道跡・城底古墳群	
276	593	春勝寺越川家墓所・庭園	黒星町4丁目	江戸	寺社	国	春勝寺墓地古墳群・六地蔵	福川家墓所は国指定の史跡。今跡を含む由田は県指定
277	595	小峰	黒星町小峰	縦文～平安	包廃地		金光山神相寺跡	
278	597	黒星町道跡群	黒星町坪井	縦文～中世	包廃地		黒星町道跡(浄々賀高校敷地)・九州女学院道跡・坪井古墳群出土の要地	一帯に要地群
279	596	旧第三五高等学校中学校本館・化学実験室・美術室	黒星2丁目	明治	施設物	国		国定重要文化財、イギリスのフィーン・アン様式

第1表 白川関連遺跡一覧

旧番号	現番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
280	603	子鏡	子鏡町	縄文～中世	包蔵地			
281	646	大江白川	大江 1丁目	縄文～平安	包蔵地	ID往生院跡・善行寺の墓碑・放牛地蔵		豊相
282	647	新里敷	新里敷町	弥生～中世	包蔵地			弥生埋葬、弥生前期土器、輪入陶磁器
283	648	大江道跡群	大江 3丁目	縄文～明治	包蔵地		大江道跡・大江青葉道跡・大江東原道跡・白川中学校校門道跡・須庭旧宿泊施設跡・熊糞敷地道跡・熊糞通川道跡・杉ノ木道跡・托麻郡家推定地・須庭御寺・熊本火炎跡・建設古稚跡他	
284	649	大江萬勝跡(旧御富都)	大江 4丁目	明治	建造物	集		大江萬勝・萬勝守之跡・佐富田御富都
294	395	天降寺	清水寺櫻木	旧石器～弥生	包蔵地			石碑、須庭式櫻群
295	403	万石乗越	清水町万石	縄文～古代	包蔵地			
296	404	万石茶山	清水町万石	縄文～弥生	包蔵地			岩臼式土器
297	397	桂野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地			
298	393	隣内上ノ園遺跡群	龍田町上立田	縄文～吉備	包蔵地		上ノ園 A・B 遺跡・竜田隣内經跡	御手洗 A式、坪型文、須佐式櫻柱、方財周溝基
299	391	三の宮(伏見宮跡)	龍田町上立田	縄文	包蔵地			
300	405	立田山山頂	黒星町	古墳～平安	包蔵地			
301	396	万石高山古墳	清水町万石(通称)茶山	古墳	古墳			様穴式石室
302	588	立田山東中腹	黒星町万石	古代・中世	包蔵地			
303	589	宇留毛浦市市営墓地	黒星町 7丁目	縄文～平安	墓地			
304	398	久々グランド	黒星町		包蔵地			
305	295	竜田陣内遺跡群	竜田町陣内	旧石器～中世	包蔵地		竜田陣内道跡・隣内宮の前道跡	曾畠式土器、黑報告あり
306	650	程山中学校校庭	黒星町 5丁目	古墳～平安	包蔵地		下立田一里木	
307	609	カブト山	黒星町宇留毛平山	縄文	包蔵地			早原、轟山、北久程山、黒川、山の寺
308	610	宇留毛A	黒星町 6丁目	縄文	包蔵地			
309	611	宇留毛B	黒星町 6丁目	縄文～平安	包蔵地			
310	590	湯山第2種穴群	黒星 1丁目 湯山	古墳	古墳	集		
311	591	湯山第1種穴群	黒星 1丁目 湯山	古墳	古墳	集		18基
312	299	女鹿平穴群	竜田町湯内女鹿浦	古墳	古墳		長薙寺横穴群を含む	
313	605	長薙寺古墳	黒星 7丁目	古墳	古墳			円墳横穴式石室
314	606	宇留毛小字破脚跡埋穴群	黒星町 7丁目	古墳	古墳			
315	607	つづきヶ丘横穴群	黒星町 7丁目	古墳	古墳	集		
316	608	宇留毛神社周辺遺跡群	黒星町 6-8丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群・立田山南古墳(上・下)・宇留毛浦山火葬墓・立田山城跡	立田山南古墳境地内2基横穴式石室
317	409	竜田口	竜田町女瀬、黒星 7丁目	縄文～平安	包蔵地			
318	390	堂前島	竜田町	縄文～平安	包蔵地			
319	687	神園	長徳町上西原	縄文～平安	包蔵地			
320	706	長徳遺跡群	長徳町	縄文～平安	包蔵地		長徳道路・中山沖道跡・中山五輪塔道跡(若駒塚道跡)・馬場原屋敷道跡・長徳石碑・竜田長者塚跡・長徳石碑・長徳石碑	石碑碑文 18 年銘、黒聖式合口寶相
321	707	玉田	上南町玉田	縄文～平安	包蔵地			
322	392	牧鶴道跡群	龍田町上立田	古墳	包蔵地		牧鶴古墳・西牧鶴式石柱群・中牧鶴式石柱群	須庭式櫻柱
323	709	下南町	下南町下山	縄文～古墳	包蔵地			
324	708	平ノ山	上南町		包蔵地			
325	710	北小泊	御宿町		包蔵地			
326	711	南小泊	御宿町	縄文～平安	包蔵地			
327	724	八反田宿跡群	長徳町		包蔵地			
328	722	八反田道跡群	長徳町八反田	縄文・中世	包蔵地		殿山古墳参考地	綱文後地削、土偶
329	712	長福南	長徳町南原屋敷	弥生・中世	包蔵地			須取式櫻柱、吉文・寛宝・元禄、正徳の記念碑誌
330	713	長福油出	長徳町		包蔵地			
331	723	松の森	包蔵地					
332	726	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	包蔵地		新南部 A～D 遺跡・北久程山道跡・西谷道跡・小屋原山道跡・小屋原山松原道跡・新南部三石道跡などあり	黒北バイパス調査、市マンショナリティ調査、田辺堀柵三期調査などあり
333	929	南原			包蔵地			
334	728	乾原・沼八反田	長徳町乾原・沼八反田	縄文～平安	包蔵地			乾原沼・八反田道跡・沼の沼遺跡
335	643	渡瀬道跡群	渡瀬 5丁目	縄文・弥生	包蔵地			渡瀬貝塚・北原廻布道跡
336	644	渡瀬曾原神社境内	渡瀬 6丁目		寺社	市		渡瀬貝塚・北原廻布道跡
337	645	辻	渡瀬 7丁目	縄文～平安	包蔵地			綱文後地削、へら橋型土器・唐土器
338	731	新南部西原	新南部町	縄文～平安	集落			
341	654	保田原集落一本松		縄文～平安	包蔵地			
346	733	小僧	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地			
364	704	中山	小山町	縄文～平安	包蔵地			
365	703	桜(梅)寺谷奈東跡群	小山町	奈良・平安	生産			小山貝塚群
366	702	小山上	小山町	弥生	包蔵地			バイコクジ
367	701	御船塚	小山町御船塚	縄文・中世	包蔵地			

第2表 白川関連遺跡一覧 2

熊本県 (43) 熊本市 (201)

田番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	由遺跡名	備考
368	705	小山山伏塚	小山町	弥生	墳墓		馬場氏墓山古墳群	豊柱基、銅劍出土
369	714	上風追	戸島町	縄文・中世	包蔵地			二岡中学校校庭
370	718	戸島古墳	戸島町	縄文～中世	包蔵地			
371	717	戸島北向 (戸島西)	戸島町	縄文・中世	包蔵地		札の辻遺跡・戸島香椎寺跡・戸島神社境内古墳群	
372	715	戸島東	戸島町日向	縄文	包蔵地			
373	716	戸島蛭塚跡	戸島町日向	縄文・中世	包蔵地			蛭塚一宇一石埋納
374	721	葦山遺跡群	戸島町葦山	旧石器・縄文	包蔵地		葦山遺跡・葦山古道跡・日向下六地蔵	
377	722	日向桂尾廻	戸島町日向	縄文	包蔵地		日向遺跡	
406	372	麻生田	麻生田町	縄文～平安	包蔵地			
415	-	渡瀬御園曾當板碑	津水町八重水谷	中世	石造物			
416	-	八重水谷語の本五輪狹矢	津水町八重水谷	中世	石造物			
438	-	二里木跡	種市町上立田	近世	交通			
439	-	武藏塚	種市町弓削	近世	墓			宮本武蔵墓正徳2年
440	-	セボンサン	種市町弓削	中世	墳墓			絵文ある小石出土
441	-	弓削寺跡	種市町弓削	中世	寺社			五輪塔
442	-	弓削薬師堂板碑	弓削町	中世	石造物			大永6年拝顔刻仏像
443	-	弓削山伏塚板碑	弓削町	中世	石造物			天文17年銘人骨出土
444	-	菊池家墓地	芋井町	中世	墓地			宝鏡印塔、元龟2年銘
488	-	狐穴古墳参考地	黒川町下立田	古墳	古墳			
489	-	半室毛城床古墳	黒川町宇留毛城床	古墳	古墳			石材各所に散乱
490	-	道原柱碑	大久里塚	中世	石造物			新迦陵像、天文16年
501	-	伝立田町監墓・古塔碑群	種市町上立田	中世	石造物			五輪塔
502	-	乙姫代	上原町	中世	寺社			
503	-	上南郷板碑	上南郷町	中世	石造物			元龟2年供養
504	-	桜国寺境内吉塔碑群	小山町	中世	石造物			宝鏡印塔、一宇一石、五輪塔
505	-	御前塚古墳	小山町	中世	墓地			
506	-	中山高大管理所五輪塔	小山町	中世	石造物			同所出土
507	793	円通寺跡	戸島町	中世	寺社			地蔵堂、般若堂、塔碑
508	-	戸島神社入口吉塔碑群	戸島町	中世	石造物			宝鏡印塔、五輪塔
510	-	南郷柱跡	長田町、戸島町	近世	交通			
511	727	市営託麻团地	新都部託麻团地	縄文	包蔵地			押型文、御承式
512	730	西湖	新都部	縄文	包蔵地			押型文
535	-	一夜塚	小山町	近世	建造物			
543	-	東来寺	黒川町 下立田・小峰	中世	寺社			
924	中江	中江町		包蔵地				

熊本県 (43) 西合志町 (407)

田番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	由遺跡名	備考
066	-	渋原城跡	渋原 城跡	中世	城			中世城跡
070	-	船入	渋原	中世	包蔵地			

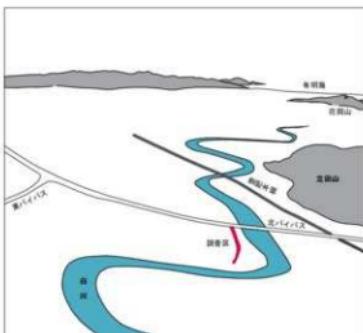
熊本県 (43) 菊陽町 (404)

田番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	由遺跡名	備考
014	-	今石	津久礼 今石	縄文～中世	包蔵地			
015	-	津久礼今石城跡	津久礼 今石	中世	城	町		
016	-	津久礼六地蔵	津久礼 梅木	縄文・弥生	石造物	町		
019	-	梅ノ木	津久礼 梅の木	弥生	包蔵地			
020	-	今石櫓穴群	津久礼 今石	古墳	古墳	町	9基	
052	-	杉ノ木	津久礼	縄文	包蔵地			

第3表 白川関連遺跡一覧 3



白川流域 東 → 西



第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

(1) 調査の方法

本遺跡は調査期間も調査員も異なるが、連続した調査区のため調査期間の前半を1工区、後半を2工区と調査区を設定した。調査前に重機による表土剥ぎを先行し、これを完了すると標準的グリットを設定した。これは一辺5mの正方形のグリットを平面直角座標系に合わせ、各グリットの中心からみて北東側のX軸、Y軸の交点の数値をX座標の百の位と十の位、続いてY座標の百の位と十の位を並べて表示し、そのグリットの正式名称としたが、調査時は簡素化の意でX軸にアルファベット Y軸にアラビア数字を用い調査に活用した（第3図）。次いで人力による遺構確認のための清掃作業、遺構検出、遺構掘削という手順で調査を進めた。その間に随時、土層断面図・遺構配置図・遺構実測図の作成や写真撮影を行った。

(2) 整理の方法

検出の遺構にはS番をつけた番号で表示（S-001等）し、これを番号順で設定したが現場判断でも苦慮した遺構は整理時に再検討後、整理担当者が判断し遺構でないものは削除した。本報告書ではすべてS番で表記したが、住居状遺構・土坑・溝・ピット・集石・不明遺構等に大別しこの内容で掲載した。ピットについてはすべてS番をつけたが孤立柱建物や柱列以外の連立が認められないものについては除外し遺構配置図（第3図）にのみ掲載している。

遺物については遺構出土の遺物を優先して選出し、遺構図とともに掲載した。一方、包含層等出土の遺物は時代とその性格ごとに配列した。

第2節 基本土層

本遺跡は白川に近接し、昭和28年6月26日の大水害、そして平成24年7月に発生した白川激甚災害と近年でも大水害の被害を受けた地域である。白川が古代も位置を変化していない可能性を示唆するのは、本遺跡の砂層土の堆積状況である。このことからこの地域は氾濫を繰り返し堆積した土層で一様でなく数メートル離れるとその様相は変化している。したがって基本土層の明確化が困難であったが、予備調査時のトレンチ土層を参考にはほぼ全域に共通する土層模式図を作成した。これをもって基本土層とした。

① 層 耕作土 現在の耕作土

10YR4/3にぶい黄褐色土

② 層 遺構検出層1 しまり強く、細粒砂混じる粘質土

10YR3/1 黒褐色土

③ 層 遺構検出層2 細粒砂混じる粘質土シルト しまり中

10YR4/2 灰黄褐色土

④ 層 細粒砂混じる粘質土シルト しまり中

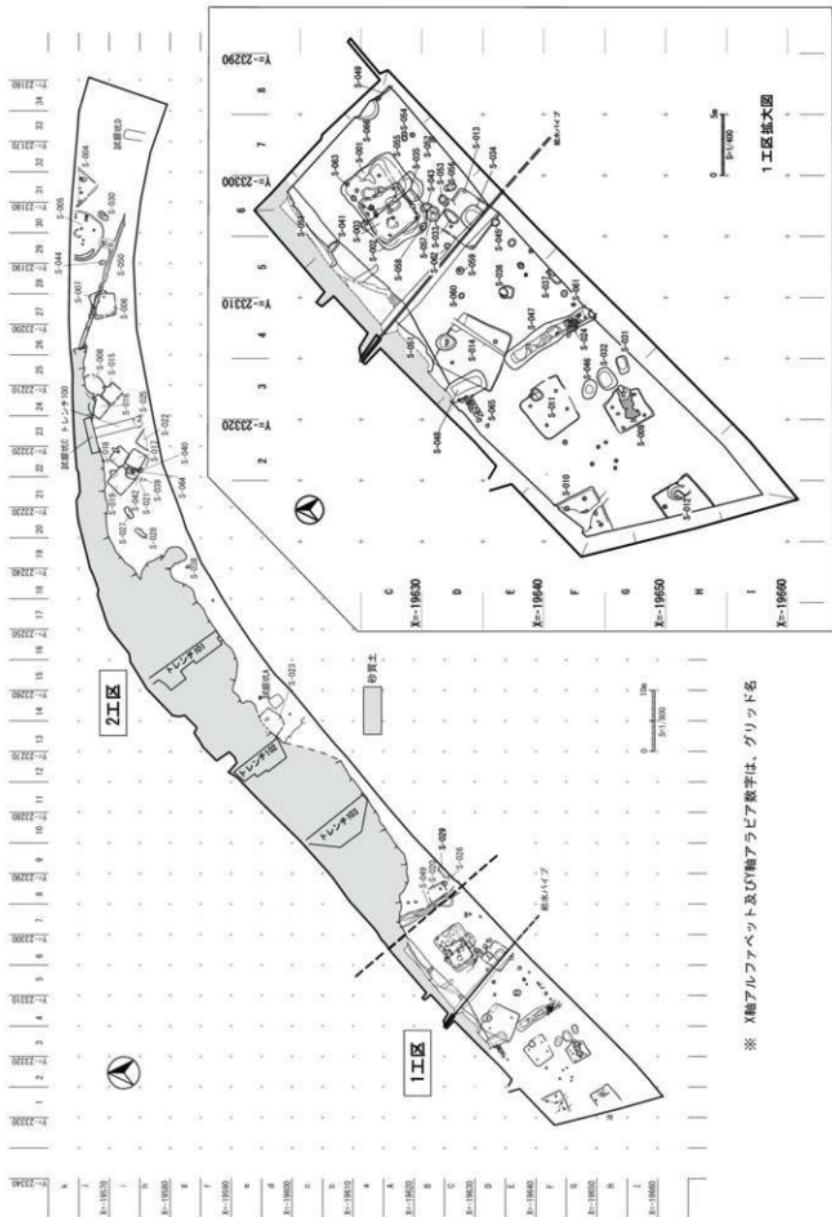
10YR3/3 暗褐色土

⑤ 層 細粒砂混じる粘質土シルト しまり中 無遺物層

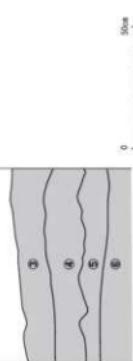
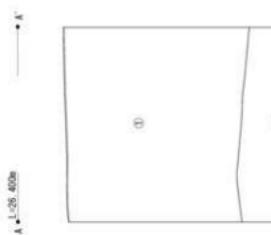
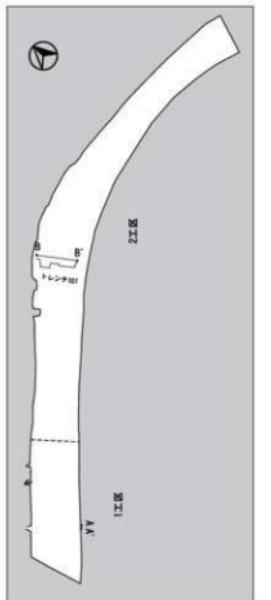
10YR4/6 褐色土

⑥ 層 砂質シルト無遺物層

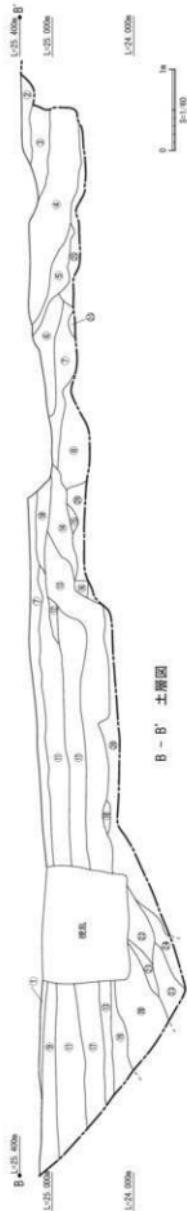
7.5YR5/8 明褐色土



第3図 1工区・2工区造構配置図



卷之三



B = B' + B''

第4図 1工区基本土層・2工区トレンチ101土層断面図

また遺跡の土層図として第4図を提示。これは基本土層として、後世の河川侵食を受けていないA-A'を提示した。これが従つて前述した基本土層となる。B-B'の土層状況は複雑に堆積し氾濫堆積を提示する。これも本遺跡土層の参考とするため掲載した。本遺跡の層位は概観すると全体が砂質土でありこれは近接する白川の堆積によるものであり、上層には北西側に一部水平堆積が見られるが、全体が砂質土シルト層で、これは河川による氾濫、削平によるものであろう。従つてこの本調査区は古来から白川の恩恵と災害の両面を持つことを窺い知る。

第3節 調査成果

遺構（住居）

（弥生）

S-001 (S-008 第5・8～10図)

1工区西側にあたるB-6、C-6グリッドにおいて検出した。主軸はN-48°-W、長軸5.1m 短軸3.8mでやや長方形を呈する。S-002と重複している。検出はサブトレンチを十字状に設定し掘削を行い、0.2m程掘削を行うと貼床部分を確認した。さらに掘り進めると住居形成時の掘り込みも確認された。従つて住居形成は掘り込み後、居住区確保のため貼床を施したのである。しかし本来の生活面であるこの貼床上部には明確な硬化面は検出されなかつた。これは住居使用期間の問題もあるが、貼床形成土が砂質シルト土で硬化しにくいという土質によるものであろう。遺構南東側には幅0.6mの高まりがあり、ベット状遺構の呈を成す。ピットは4基確認され検出土面と四方の規則性から柱痕跡であろう。また中央には土坑状の掘り込みが検出され、その埋土は炭化物を含んでいるためこれは炉跡と推定される。また一部であるが土坑周囲は帯状の埋土とは異なる土層があるため炉壁の残存であろうか。

遺物は遺構南端部から弥生土器甕(1～3)、4・5は壺で5は口縁から頸部、胴部上位にかけて暗文を施す黒髪式土器である。出土土器から弥生中期の遺構であろう。また6は口縁部を損失した遺物で、この部位を観察すると連続打痕がみられ、意図的に打ち欠いているようである。これは土器の再利用か、または廃棄儀礼の一種であろうか。ここでは資料提示に留めたい。

S-002 (S-009 第6・11・12図)

1工区東側B-6、C-6グリッドにおいて検出。S-001と重複し北東部分がこれに一部を切られている。プランはS-001より古い。主軸はN-46°-E、長軸4.8m、短軸は残存3.2mを検出した。生活面の貼床まで0.2mの掘削を必要とし、この貼床面において中央部に土坑状の掘り込みが確認され、その埋土にはカーボン、焼土混入が認められるため炉跡と判断した。ピットは3基確認されるが、P4には生活面に径20～30cmの平石が存在している。この平石を剥すと僅かな掘り込みはあるが、この掘り込みは柱を固定するには困難であり、この平石を礎石として柱を設置したことも想定される。またこの平石の中央部は赤く変色しており被熱の可能性もあり、遺構南側には長軸20cm程の炭化物も点在するため、この遺構は燃焼に関与するものか。7～9は土器で炉跡を中心に出土した。9は黒髪式土器の甕で、7・8は貼付突帯の弥生土器である。7は胴部上位に穿孔が施され、この穿孔は土器内部から強い衝撃が加えられた痕跡であり、その類例が多い。これは土器としての機能を消失する廃棄儀礼とも考えられている。また前述した大型の川原石(10・11)はP4の位置に並んだ形状で出土した。肉眼観察では火熱痕跡があるため、本来炉に伴う遺物と考えられるが、P4の掘り込みが浅いことから住居の後年、柱を支える機能として使用したとも考えられる。

S-003 (S-051 第 7・13 図)

1 工区東側 C-6 グリッドにおいて検出した方形状遺構である。S-001、S-002 の下層にて検出し、主軸は N-41° -W、長軸約 4.2m、短軸約 4.0m、深さ約 0.4m である。遺構検出時には竪穴住居として考え掘削を開始した遺構で、十字状にベルトを設定し、貼床まで掘削を行い検出したところ 8 基のピットと 1 基の土坑を検出した。さらにサブトレンチを設定し再度掘削した結果、僅かながら硬化面が検出された。8 基のピットを検討したが並ぶピットがなく土坑も炭化物等は見られないが、そのプランは竪穴住居と想定され S-002 より新しい竪穴住居の僅かな残存と考えられた。12 は黒髪式土器の甕の口縁から胴部上位資料、13・14 は小型円形の自然石で、これは投石と想定した。また破損しているが砂岩質の砥石 (15) は頻度に使用した痕跡として、全面の摩耗と中央部の座みを挙げることができる。また一部打痕も見られる。これは破損後、砥石としての機能を消失後の痕跡であろう。

S-004 (S-001 第 14 図)

2 工区東側にあたる J-31・32 グリッドにおいて検出した。遺構の斜め半分は調査区外である。主軸は N-48° -W、残存では長軸 5.1m 短軸 3.8m でやや正方形を呈するか。遺構には硬化面と炭化物が検出された。遺構の西端は後世の搅乱であるが、東端には土坑状の掘り込みがあり、これに僅かであるがピット状の座みが見られる。他に P 1 なども検出されたことから竪穴住居であろう。遺物は弥生中期の口縁部片 (16) が出土していることや炭化物が遺構中央部で検出されたことから、本遺跡のピークの一つである弥生中期の遺構であろう。また 17 は石錐で民俗事例から紐は上下に位置するため、掲載はこれに従った。厚みのない安山岩を用いているため、漁網を安定させるため川底に固定化するのであろう。

また本体工事に伴い、平成 29 年 6 月 26 日工事立会を行い、これにより一辺 5.2 ~ 5.6 m のほぼ正方形を呈すことが判明した。

S-005 (S-005 第 15 ~ 19 図)

2 工区東側にあたる J-29・30 グリッドにおいて検出。これも S-004 と同じく遺構の半分は調査区外に存在する。全体は径 8 m を測る大型の遺構である。西端には僅かであるが硬化面、また中央には方形の土坑が検出された。ピットは P 1・6・4・8 が円形に並び、その内側に P 2・3 が方形に並ぶようである。また P 4 には P 5、P 8 には P 7 の小ピットが近接し、これらはそれぞれの主柱を補強するものであろうか。これらの情報から大型円形建物の可能性が高く、その条件として遺構西端にはプランに沿う溝が存在する。これは湿気取りなどの竪穴住居に見られることが類例として挙げられる。

遺構の時期は中央から西端にブロックで出土した弥生中期土器からこの時期の遺構であろう。また全体は円形プランであり、その径は 8 m 強を測り、かなり大型の遺構である。本調査終了後、本体工事に伴いこの遺構の工事立会（平成 29 年 6 月 29 日）を行い全体のプランを確認した（第 15 図）。この遺構は生活をした空間であろうが、出土遺物に乏しく、今後の類例を待ちたい。近年では上南郷遺跡（熊本県 2017）の径 6 m 強の円形プラン「3 号竪穴建物」はこの遺構に酷似し、時期も中期後半と比定されている。

出土遺物はこの遺構時期の弥生中期土器（18 ~ 20）。21 は台石でありその平面はやや座み擦痕も認められることから、住居地内での食物の磨り潰し行為に伴う食に関する道具であろう。また 22・23 は磨石で原型を保っており、この 21 とセット関係を想定させる遺物である。また埋土中には縄文後期土器、土師器などが見られたことも追記しておきたい。

S-006 (S-040 第 20 図)

2 工区東側にあたる I・J-27・28 グリッドにて検出された。主軸は N-5° -E、長軸 3.7m 短軸 3.5m で方形を呈する。P 1 は遺構隅に位置し、またプランを切っているため柱としては判定が困難である。柱

痕跡としてはP 2・3が該当する。硬化面、焼土等の検出はなく、また時代特定の遺物も出土しなかつたが、竈不在やそのプランから本遺跡での弥生期の住居の一つとして想定した。

S-007 (S-041 第21図)

2工区東側にあたるi・j-27、J-28グリッドにて検出された。大半をS-006に切られているため、詳細は不明であるが、主軸はN-9°-E、残存では長軸4.2m 短軸3.1mでやや長方形を呈するか。S-006が弥生期と想定しているので、この時期より古くなることになる。遺構の北東位置より台石(24)が出土している。川原石を転用したもので、平面に擦痕が認められ、また敲打痕もある。本遺跡最大の遺物で最大幅28cmを測る。平面に擦痕があり、また打痕も一部認められることから台石として使用したのであろう。また側面には僅かであるがホゲット状の僅みがあり、これも作為が窺われることから、この遺物は平面だけでなく、やや高さのある側面も利用したのであろう。

S-008 (S-042 第22～24図)

2工区東側にあたるj-24・25グリッドにて検出された。遺構南西側を後世の遺構で切られているため、詳細は不明であるが円形または楕円形を呈するのであろう。25は黒髪式土器の甕の口縁部から胴部上位資料で、これにより弥生中期の遺構とした。

他に出土遺物として26・28は打痕のある敲石であるが平面にも打痕が認められるため、この敲石が台石状の使用をされていたことも窺わせ、27・29は棒状の敲石で先端に敲打痕が確認される。いずれも片手で操作できる大きさである。31も同様の小型敲石で先端に多くの打痕が確認される。またこの遺物は磨痕状の平面を持つため、小規模ながら敲石と磨石の機能を有している。30は円盤状の磨石・敲石であるが、この平面部に上位4cm、底部0.8cmのホゲットを有している。孔は摩耗し明らかに使用されており、その用途は不明であるが発火具としての使用も考えられる。33は磨石・敲石で原型はさらに大型であったであろうが、残存部はその大きさと重量では片手で持ちやすく、また使い易いことから、故意に破損後に敲石として使用したのであろうか。32は扁平の楕円形の磨石で、両平面に磨痕が確認され、34は楕円形の磨石・敲石であるが、その平面は磨痕が認められ、これも敲きと磨りの両機能を併せもつ石器である。

(古代)

S-009 (S-011 第25・26図)

1工区G-2・3グリッドにおいて検出した主軸N-59°-Eの竈穴住居跡である。長軸3.4m 短軸3.1mで西側端部を搅乱により削平されている。

遺構検出時において竈を伴う楕円形の遺構を確認した為、十字ベルトを設定し、竈を残して掘削を行い、ほぼ竈に沿い南西壁付近まで直線状の硬化面を検出した。柱穴は4基(P 1～4)検出し、いずれも径約0.4m深さ約0.15～0.4mの規模である。これにより4本柱の竈付き住居地となる。遺構の時期は35の土師器片、36の須恵器片から古代の竈穴住居とした。硬化面から住居地の生活行動が窺中心であったことが窺える。37は大型砥石で、その使用状況は平面的ではなく溝状の痕跡使用をされたものである。全体に余すことなく使用痕があることから、素材として優れていたのであろう。

38も大型砥石であるが、37と異なるのは三角錐状の原石の面を利用していることで、使用目的によるものであろうか。本遺跡で使用痕が異なる大型砥石の出土はこの住居地の状況を思考させる一助にもなりえる遺物である。

S-010 (S-012 第 27 図)

1 工区西側の F・G-1 グリッドにおいて検出したが、遺構は調査区外にも延長することが想定されるため、その全体は不明であるが、主軸は N-70° -E であろう。また遺構中央部には後世の構造の搅乱を受けており、この搅乱周囲に硬化面が点在していることから、主な硬化面はこの搅乱により消滅したのであろう。残存として長軸 3.9m 短軸 3.5m を測り、連続した柱穴は 3 基 (P 1 ~ 3) 検出した。遺構は調査区外に延長したならば、この遺構は本遺跡ではやや大型の竪穴住居跡であり、調査区外には柱穴の存在と、土師器片 (39) の出土から竈の存在も窺える。

S-011 (S-013 第 28 ~ 30 図)

1 工区 E-2・3、F-2・3 グリッドにおいて検出した。東側に後世の直線状搅乱を受けている。長軸 4.3m、短軸 3.8m を測出した。主軸は N-60° -E である。床直での検出であるため、従って埋土は僅かに第⑦層のみである。遺構東側端部に 1.7 m × 1.2 m の焼土、炭化物が混在している粘土面が存在しており、このプランは竈と想定される。柱穴は 4 基検出され、いずれも径約 0.25m、深さ約 0.1 ~ 0.45m の規模である。また本遺跡の竈付住居は 4 本柱の傾向にある。遺構の時期は竈から出土した土師器片から古代の竪穴住居とした。40 は楕円形を有した磨石であるが、打痕も認められることから敲石としても使用していたのであろう。全体は扁平で平面に磨痕が認められることから、小型台石としても使用したのであろうか。

S-012 (S-017 第 31 図)

1 工区 G-1、H-1・2 グリッドにおいて検出し、遺構西側は調査区外である。長軸約 3.6m 残存短軸約 3.5m を測るが主軸は N-46° -E である。この遺構も床直であり埋土は僅かに上層と下層 (第④・⑤層) である。遺構東側端部に 1.3 m × 1.7 m の焼土、炭化物が混在している粘土面が存在しているため、このプランは竈と想定され、またその土層はレンズ状堆積で竈が崩壊した痕跡であろう。柱穴は 1 基の検出に留まったが、搅乱、または調査区外に存在するのであろう。遺物は完形の須恵器の蓋 (41) で、竈から出土した。これまで土器片の出土の傾向の中で、この完形遺物は住居やそれに伴う竈の廃棄儀礼のものであろうか。本遺跡では特異である。また天井部に、三角形に X 印のヘラ書きが施される特異な遺物である。6 世紀後半か。

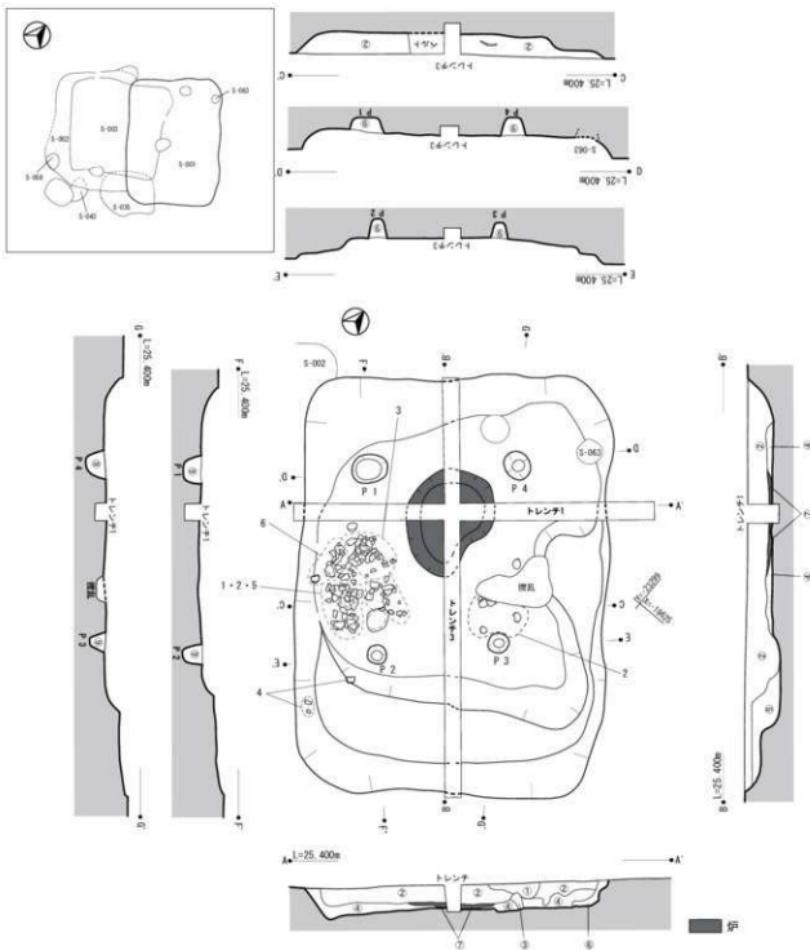
S-013 (S-022 第 32 ~ 34 図)

1 工区東側にあたる D-6、E-6 グリッドにて検出された。主軸は N-50° -E であるが S-053・056・034・033・045 と重複し、その全ての遺構より古いものである。南東から北西に導水管を通すための搅乱がこの遺構を貫いており、これによりその情報の大半を消失し、また南端部は調査区外であるが、そのプランは長軸 4.2m 短軸 3.8m を測る。東端部に竈が存在しているが、この遺構の特筆すべきところは竈支柱 (43) が出土したことである。これは土製で全体は緩やかに湾曲し、端部には使用土器を支える面取りが施されている。竈周囲の搅乱等で破壊されたため、惜しまるくは 1 点の出土であったが竈機能を窺い知る貴重な遺物である。埋土は暗褐色砂質土で地土がブロック状に構成されている。更に灰褐色砂質土で竈壁を構成している。周辺から赤褐色の焼土が見られた。ピットは 1 基検出されたが、他ピットの推定位置には搅乱が切り合っており、他に検出することはできなかった。

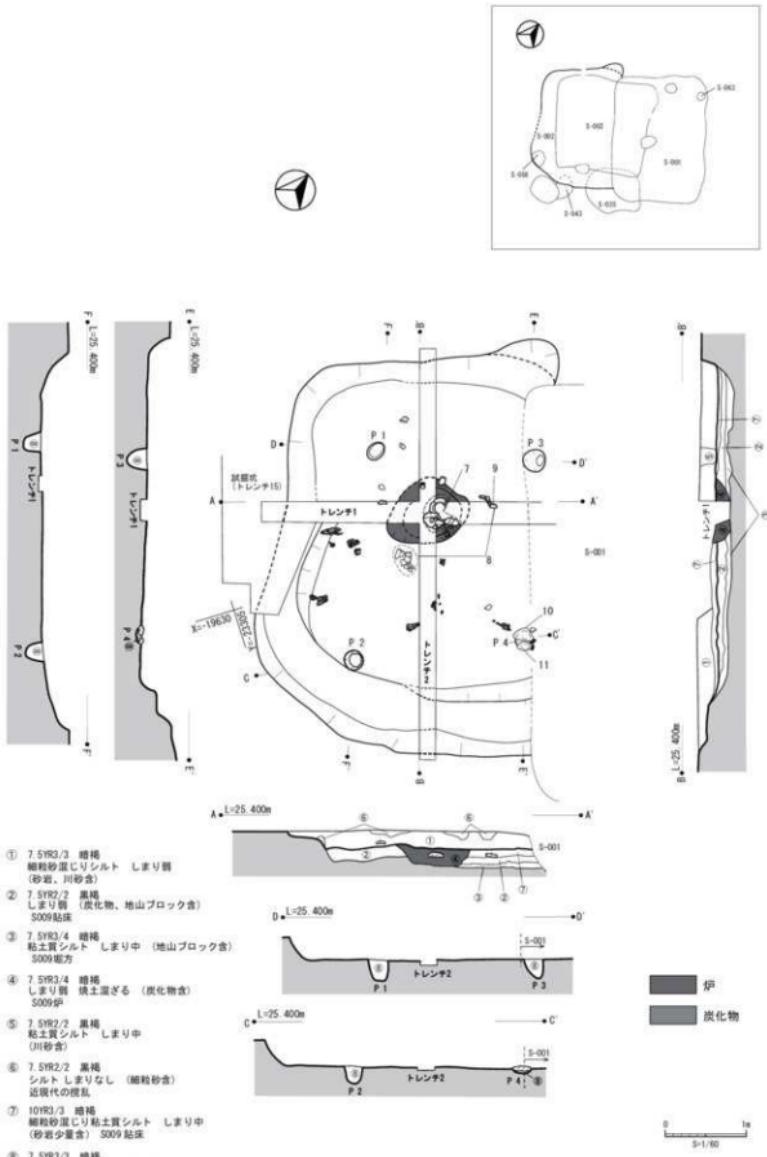
土師器甕の 42、石器の 44 ~ 46 は何れも火受けの痕跡が認められ、特に 44 と 45 はその材質が砂岩質のこともあり風化激しく、長い時間の加熱を想定される。これらの遺物に共通することは加工が施されているということで、これは火熱痕から竈などの支柱的な用途であろうか。

S-014 (S-061 第 35 ~ 38 図)

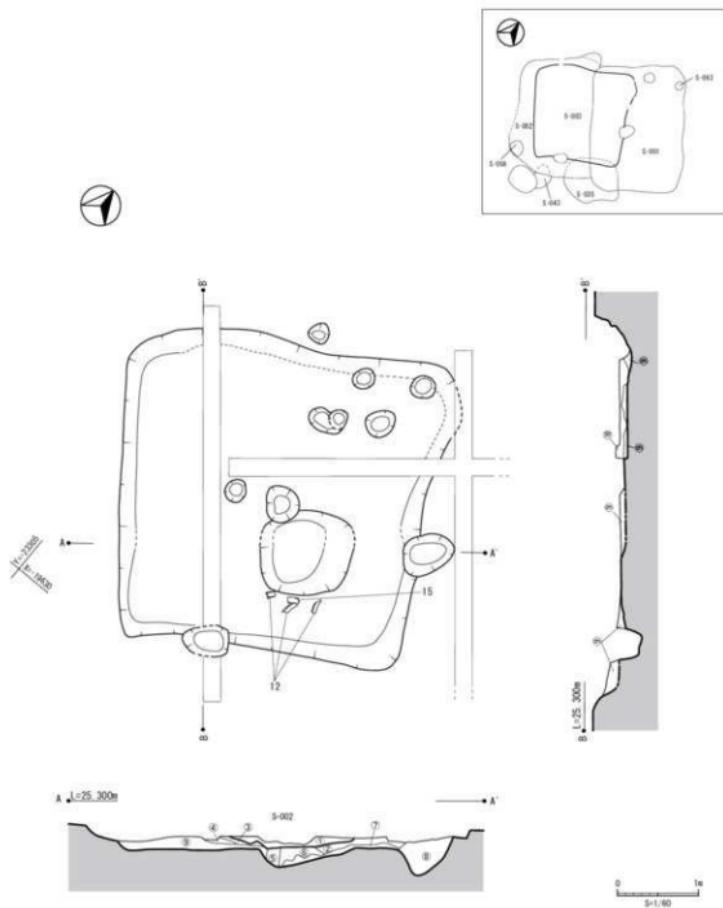
1 工区 D-3・4、E-3・4 グリッドにおいて検出した。主軸は N-22° -E であり、長軸 5.4m 短軸 4.9m を



第5図 S-001完掘状況

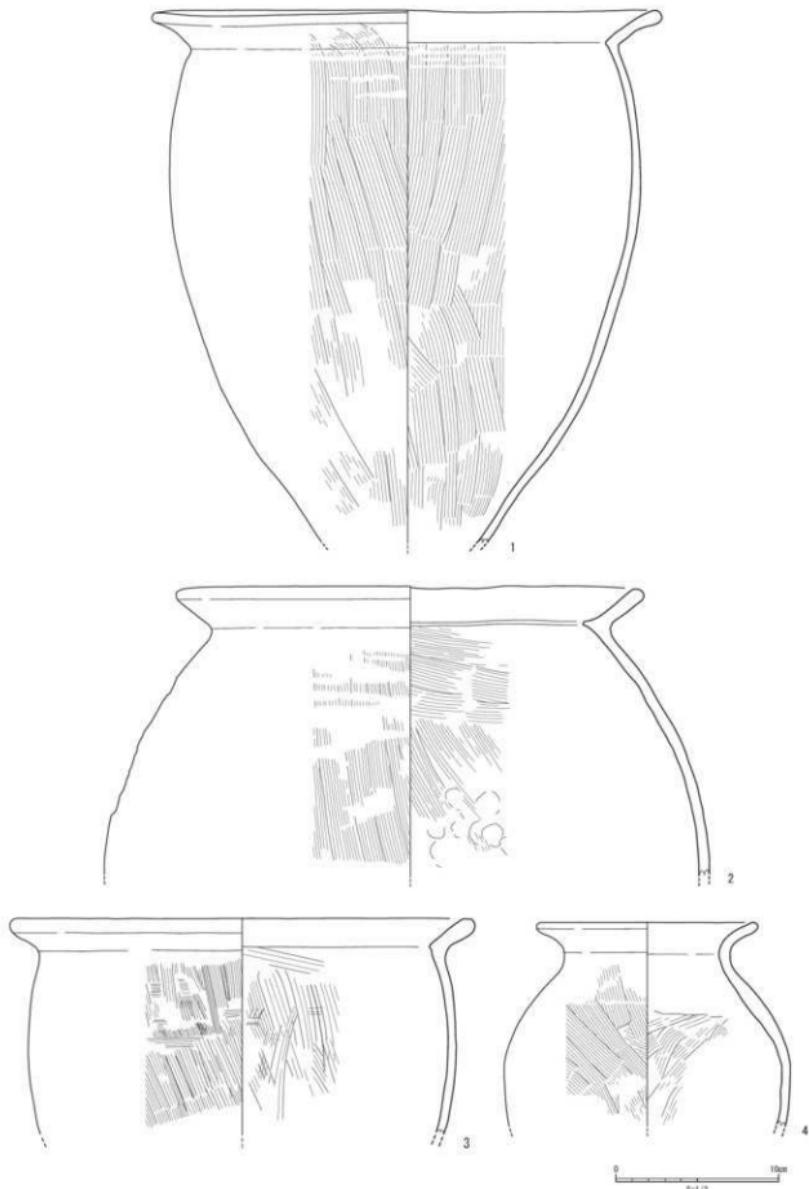


第6図 S-002完掘状況

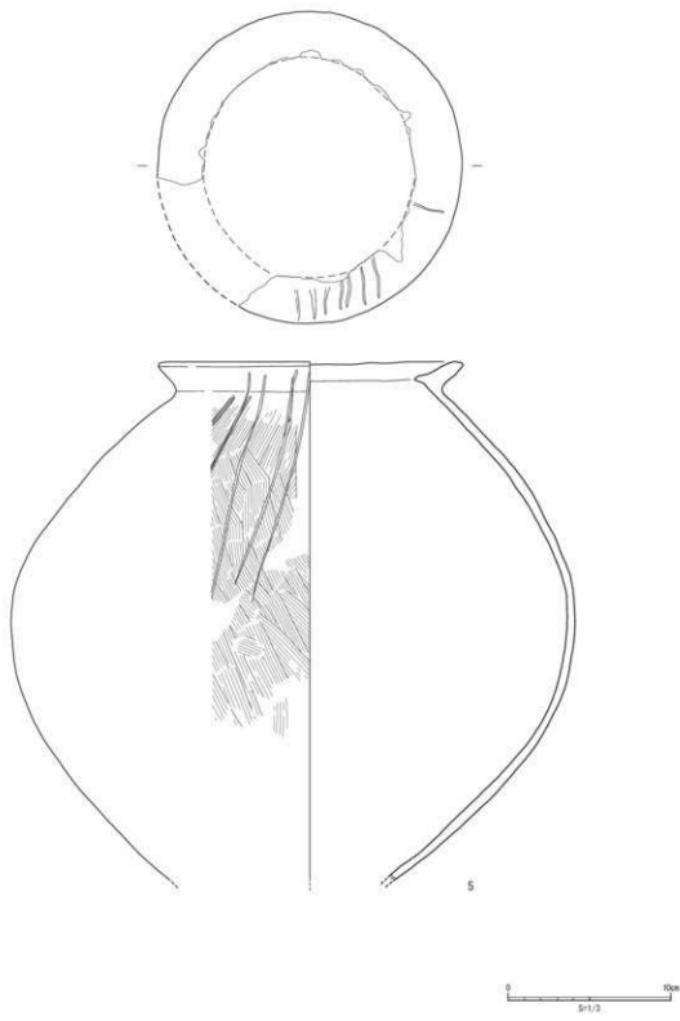


- | | |
|--|---|
| ① 7 SYR2/3 構造場
砂質シルト しまりやや弱い 細粒砂混じる (S-002前方) | ⑤ 7 SYR2/3 構造
シルト しまり弱く細粒砂混じり2cmの砂粒混じる |
| ② 7 SYR2/3 構造
砂質シルト しまりやや弱い 細粒砂混じる
7 SYR6/8褐色砂質シルトのブロック土含む | ⑦ 7 SYR4/4 構
シルト しまりやや弱く細粒砂混じる |
| ③ 7 SYR2/2 廉場
砂質シルト しまり弱い | ⑧ 7 SYR4/6 構
砂質シルト しまり弱く細粒砂混じる |
| ④ 7 SYR4/3 構
砂質シルト しまり弱く細粒砂混じる | ⑨ 7 SYR3/4 構
シルト しまり弱く細粒砂混じる |
| ⑤ 10YR3/4 廉場
砂質シルト しまり弱く細粒砂混じる | ⑩ 7 SYR3/3 構
砂質シルト しまりやや強く炭化物、砂岩を含む |

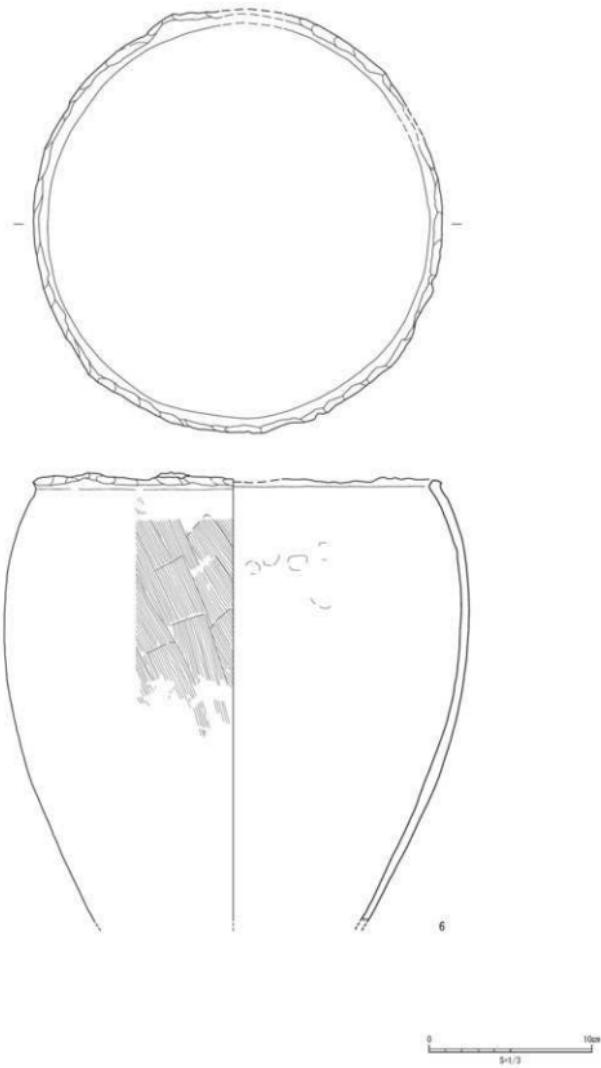
第7図 S-003完掘状況及び遺物出土状況



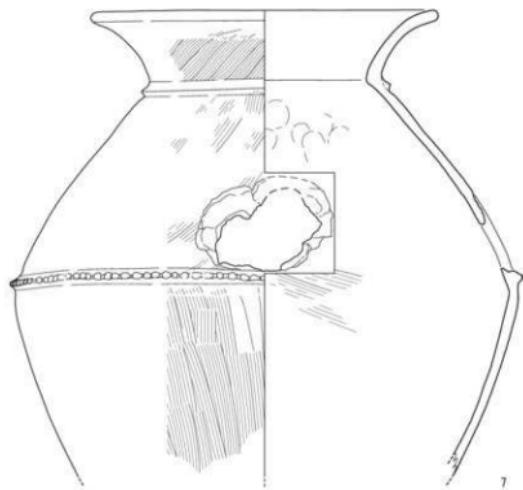
第8図 S-001出土遺物実測図1



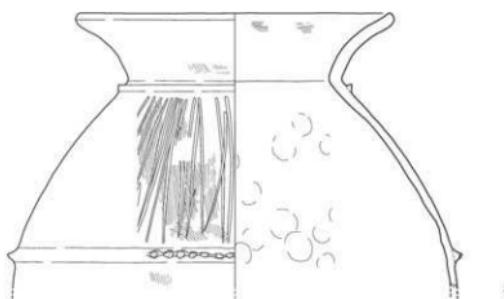
第9図 S-001 出土遺物実測図 2



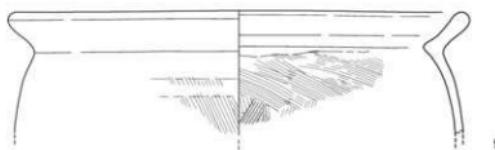
第10図 S-001出土遺物実測図3



7



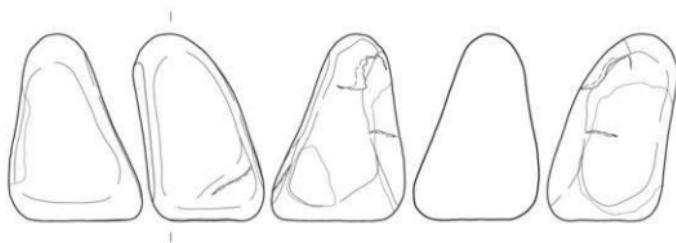
8



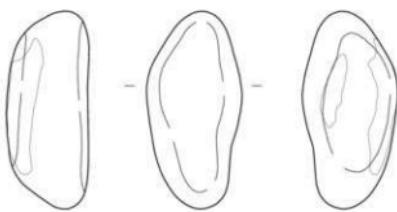
9



第11図 S-002出土遺物実測図1



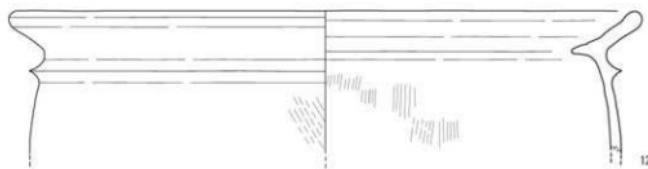
10



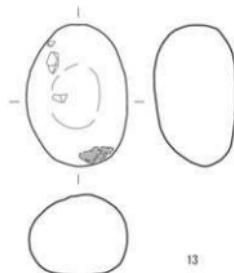
11

0 10cm
S-1/6

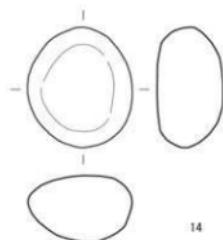
第12図 S-002出土遺物実測図2



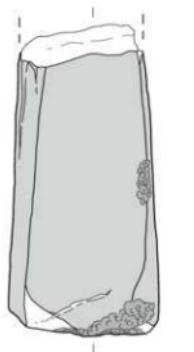
12



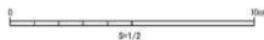
13



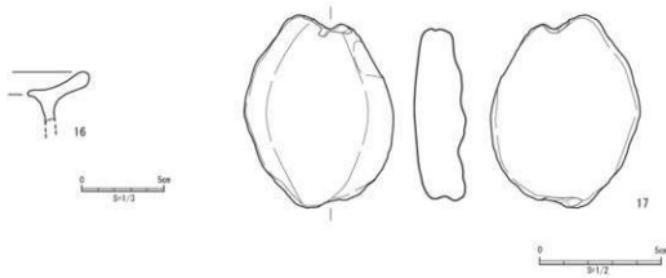
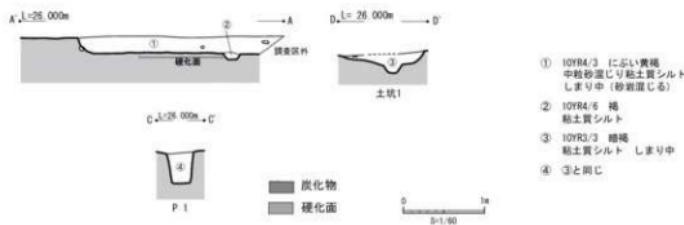
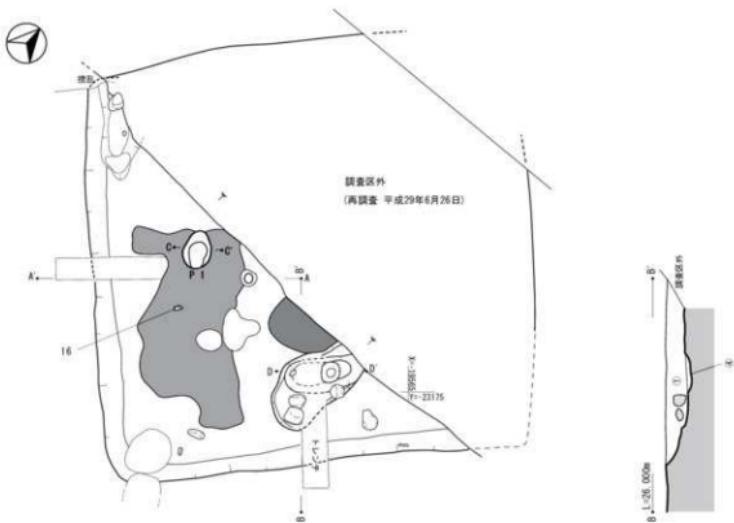
14



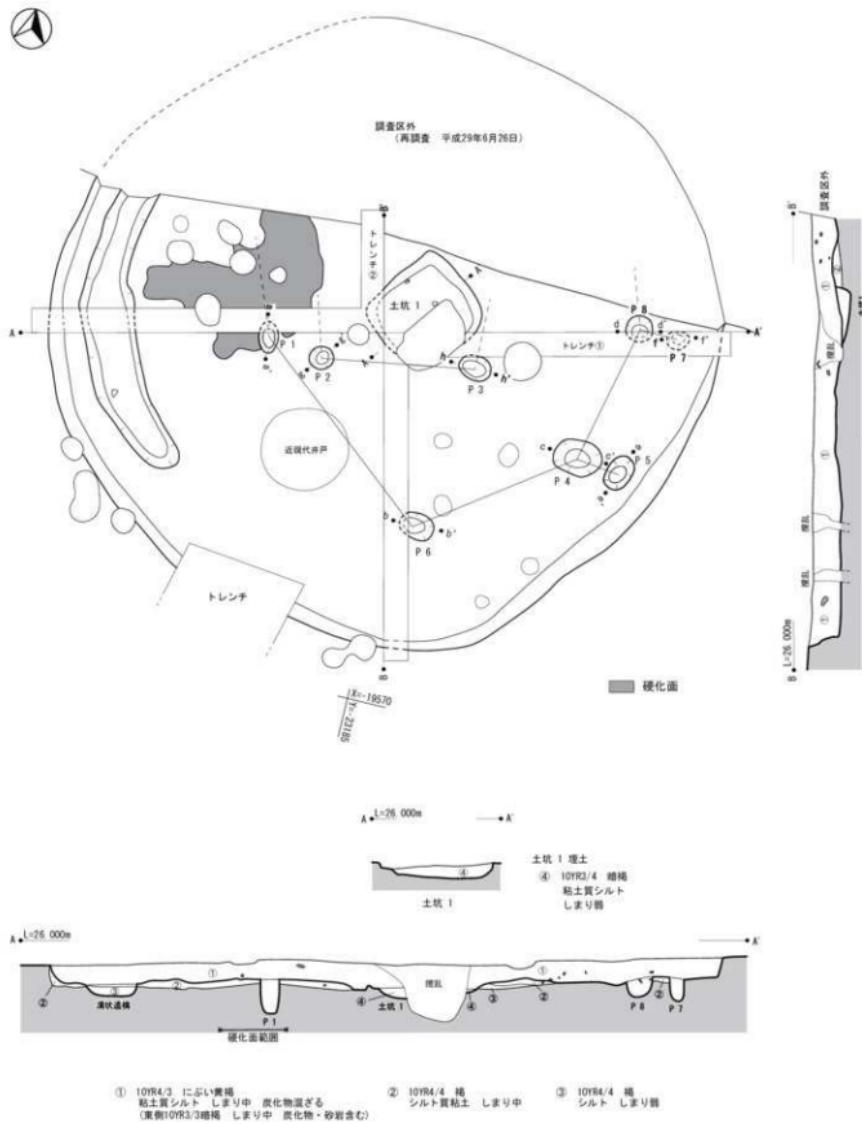
15



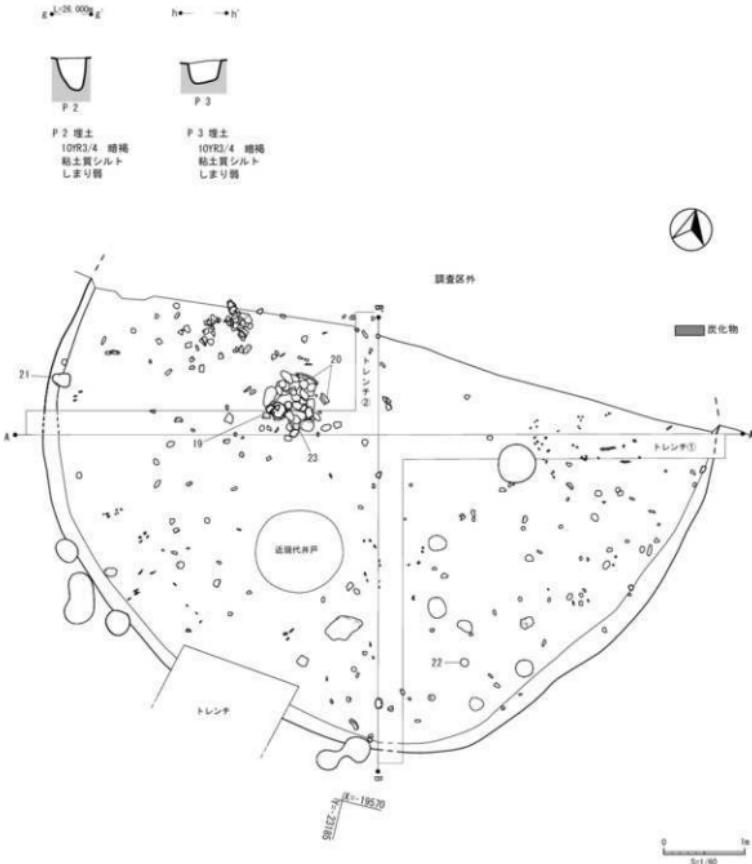
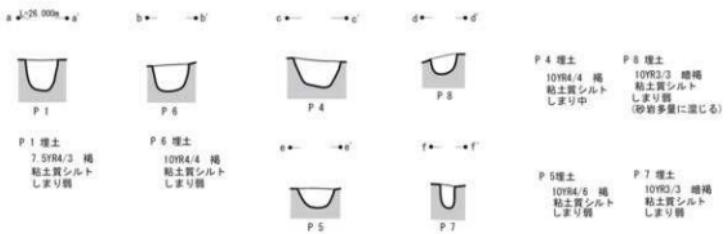
第13図 S-003出土遺物実測図



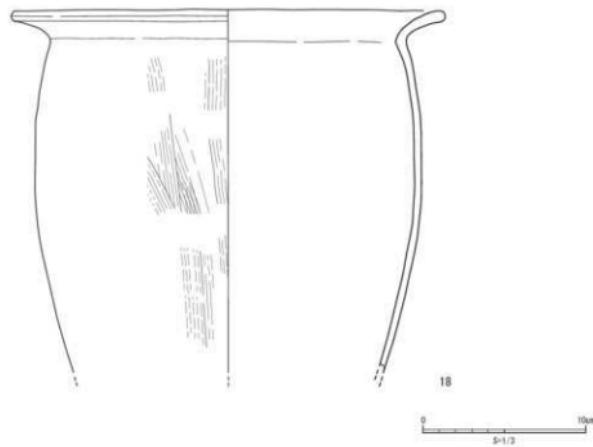
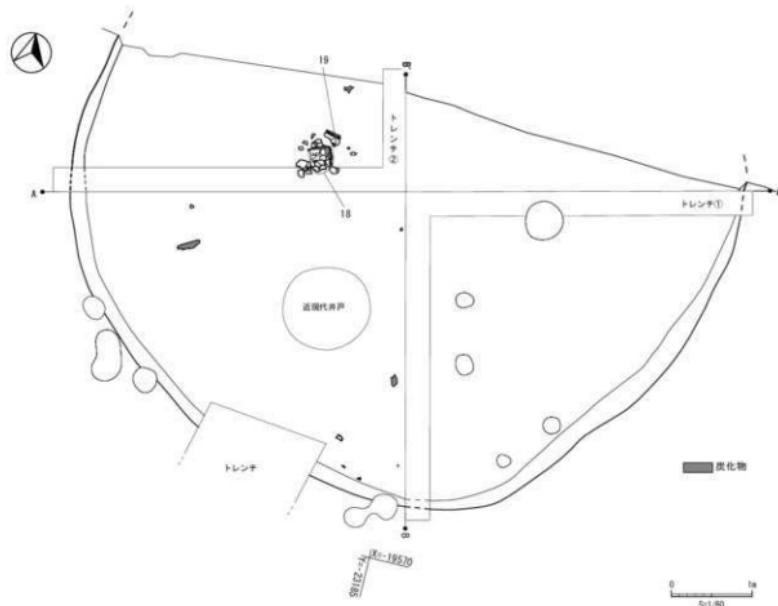
第14図 S-004完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



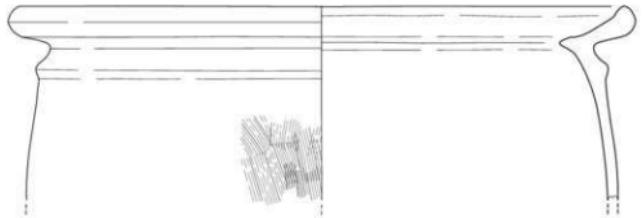
第15図 S-005完掘状況



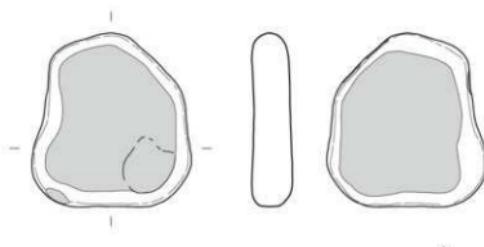
第16図 S-005 P 1 ~ P 7 断面図及び上層遺物出土状況



第17図 S-005下層遺物出土状況及び遺物実測図

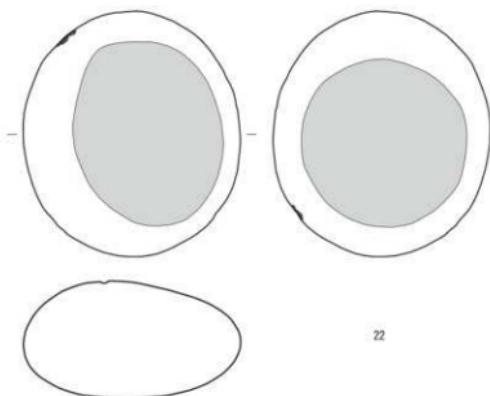


0 10cm
5 1/2

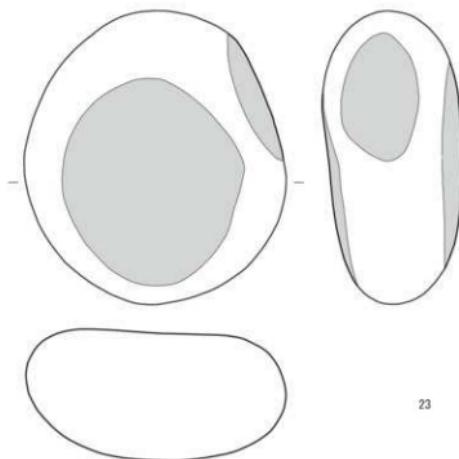


0 10cm
5 1/6

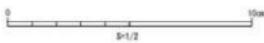
第18図 S-005出土遺物実測図1



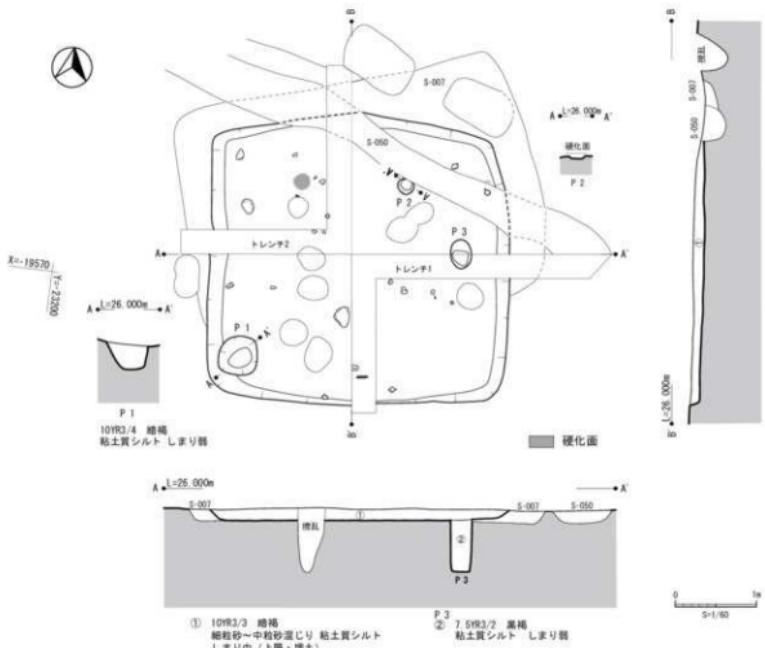
22



23



第19図 S-005出土遺物実測図2



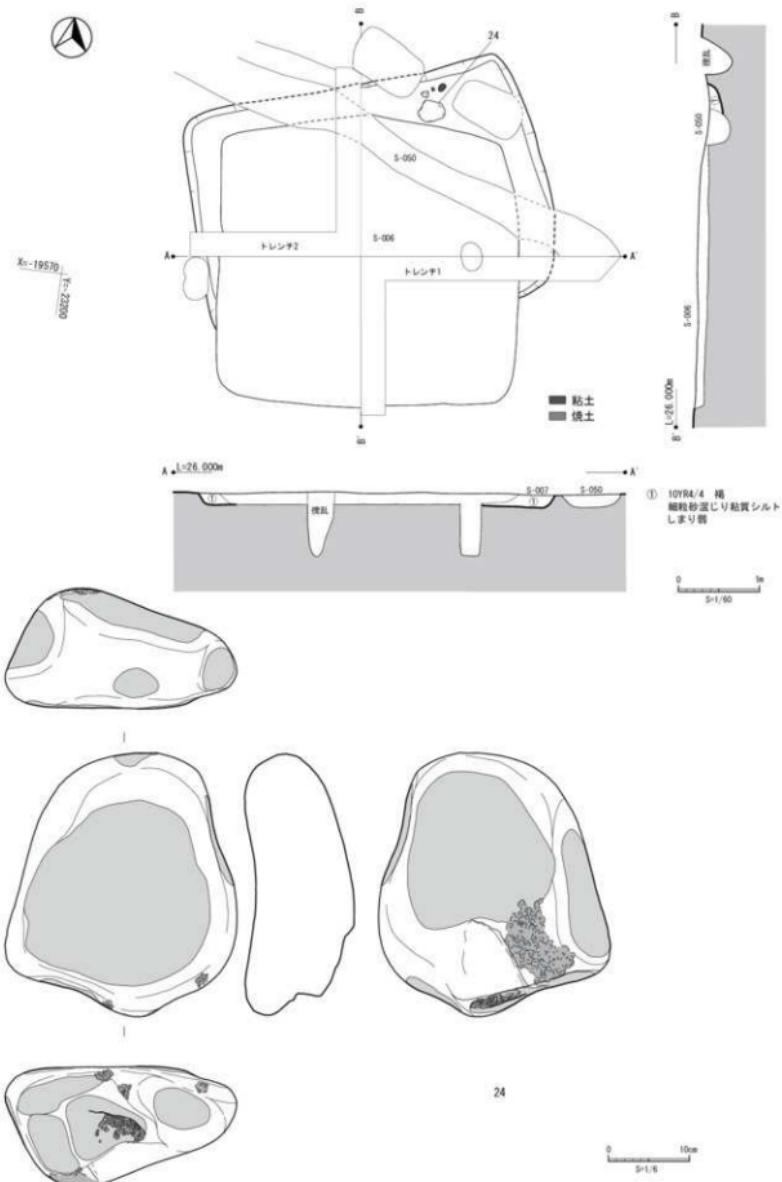
第20図 S-006床面検出状況及び遺物出土状況

測るが、南側はS-047に、西側はS-048に、北側及び東側は擾乱により削平されている。1工区では最大の遺構である。検出時、焼土及び白色粘土を検出したため、竈付き堅穴住居と想定し遺構検出を行ったところ方形の遺構を確認した。硬化面は僅かであるが一部に検出された。柱穴は2基確認出来た。他に2基存在の本來は4本柱と思われるが、S-048と擾乱により削平されている。

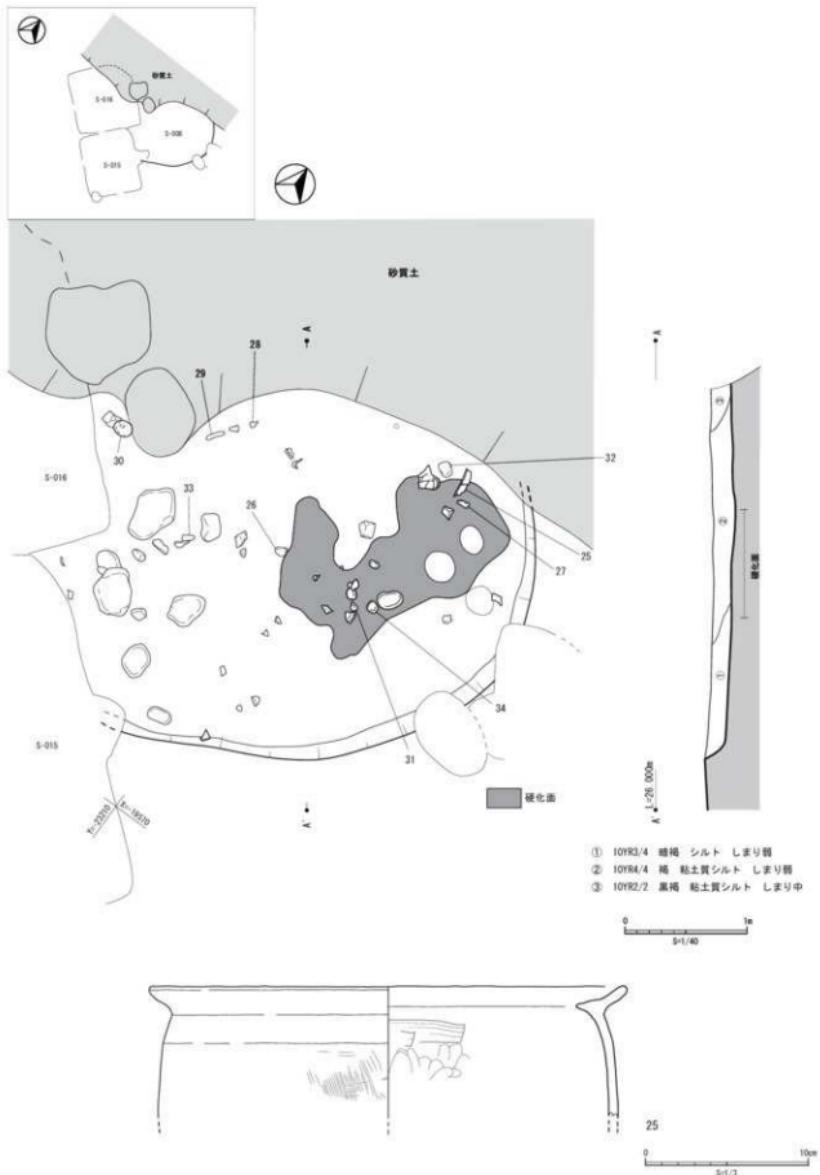
竈には長軸35cmの被熟石(49)が出土している。自然面も残しているが棒状に加工され四面を呈する。火受け痕もあり、この遺物は出土状態と形状から竈支柱と想定される。50～52は大型遺物で51はやや三角錐状、50・52は方形に面取りを行っている。擦痕など認められないことや、出土地と火熱痕があることから竈に伴う遺物であろう。土器は土師器甕口縁部片(47)と土師器坏(48)が出土した。この48は底部に丸く穿孔が故意に施されているが、これは再利用のためか、廃棄儀礼の範疇かは不明であるが、資料提示として掲載した。

S-015 (S-010 第39・40図)

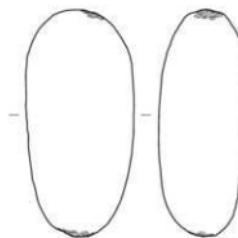
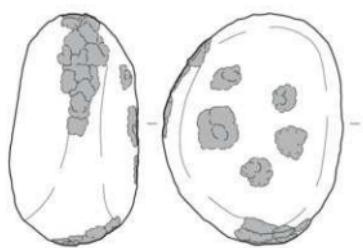
2工区中央にあたるi・j-24・25グリッドにおいて検出。主軸はN43°E、長軸2.9m 短軸2.5mを測る。遺構北東位置に竈が存在していた。住居地内には硬化面も確認され竈を中心とした生活の様子が窺える。柱痕跡は確認できなかった。竈内より53が出土した。土師器口縁部から胴部下位資料で竈で使用した煮炊用の土器であろう。



第21図 S-007完掘状況及び出土遺物実測図

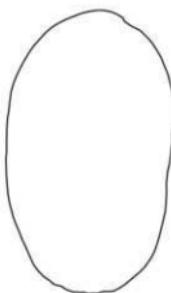


第22図 S-008完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

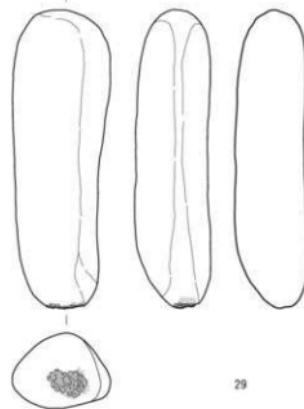
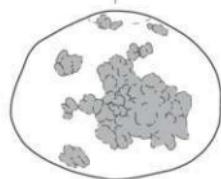


26

27

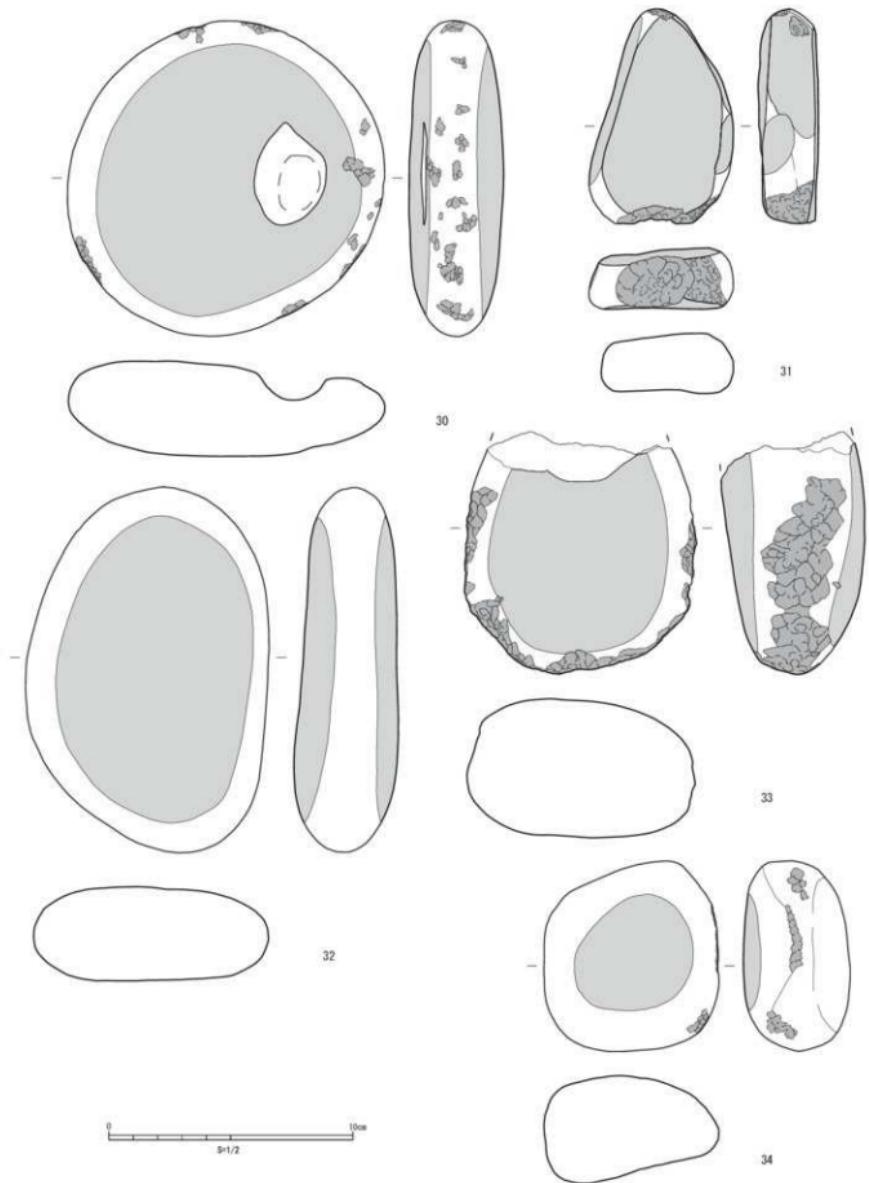


28

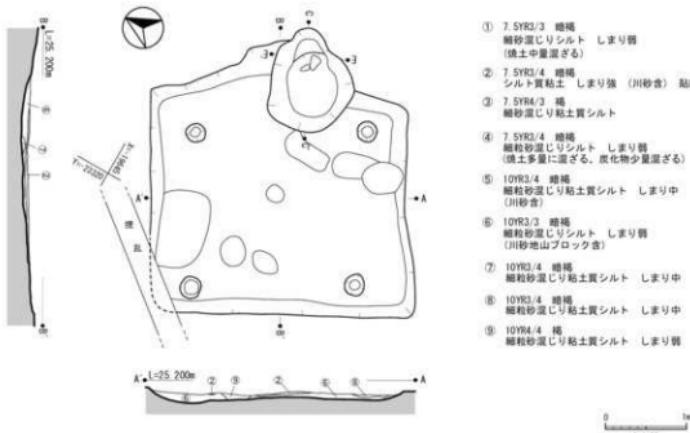
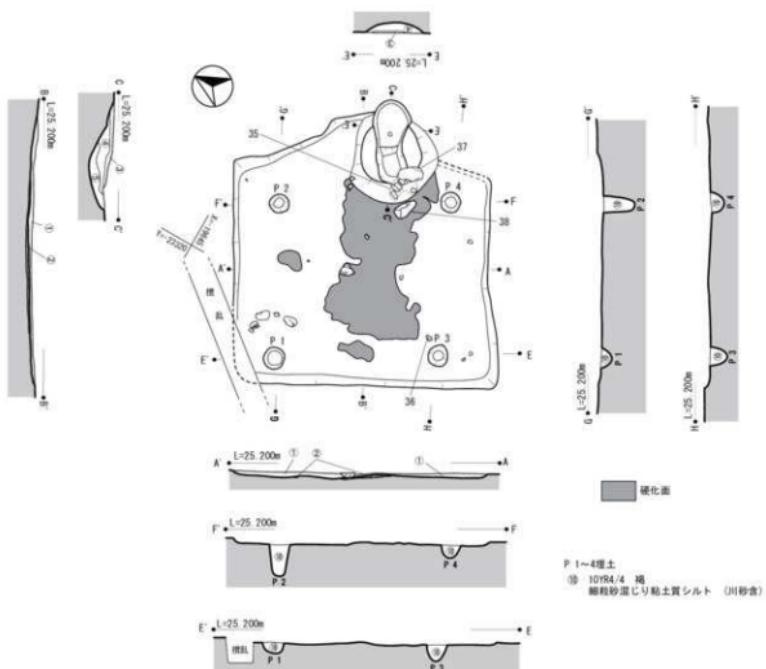


29

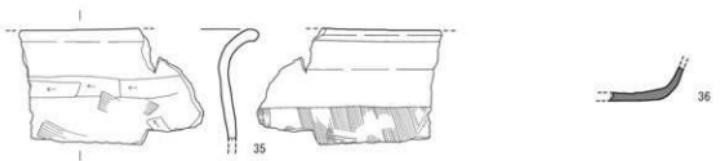
第23図 S-008出土遺物実測図1



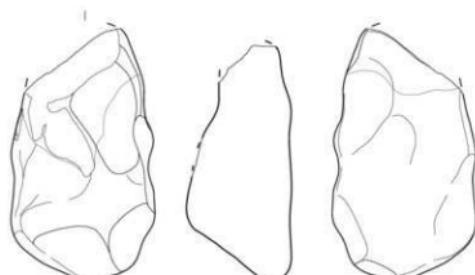
第24図 S-008出土遺物実測図2



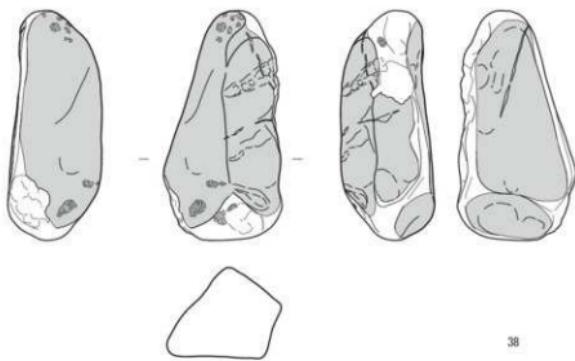
第25図 S-009完掘状況及び遺物出土状況



0 10cm
3-1/3



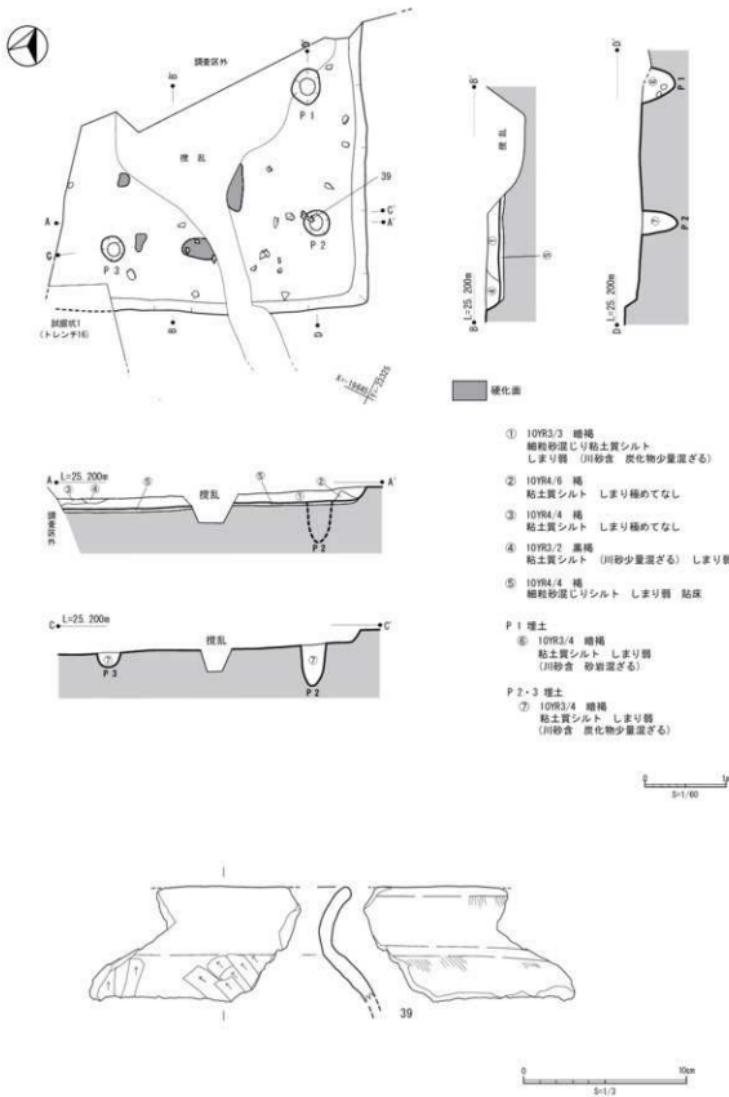
37



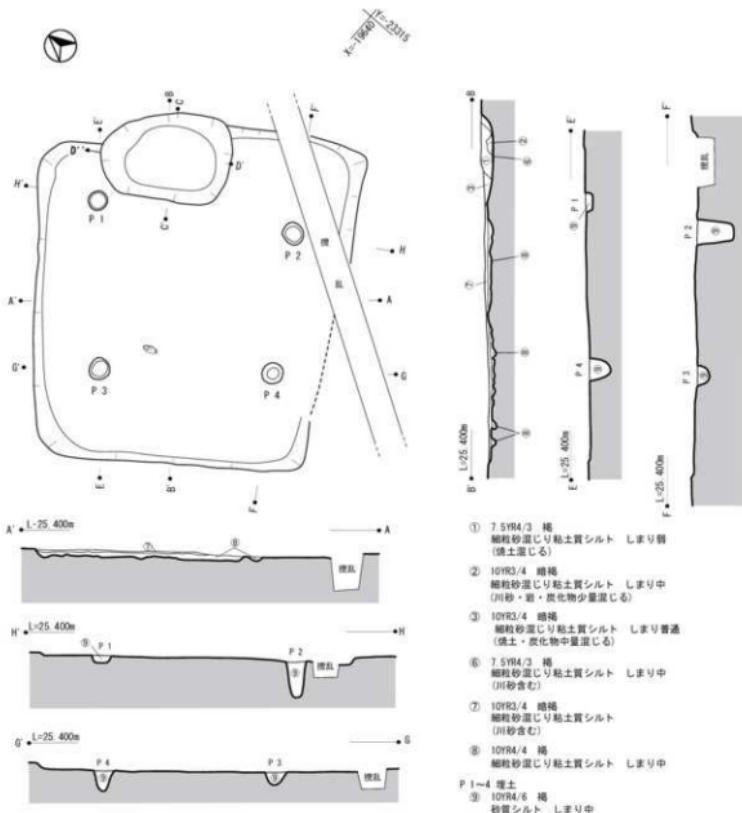
38

0 10cm
3-1/6

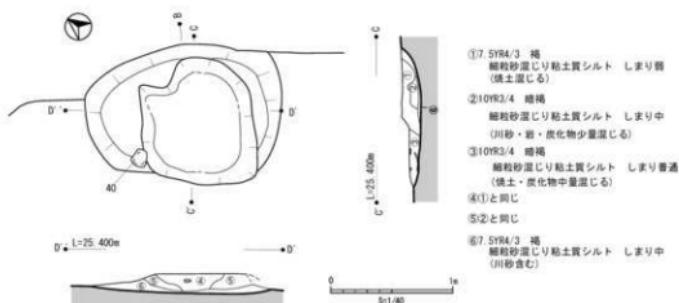
第26図 S-009出土遺物実測図



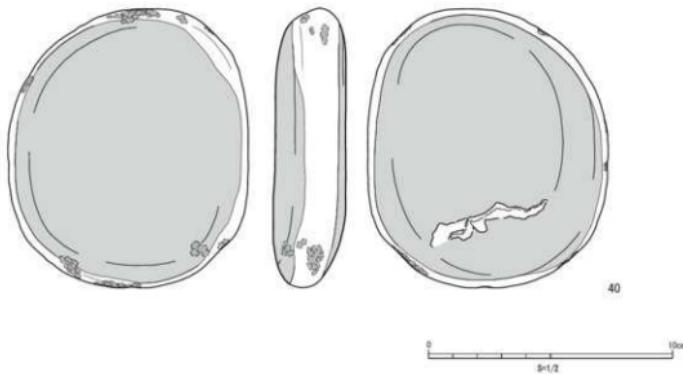
第27図 S-010完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第28図 S-011完掘状況



第29図 S-011竪断面図及び遺物出土状況



第30図 S-011出土遺物実測図

S-016 (S-011 第 41・42 図)

2 工区中央にあたる J-24 グリッドにて検出された。主軸は N-44° -E、長軸 3.1m 短軸 3.0m の方形を測る。遺構北東部に竈が存在するが、一部擾乱により消失している。竈近くに僅かであるが硬化面も確認された。また遺構西側には溝状の掘り込みがあり、これは住居地構築の際の最初の掘り込みであろう。

54 は須恵器蓋で天井部は平たく、つまみは平坦である。また口縁端部はやや屈曲し内側に至る。55 は小型の磨石で平面に窪みと側面にも僅かながら磨痕が確認される。片手で簡単に操作できる形状と重量からコンパクトな砥石としても使用したのであろう。56 は蔽石であるが平面に擦痕も認められるこだから、磨石としても使用したのであろう。

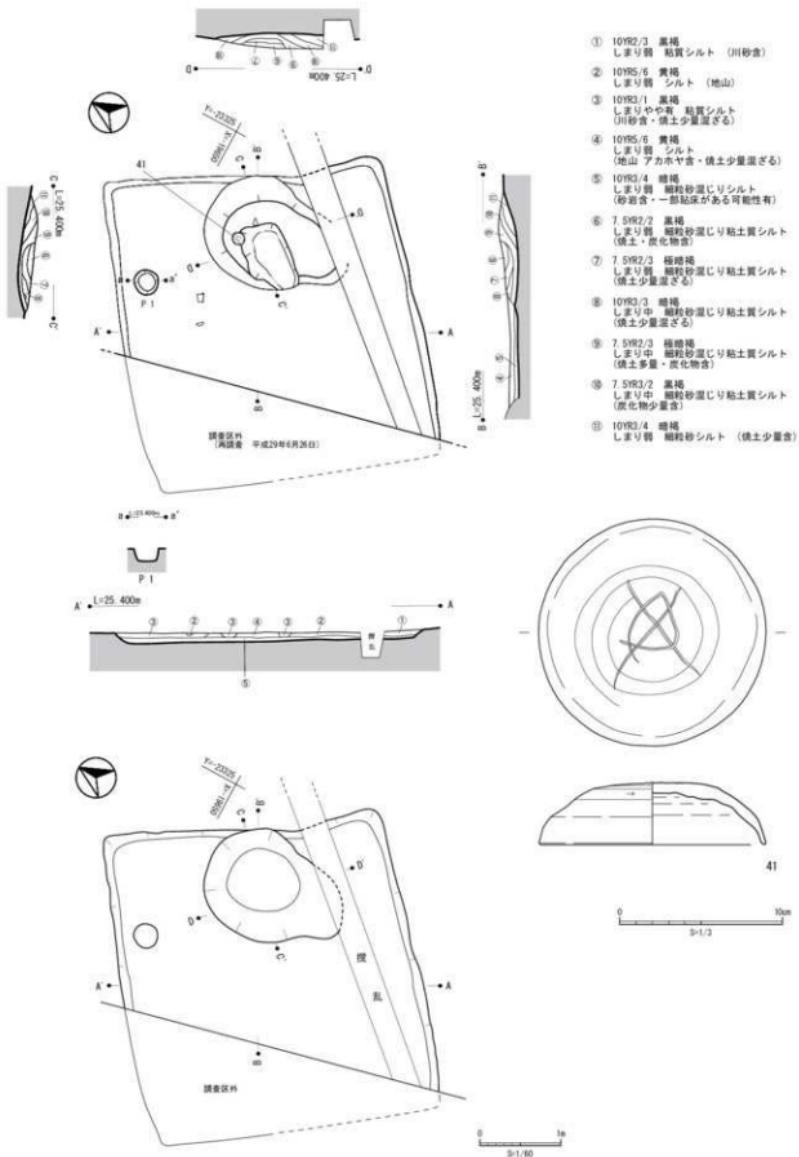
S-017 (S-014 第 43・44 図)

2 工区中央にあたる I・h-22 グリッドにて検出された。主軸は N-51° -W、一辺 2.8m の方形を測る。遺構全体に硬化面が確認されたが、竈や炉は検出されなかった。出土遺物から古代の住居と想定した。また第 44 図は下層の状況であるが、段差があるのは住居構築の際の掘り込み痕跡であろう。

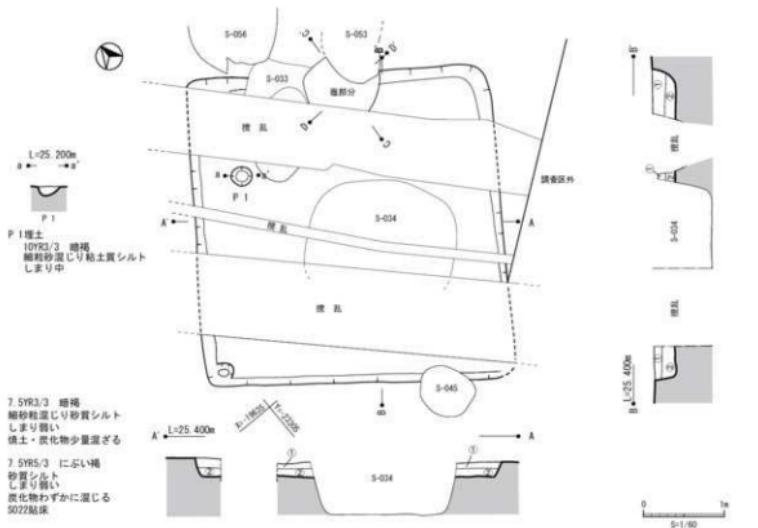
57・58 は須恵器である。57 は蓋でつまみ部は凸線を輪状に巡らせたもので、天井部は比較的平坦で、中位から端部附近にかけて下行し、さらにやや内側に曲げられ端部に至る。58 は甕の口縁部から頸部資料で内面は連続した同心円状の叩きが見られる。また石器の 59 は胡桃大の大きさで、上面に溝状と背面に平坦な擦痕が確認されることから、手に収めながら対象物を磨く可動式の砥石として用いたのであろう。

S-018 (S-015 第 45・46 図)

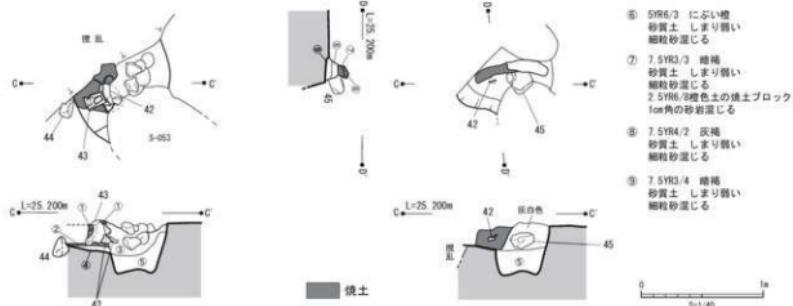
2 工区中央にあたる I-22 グリッドにて検出された。主軸は N-35° -E。これも一辺 2.6m の方形を測る。竈の周囲に硬化面も確認されたが、柱痕跡は確認できなかった。60 は移動式竈の底部片で二次焼成を受け、一部煤煙によるものか黒色化している。胎土は極めて粗く粗製の感を受ける。大型器であるため粗大な造りとなったのであろうか。61 は楕円形を呈した磨石で平面を主とし、また側面も使用している遺物である。片手での操作が可能な重量と形状である。62 は大型の蔽石で端部は激しく使用した打痕が残る。また平面は磨痕があることから面としての磨りも行われたが、一部 打痕も認められる。



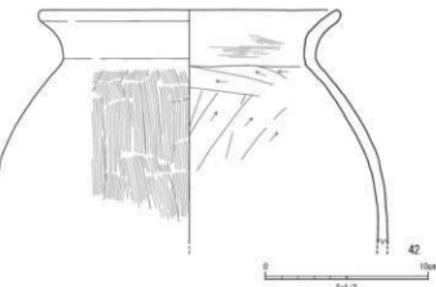
第31図 S-012完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



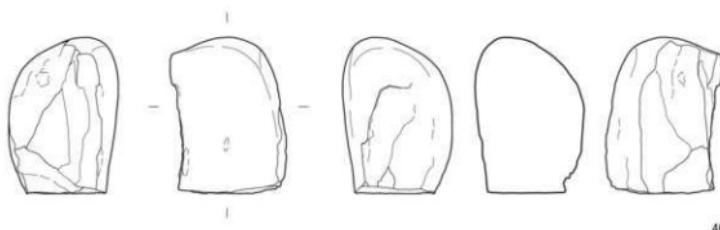
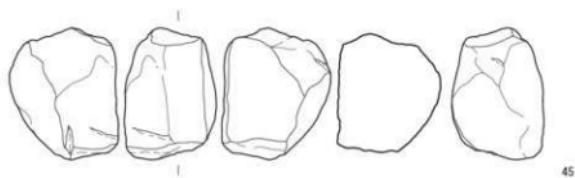
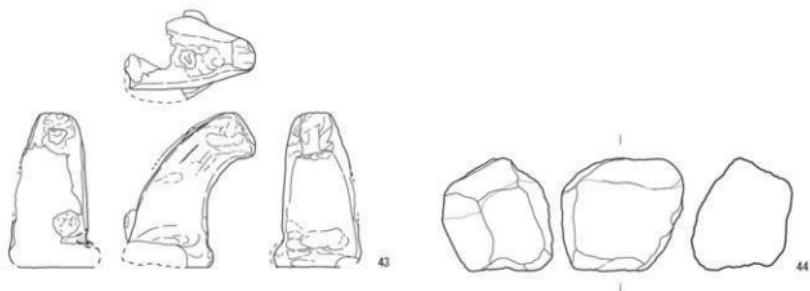
第32図 S-013完掘状況



- 7.SYR3/3 埋没
砂質土・しまり弱く炭化物及び2mm位の鐵土混じる
鐵土・SYR5/3褐色シルトしまり強い
- SYR2/4 埋赤塊
砂質土・しまりやや弱く細粒砂混じる 塵土
- SYR5/2 灰塊
砂質土・しまり弱く細粒砂混じる
- SYR3/6 埋赤塊
砂質土・しまり弱く細粒砂混じる 鉛方赤色変化部分
- 7.SYR3/4 埋塊
砂質土・しまりやや強く細粒砂混じる
SYR5/5分明塊 砂質土のブロック土混じる

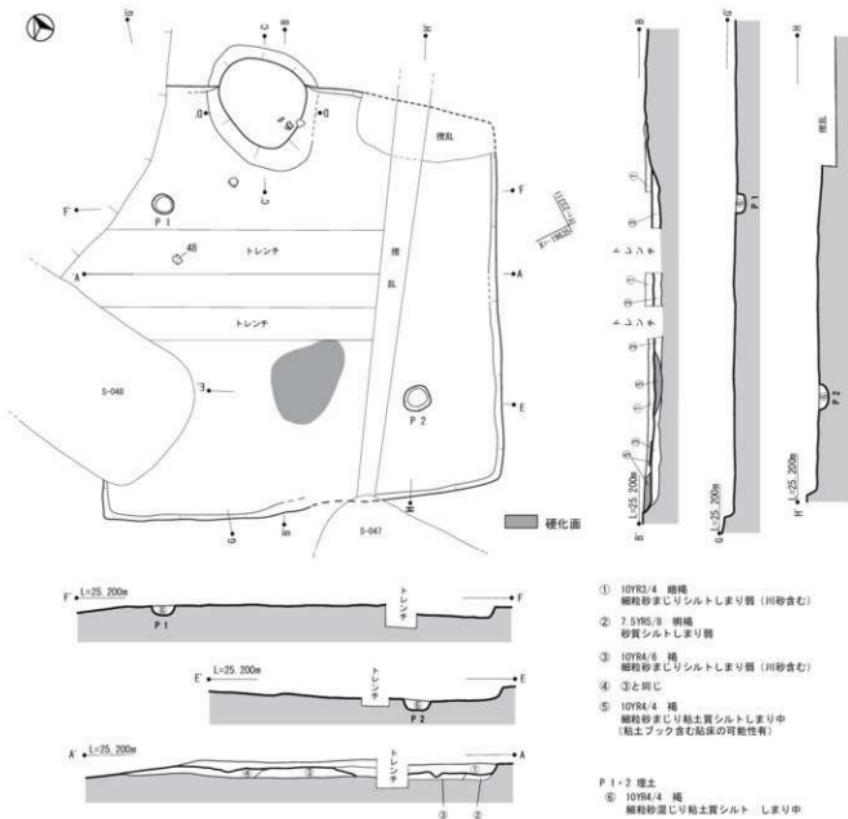


第33図 S-013出土実測図・遺物出土状況及び遺物実測図

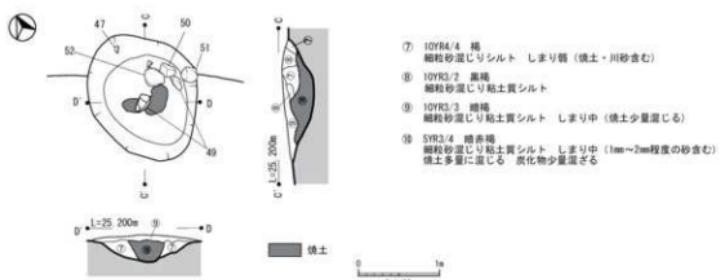


0
10mm
5:1/6

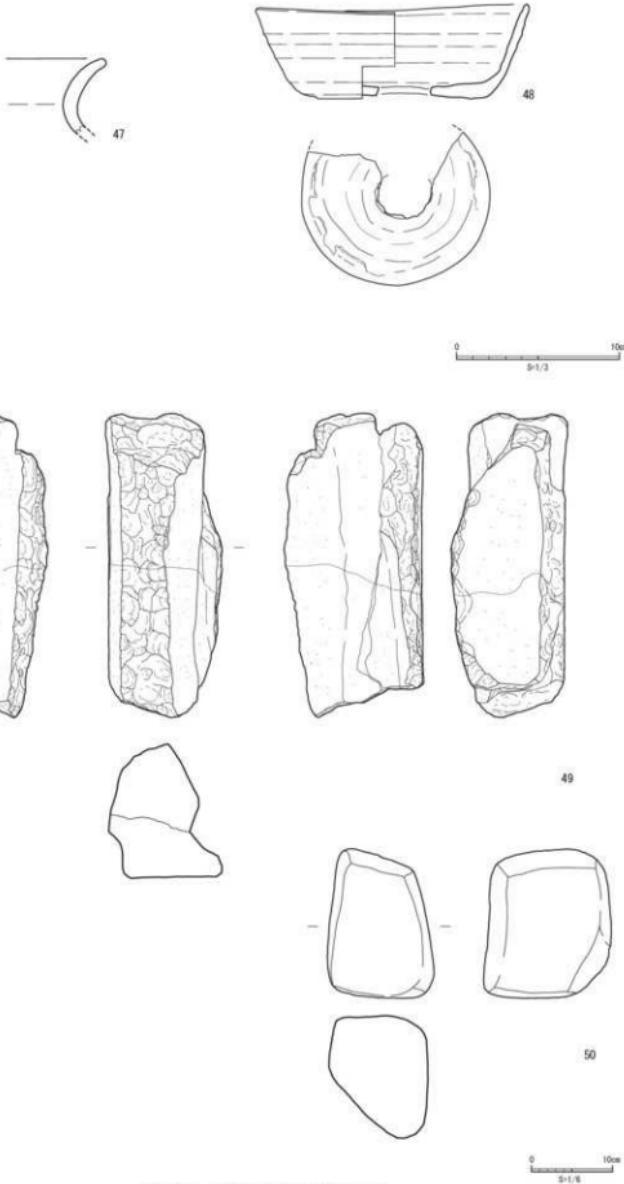
第34図 S-013出土遺物実測図



第35図 S-014完掘状況



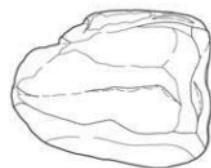
第36図 S-014竪実測図・遺物出土状況及び遺物実測図



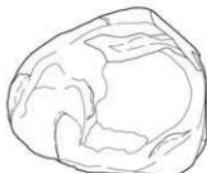
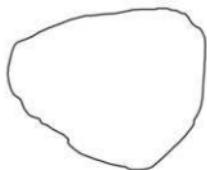
第37図 S-014出土遺物実測図1

第38图 S-014出土遗物实测图2

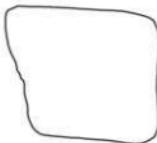
1:1.6
10mm

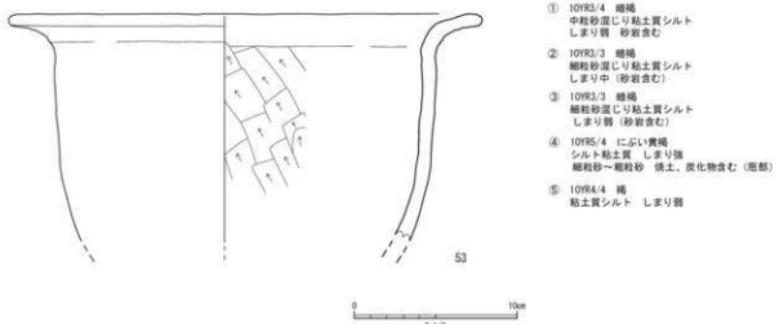
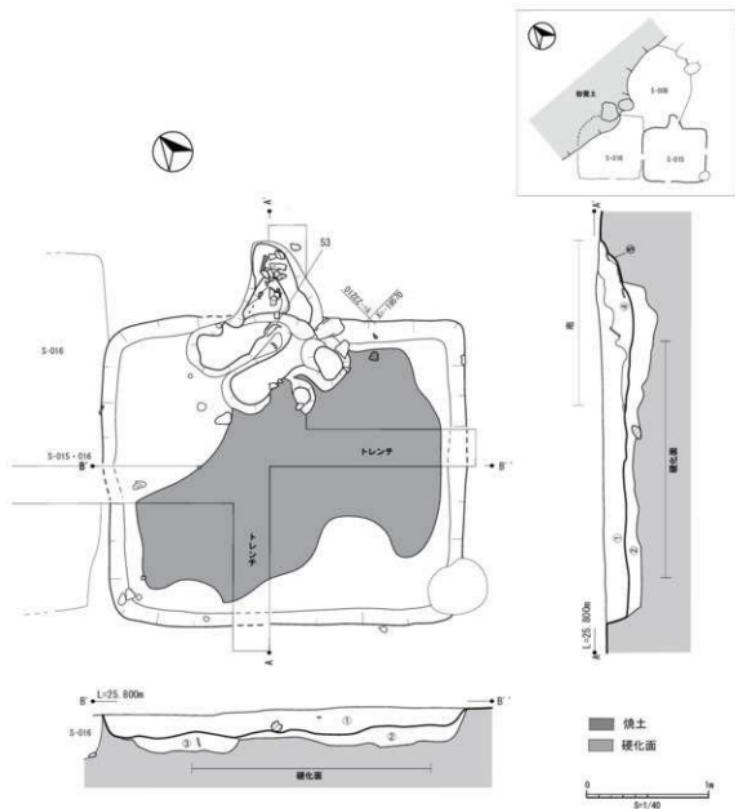


51

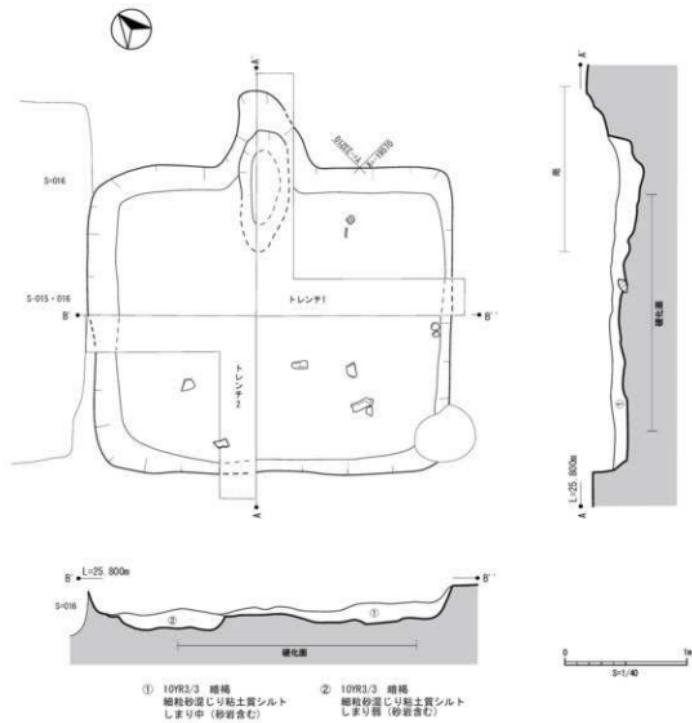


52





第39図 S-015床面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第40図 S-015完掘状況・遺物出土状況

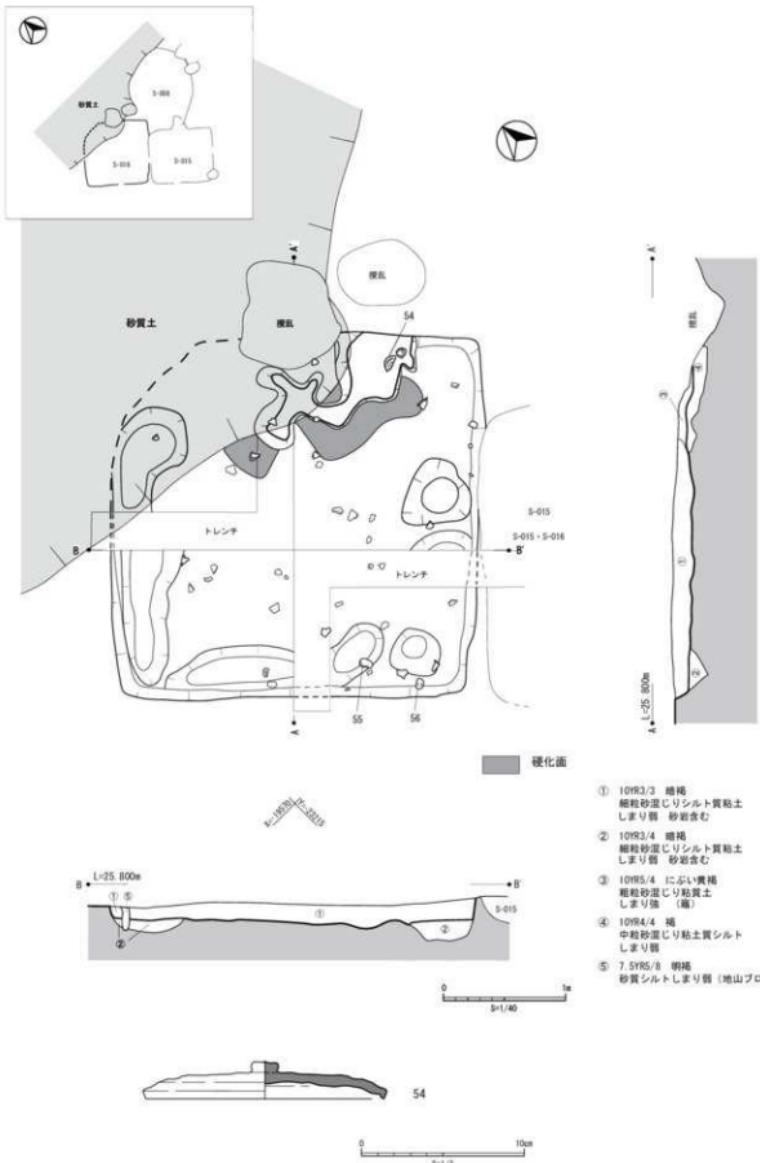
S-019 (S-016 第 47・48 図)

2工区中央にあたる I-21・22 グリッドにて検出された。主軸は N-40°-E、長軸 3.7m 短軸 3.2m の長方形を測る。遺構南側を S-021 により一部切られている。竈付住居で竈周辺には硬化面が確認された。P-1に対応する柱が存在したであろうが、前述した S-021 により消滅したのならば 2本柱の住居地として想定される。

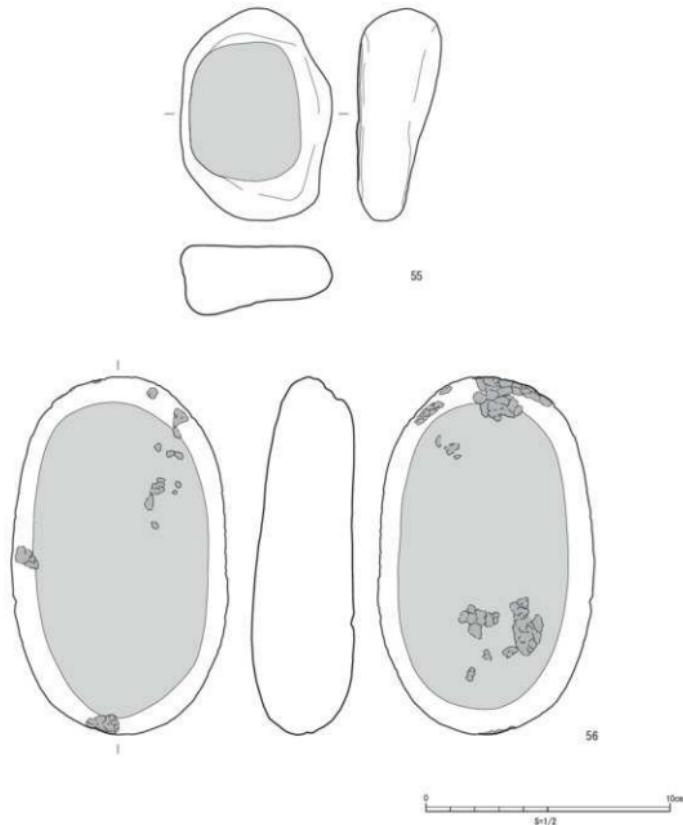
63は本遺跡では平均的な形状の磨石で両面を顕著に使用している。この遺物はまた炭化物付着が見られ、これにより火熱を受けていたことが想定され、その出土位置も竈に近い。64は小型の石錐である。

S-020 (S-032 第 49 図)

2工区西側にあたる B・C-8 グリッドにて検出された。S-049 により大きく削平されているため、詳細は不明であるが、残存プランから一辺 3m ほどの住居地であろう。主軸は N-28°-E、埋土は薄く、また下位層はインボリューションも見られることから、住居地構築の掘り込みが僅かに残存したのである。土師器坏片(65)から古代の竪穴住居跡と想定した。



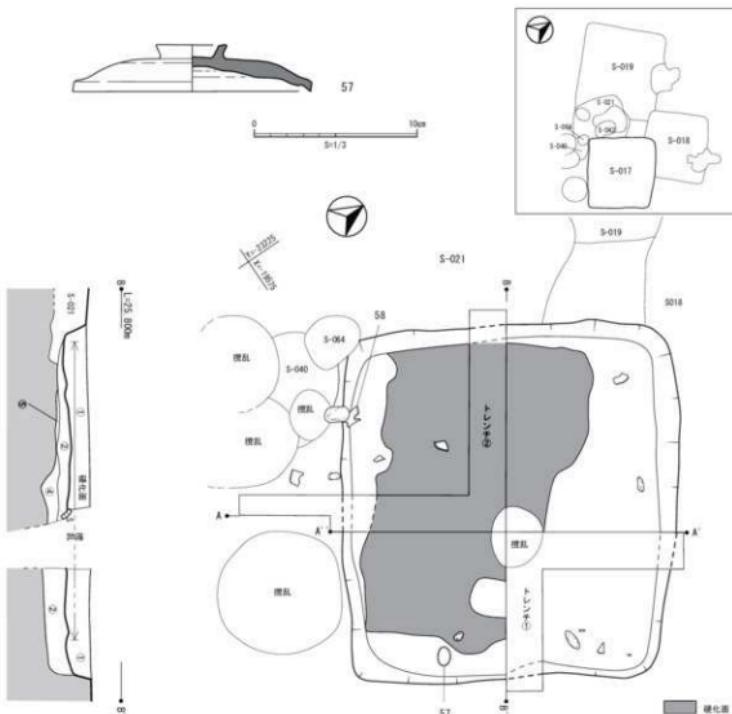
第41図 S-016床面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第42図 S-016出土遺物実測図

S-021 (S-038 第50図)

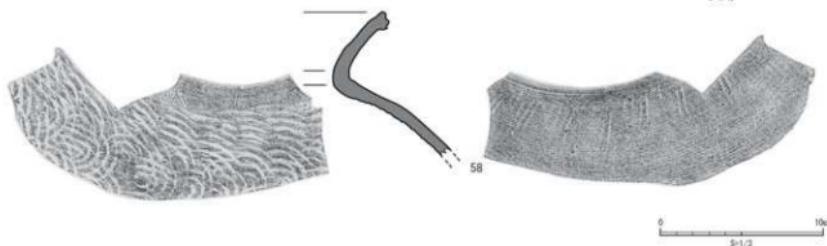
2工区中央にあたるi-21・22グリッドにて検出された。主軸はN-21°-E、長軸2.8m 短軸2.2mの開丸方形を測る。遺構東部をS-017など多くの遺構に切られているが、そのプランは復元を想定できる。遺構北東部に粘質土層が検出されたことから、竈の粘土が崩壊し流れ込んだのであろう。本来はこの方向にさらに竈痕跡の存在を窺わせる。竈粘土層からは、土師器甕(66)が出土した。竈内であるため煮炊き用の土器として想定される。



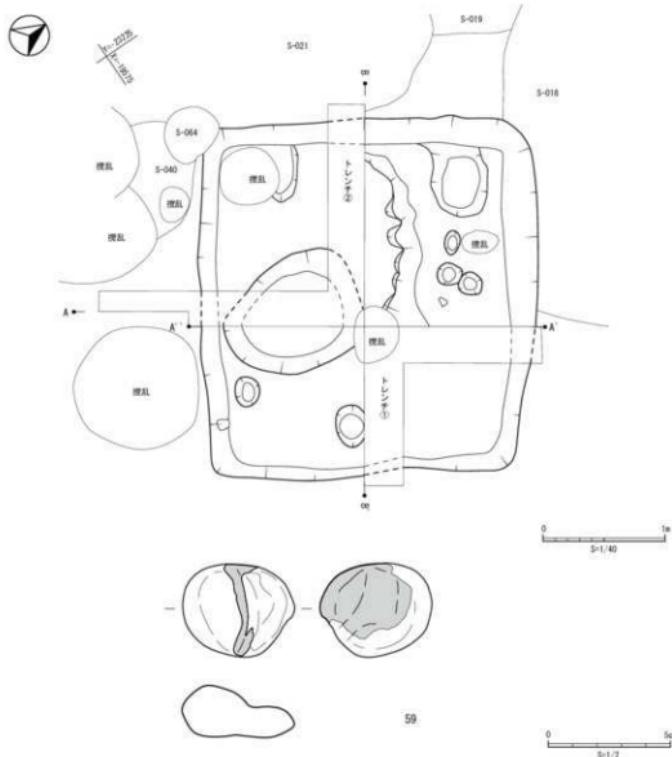
- ① 10YR3/3 細粘
シルト質粘土 しまり中
- ② 10YR3/3 細粘
中粒砂混じり粘土質シルト
しまり強 (砂岩 地山ブロック含む)
- ③ 10YR3/2 黑褐色
シルト質粘土 しまり強
- ④ 10YR4/4 暗
シルト しまり弱
- ⑤ 10YR4/4 暗
砂質シルト しまり弱

A → 25.800m A'

0 10cm
1/2



第43図 S-017硬化面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第44図 S-017完掘状況及び出土遺物実測図

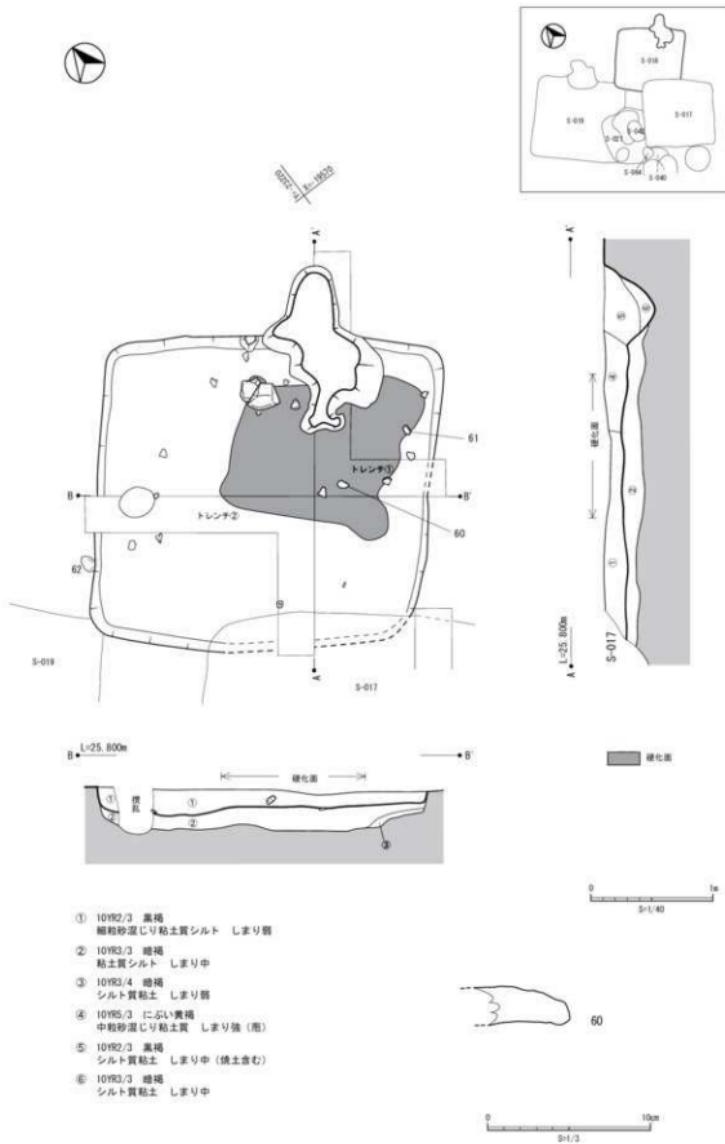
S-022 (S-013 第51図)

2工区西側にあたるh・i-23、h-22グリッドにて検出された。遺構の半分以上は調査区外で一辺2.6mの方形、残存は三角形の全体に硬化面とピットが確認された。主軸はN-55°-Eの方、長方形住居地を想定させる。

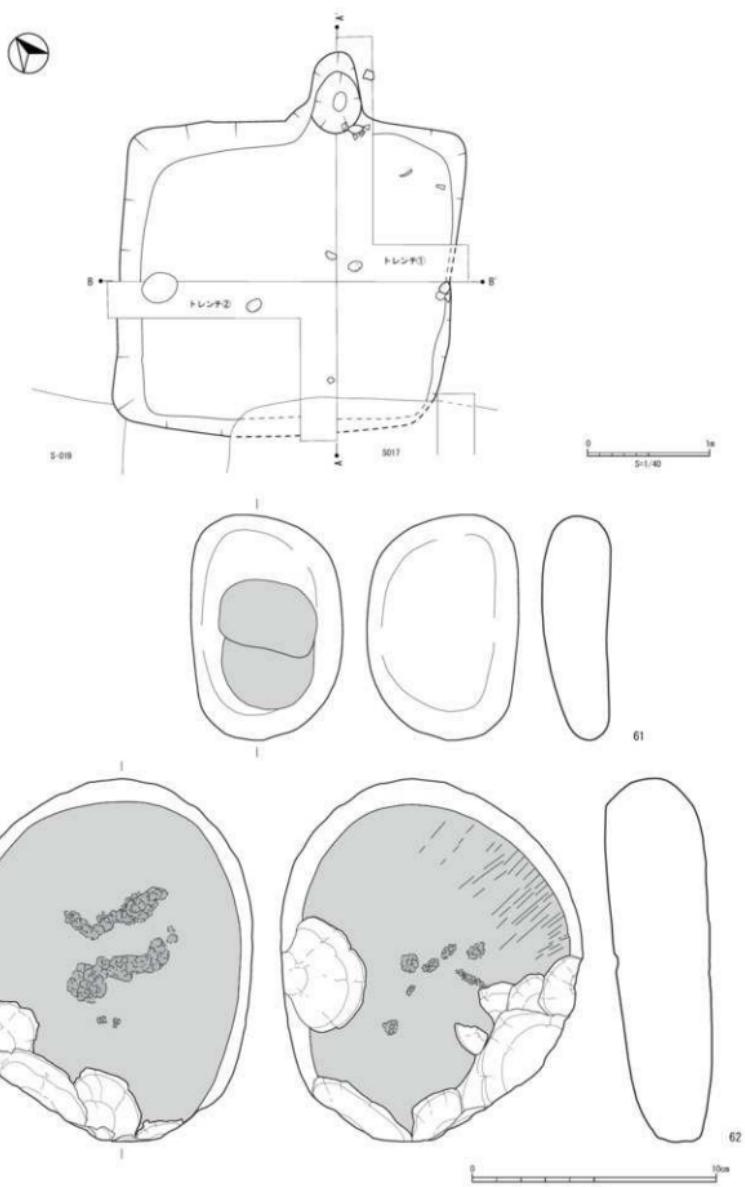
68は穿孔部存在やその残存形状から原形は不明であるが、孔のある石製品とした。材質は不明であるが気泡の多い火山岩質で、発色は10R4/8赤(標準土色帖)。その形状、発色から装飾品の可能性も否定できない。67は小型の磨石であろう。

S-023 (S-029 第52図)

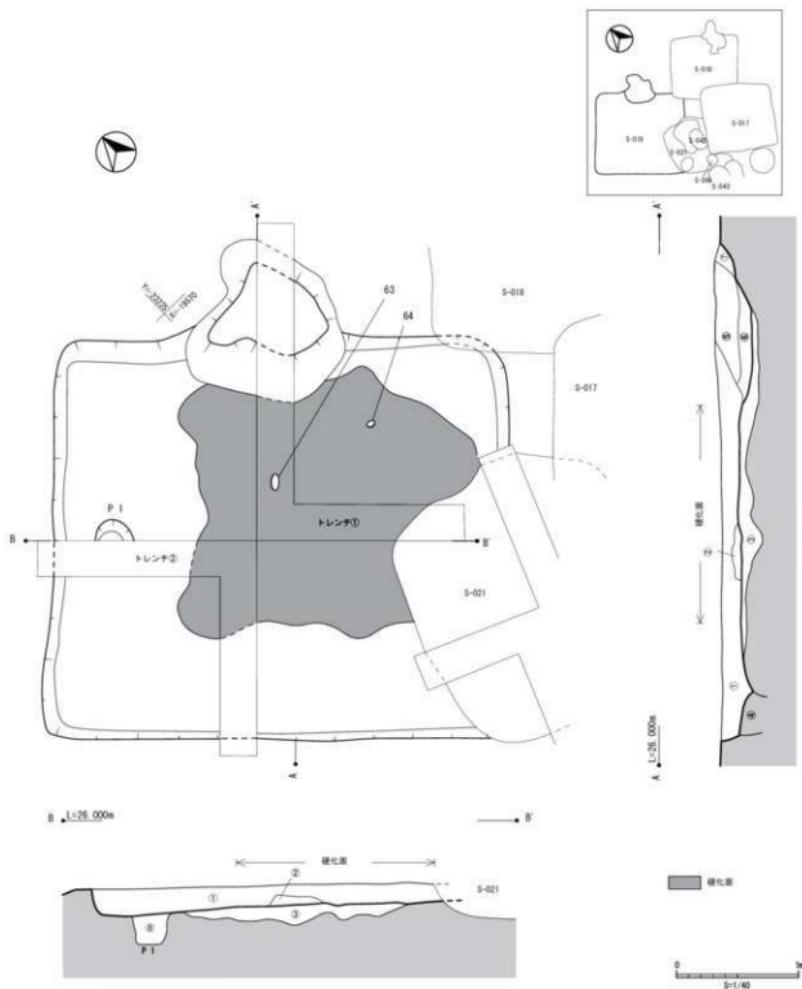
2工区西側にあたるd-13・14、e-14グリッドにて検出された。遺構の北西側を後世の削平により損失している。主軸はN-70°-W、長軸残存3.2mと短軸4.2mから隅丸方形プランであろうか。P1はやや大きめであるが、その掘り込みから柱跡であろう。69は径4.8cm 厚さ1.6cm、中央に穿孔が施されているため紡錘車である。胎土は精製され、磨き調整も施されている。しかし遺物はこれのみである。炉痕跡が見当たらないのは、削平された箇所に竈の存在を想定させ、また紡錘車の精製された胎土から弥生期ではなく、それ以降の時期の住居と仮想定し、ここに配置した。



第45図 S-018床面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図

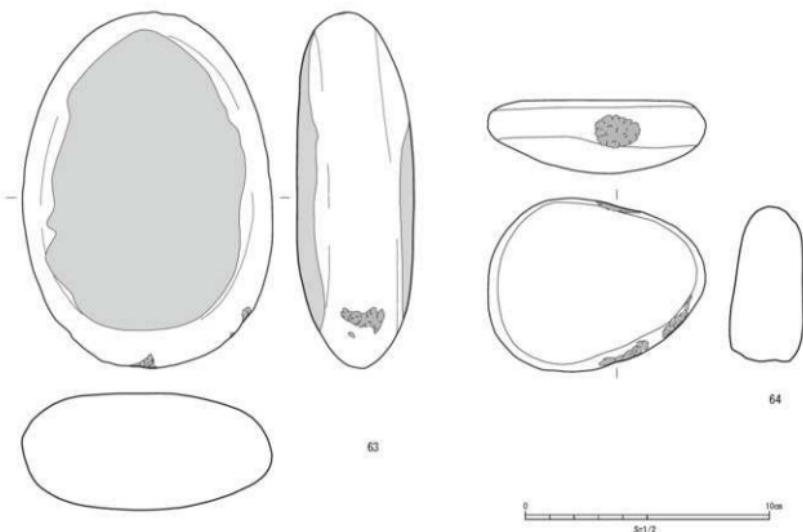
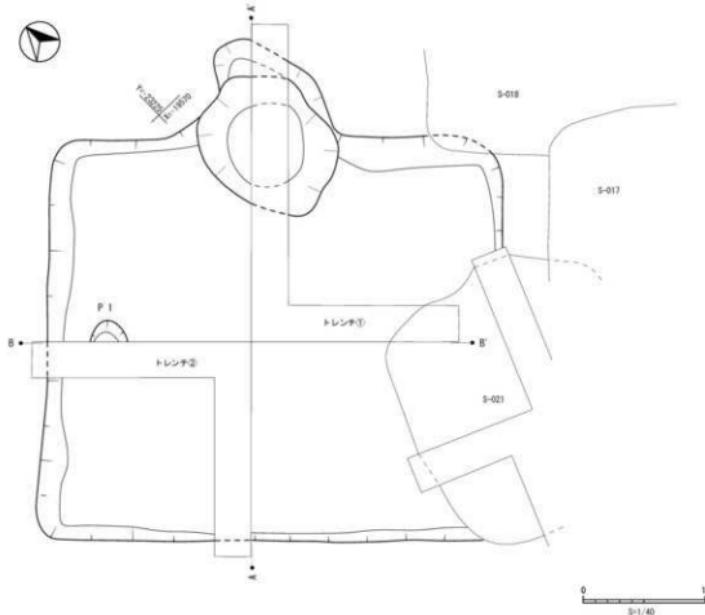


第46図 S-018完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

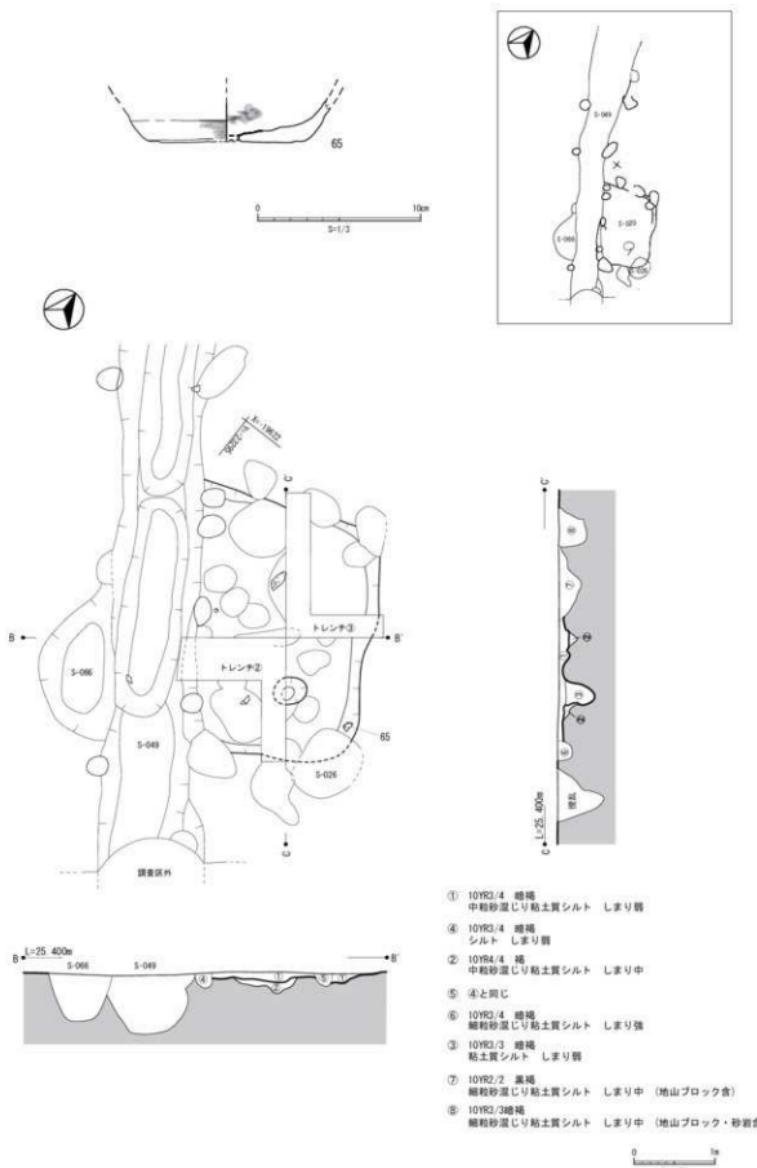


- ① 10YR2/3 橙褐色
中粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
- ② 10YR4/2 にぶい黄褐色
細粒砂混じり粘質土 しまり強(面積がい)
- ③ 10YR4/4 橙褐色
シルト しまり弱
- ④ 10YR2/3 橙褐色
粘土質シルト しまり中
- ⑤ 10YR6/4 にぶい黄褐色
粘土質シルト しまり中(燒土混じる) (窓)
- ⑥ 10YR4/3 にぶい黄褐色
粘土質シルト しまり中(燒土混じる)
(西端部と思われる)
- ⑦ 10YR3/4 橙褐色
細粒砂混シルト質粘土 しまり弱
- P 1埋土
⑧ 10YR3/4 橙褐色
粘土質シルト しまり弱

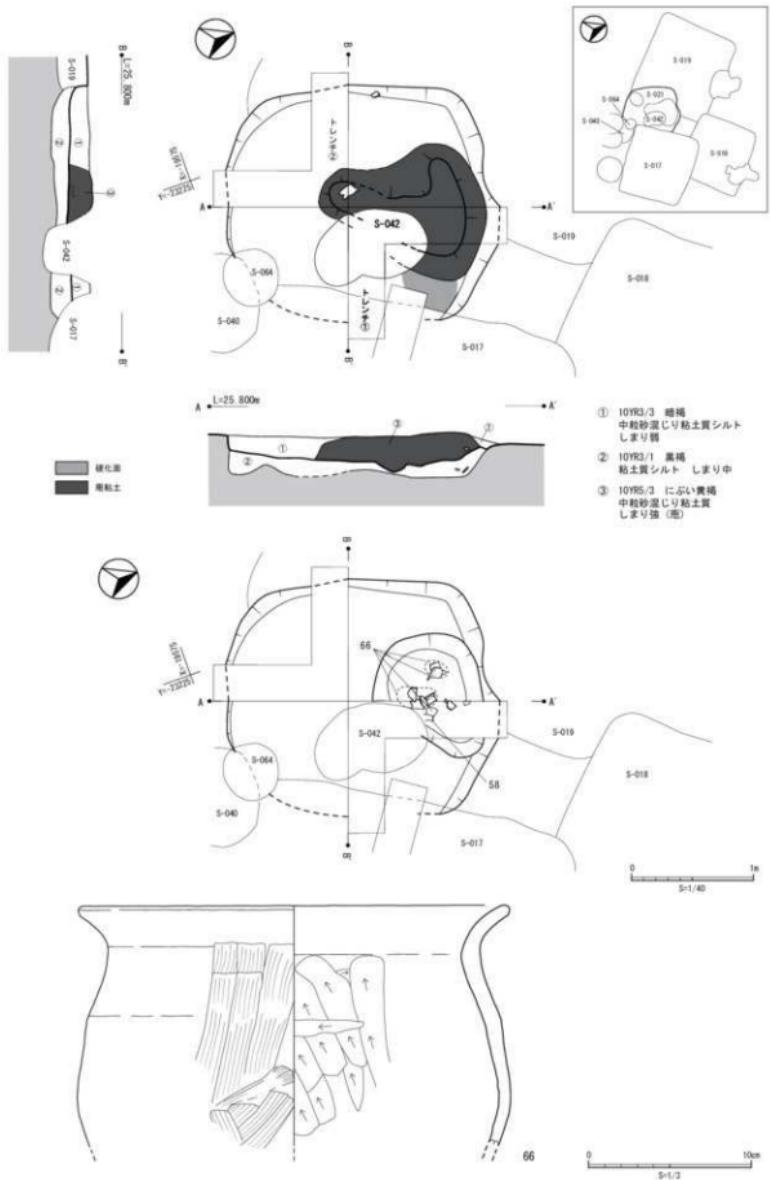
第47図 S-019完掘状況及び遺物出土状況



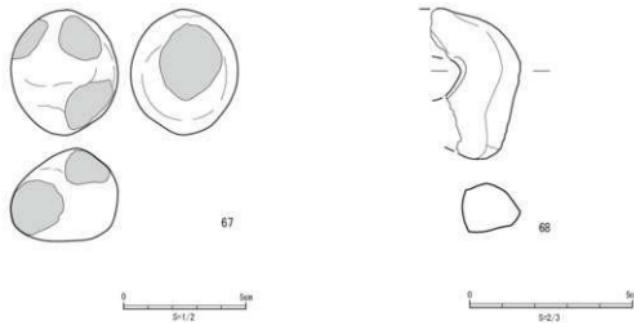
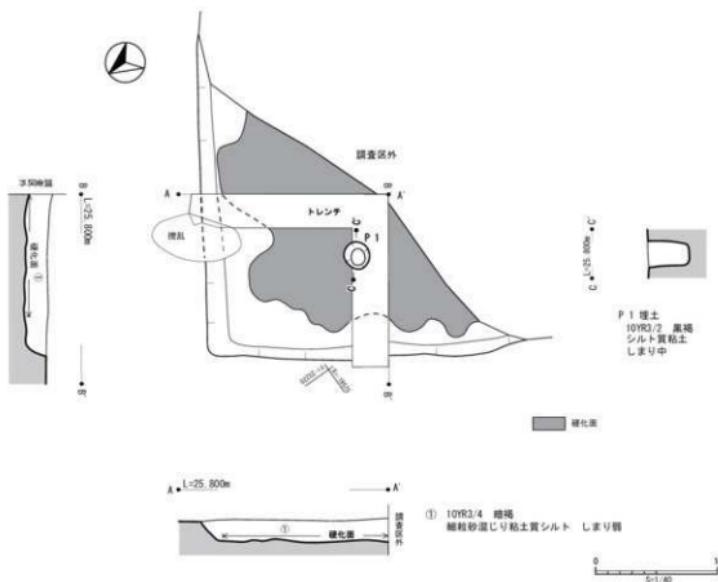
第48図 S-019完掘状況及び出土遺物実測図



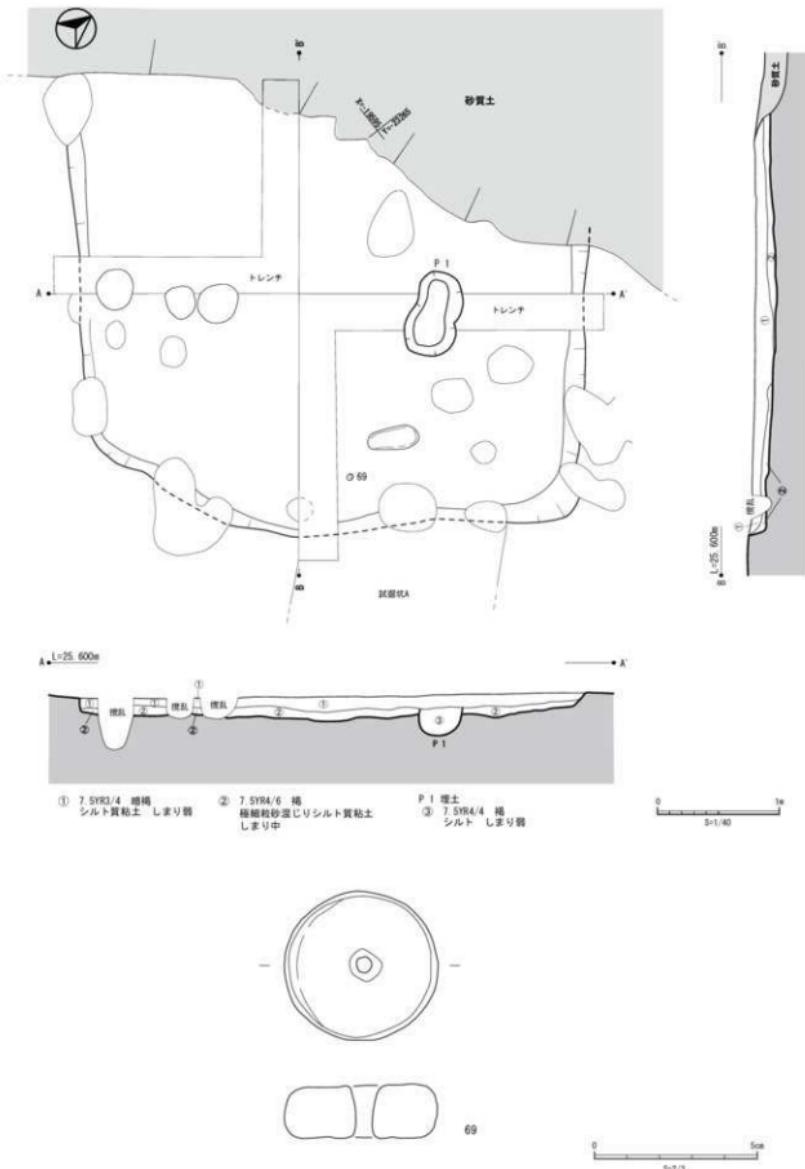
第49図 S-020完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第50図 S-021完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第51図 S-022完掘状況及び出土遺物実測図



第52図 S-023完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

(土坑)

S-024 (S-028 第 53 図)

1 工区 F-4 グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸 1.6m、短軸 1.2m、深さ 0.2m の規模である。主軸は N-150° -E である。

遺構検出時に焼土を多量に検出した為、堅穴住居跡の竈と考え調査を開始した遺構である。堅穴住居であれば東壁に付随する竈と考え、S-024 より西側を中心で検出を繰り返した結果、堅穴住居跡のプランは確認出来なかった。第⑤、⑦層以外は焼土を多量に含むため、住居燃焼部（竈）の一部が残存したと考えるのが自然であろう。

70 は須恵器皿で底部は回転ヘラ切りである。全体の発色はにぶい黄橙色で焼成時の低温によるものであろう。71 は竈支柱の破片であり、本来は平面を呈したものであろう。72 は原形を残した竈支柱で棒状を呈し、一部に打痕が見られる。73 は小型敲石で側面に打痕が確認される。本遺跡出土遺物中で最小の敲石である。

S-025 (S-012 第 54 図)

2 工区東側にあたる h・i-23 グリッドにて検出された土坑である。大半をトレンチや調査区外に切れ、平面形態は残存から隅丸長方形を呈し、断面形態は皿状を呈するようである。遺構中央部にややピット状の浅い掘り込みがある。

S-026 (S-037 第 54 図)

2 工区西側にあたる B・C-8 グリッドにて検出された土坑である。一部擾乱により損失しているが、遺構プランは完掘に近い。平面形態は不定形を呈し、断面形態は椀状を呈する。長軸 0.82m、短軸 0.72m、深さ 0.29m の規模である。

74 は土師器塊で復元であるが、口径は 12 cm 強を測る。底部は回転ヘラ切りを施した後、ナデ調整を行っている。75 は土師器で復元から口径 18 cm 強を測る大型塊である。風化が激しいが外器面、内器面とも赤褐色が施されている。76 は須恵器蓋で、天井部は低く平らであり、つまみは平坦、端部はやや内側に屈曲する。天井部に降りかかかった灰が自然釉となっているが、高温の釉垂れの一つ手前、陶芸用語「ゴマ塗」の点在釉である。このことにより遺物は使用時と同じような形態で窯入れが行われたことを証する。

S-027・S-028 (S-022・S-023 第 55 図)

S-027 は、2 工区中央にあたる i-20 グリッドにて検出された土坑である。平面形態はほぼ長方形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸 2.1m、短軸 0.9m、深さ 0.3m の規模である。主軸は N-53° -E である。S-028 も同様のプランで長軸 2.2m、短軸 0.9m、深さ 0.2m の規模である。主軸は N-42° -E である。2 工区西側にあたる h・i-20 グリッドで検出された。これらの遺構の性格を裏付ける遺物は出土しなかったが、プランは土壤墓に良く見られ、この両遺構の主軸は同一方位である。

S-029 (S-031 第 55 図)

2 工区西側にあたる B-8・9 グリッドにて検出された土坑である。遺構の大半は調査区外になるが、平面形態は隅丸長方形を呈するようで、断面形態は皿状を呈する。残存軸 2.2m、深さ 0.3m の規模である。

S-030 (S-004 第 56 図)

2 工区東側にあたる j-30 グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は椀状であるが、数回の掘り込みをされているようである。長軸 1.9m、短軸 1.1m、深さ 0.7m の規模である。最深部はピット状の掘り込みで礫等の出土があり、遺構の性格として廃棄土坑と想定する。

S-031 (S-023 第 56 図)

1 工区 G-3 グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は長方形を呈し断面形態は回字状を呈する。長軸 1.45m、短軸 0.9m、深さ 0.45m の規模である。また S-031 の北側に同じ規模の土坑が 2 基並ぶように検出した。北側から S-046、S-032、S-031 となっている。意図的な掘り込みが感じられるため土壤墓の可能性もあるが、それを確認する遺物が出土しなかった。

S-032 (S-024 第 56 図)

1 工区 F・G-3 グリッドにおいて検出された古代の土坑である。平面形態は楕円形を呈し断面形態はすり鉢状を呈する。長軸 1.85m、短軸 1.4m、深さ 0.6m の規模である。0.35 × 0.25m 大の砂岩ブロックが西壁付近に混入している。

S-033 (S-063 第 56 図)

1 工区東側 D-6 グリッドにおいて検出された土坑である。検出時には S-013 と重複していたが、埋土の状況等から S-033 の方が新しい。長軸約 1.4m、短軸約 0.8m、深さ約 0.4m である。遺構検出面から約 0.15m 挖削すると径約 0.4m の角礫と約 0.3m の扁平礫がそれぞれ 1 点ずつ出土した。これらは掘立柱建物の隅柱基礎の可能性も考えたが、周囲に掘立柱の痕跡は検出できなかった。

S-034 (S-064 第 57 図)

1 工区東側 D-6 グリッドにおいて検出された土坑である。S-013 と重複しているが、S-034 の方が新しい。残存として長軸約 1.9m、短軸約 1.1m、深さが約 0.4m である。遺構検出時には S-013 に伴う遺構として掘削したが埋土の状況から S-013 より新しい遺構であった。遺構の性格を窺い知る遺物等の資料に乏しく、土坑状の掘り込みとして提示した。

S-035 (S-052 第 57 図)

1 工区東側 C-6 グリッドにおいて検出された土坑である。全体は S-002 と重複しており、S-002 が本遺構の上に構築されている。残存として長軸約 2.3m、短軸約 1.8m、深さ約 0.3m である。楕円形プランを呈するようであるが、遺構の性格を含め不明部分が多い。

S-036 (S-037 第 57 図)

1 工区 E-4・5 グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸 1.2m、短軸 1.0m、深さ 0.2m の規模である。主軸は N-157° -W である。

遺構検出時は堅穴住居の竈に使用されたと考えられる白色粘土を多量に検出した為、堅穴住居の竈と考え調査を開始した。堅穴住居であれば南壁に付随する竈と考え、本遺構より北側を中心に検出を繰り返した結果、堅穴住居のプラン、そして竈に伴う焼土、灰等が確認出来なかった為、白色粘土を伴う土坑とした。

S-037 (S-040 第 57 図)

1 工区 F-5 グリッドにおいて検出された土坑である。遺構は南側の調査区外に広がっている。現状では平面及び断面形態はそれぞれ、隅丸方形及び皿状を呈する。主軸は N-122° -W である。

遺構検出時は焼土を検出した為、堅穴住居の竈と考え調査を開始した遺構である。堅穴住居であれば南西壁に付随する竈と考え、北東側を中心に検出を行ったが、堅穴住居のプランを確認出来なかった。焼土を伴う土坑としたが住居の竈部残存であろう。

S-038 (S-024 第 58 図)

2 工区中央にあたる g-19 グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸 0.7m、短軸 0.5m、深さ 0.3m の規模である。

S-039 (S-021 第 58 図)

2 工区中央にあたる h-21 グリッドにて検出された土坑である。擾乱により削平されているが、平面形態は梢円形を呈するようで、断面形態は椀状を呈する。残存径 0.7m、深さ 0.3m の小規模である。主軸は不明である。

S-040 (S-020 第 58 図)

2 工区中央にあたる h-i-22 グリッドにて検出された土坑である。これも擾乱により情報を損失しているが、平面形態はほぼ梢円形を呈し、断面形態は皿状にさらに掘り込みを呈する。残存径 0.8m、深さ 0.4m の規模である。

S-041 (S-021 第 58 図)

1 工区東側における B-5 グリッドに位置する不定形土坑で、長軸約 1.0m、短軸約 0.5m、深さは約 0.3m である。中層から火熱痕のある砥石片（77）が出土した。残存 20 cm 弱を測る大型の砥石である。廃棄に伴うものであろうが、四面全て使用されており、各面に座みも認められることから使用頻度は高かつたのである。火熱の痕跡も見られることから、廃棄に伴う遺物であろうし、この遺構は廃棄土坑の性格を持つものである。

S-042 (S-017 第 58 図)

2 工区中央にあたる i-22 グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は緩やかか V 字状を呈する。長軸 0.9m、短軸 0.6m、深さ 0.5m の規模である。

S-043 (S-053 第 58 図)

1 工区東側 C-6 グリッドにおいて検出した土坑である。S-057・S-002 と重複し、S-043 が最も古く S-002、S-057 の順に新しくなる。長軸約 1.0m、短軸約 0.7m の梢円形である。埋土中に樹痕擾乱が見られるため、S-002 を構築する以前の風倒木痕ではないかと考えられる。

S-044 (S-002 第 59 図)

2 工区東側にあたる j-28・29 グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状にさらに浅いピットを掘り込んだようである。長軸 1.1m、短軸 0.7m、深さ 0.3m の規模である。

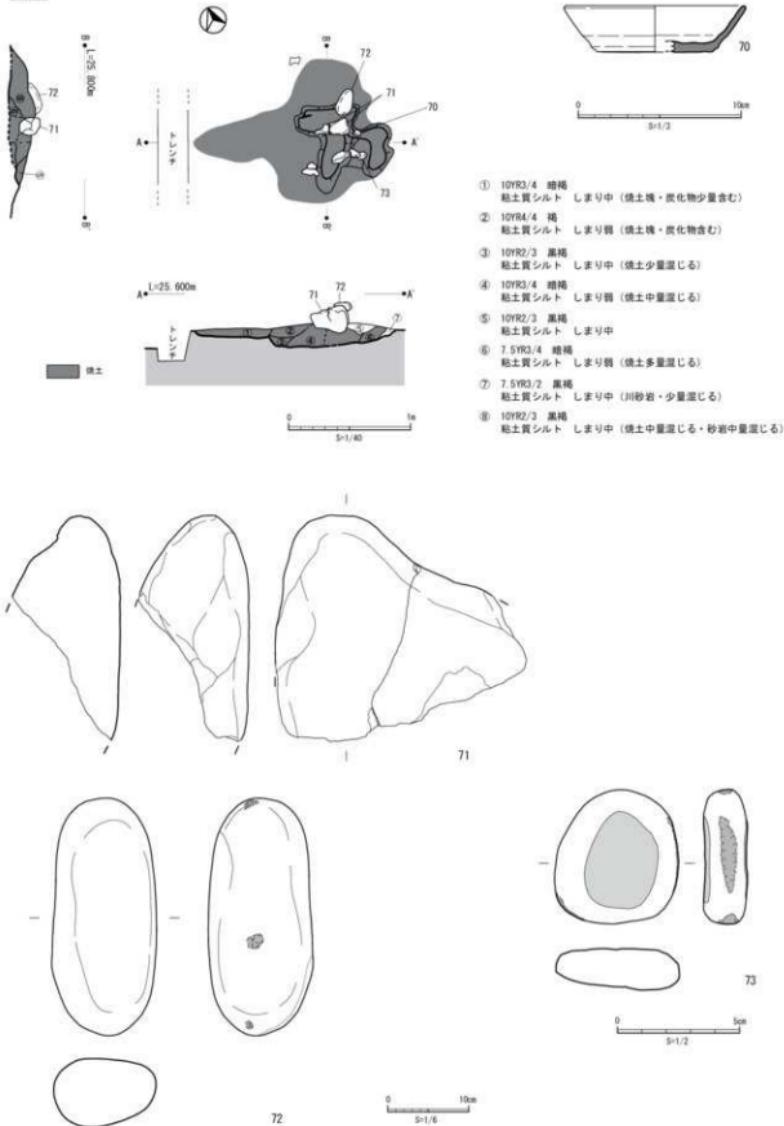
S-045 (S-029 第 59 図)

1 工区 E-6 グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は円形を呈し、断面形態は椀状を呈する。径約 0.6m、深さ 0.3m の規模である。S-013 と重複し、S-013 より新しい。複雑に入り込んだ理土は 7 層に分層されることから、後世の樹痕等の影響を受けたものであろう。

S-046 (S-010 第 59 図)

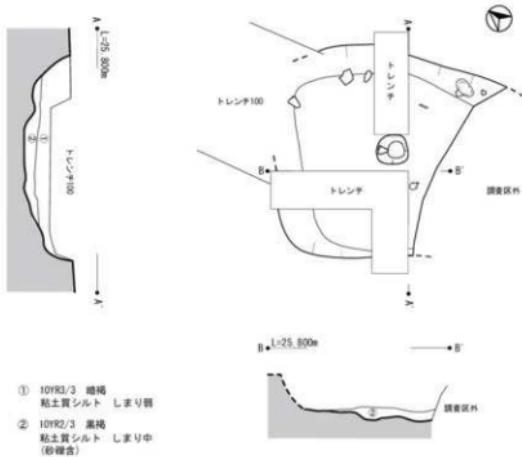
1 工区 F-3 グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は梢円形を呈し、断面形態は弧状を呈する。長軸 1.6m、短軸 1.1m、深さ 0.35m の規模である。下層は複雑であるが、これは後世の樹痕によるものであろう。遺物は上層より礫が数点出土している。78 は磨石・敲石破片で廃棄された遺物であることから廃棄土坑であろう。

S-024

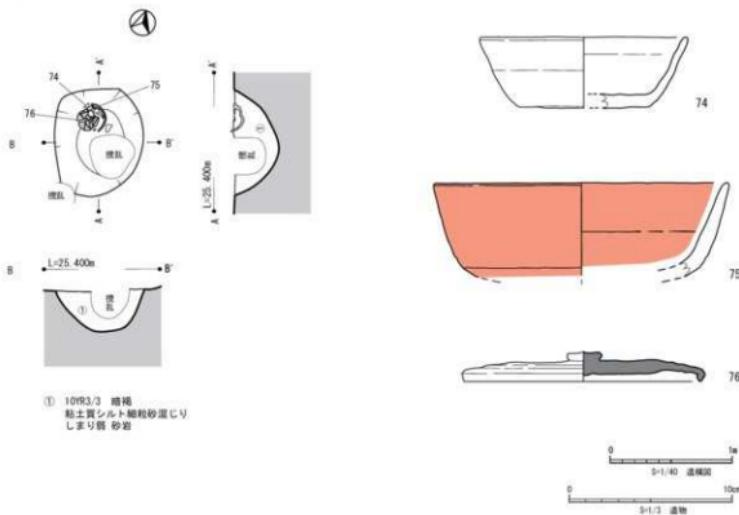


第53図 S-024完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

S-025

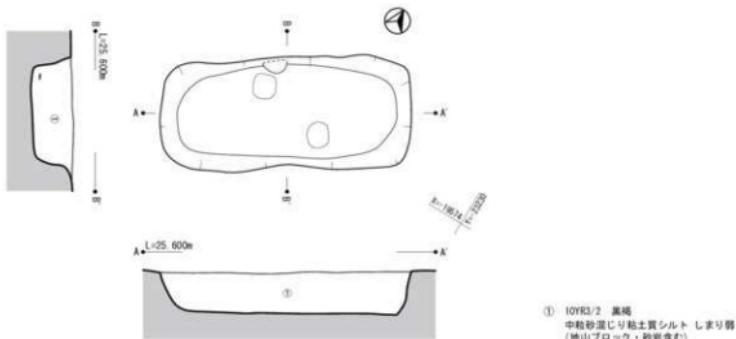


S-026

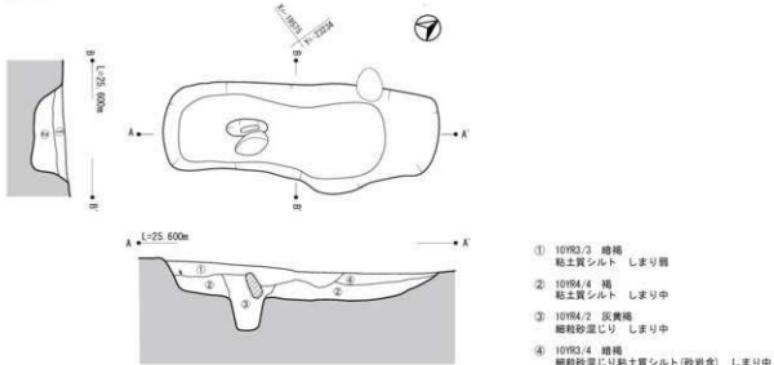


第54図 S-025・S-026完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

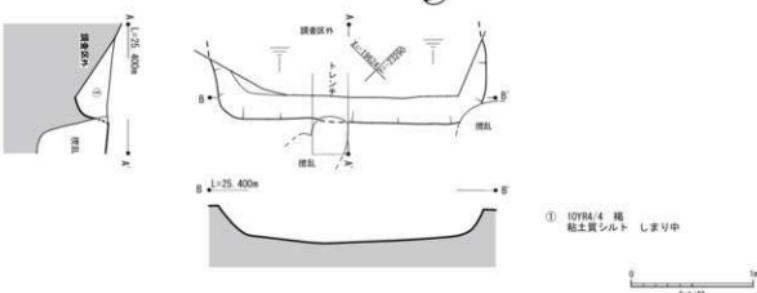
S-027



S-028

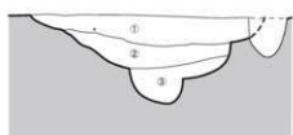


S-029



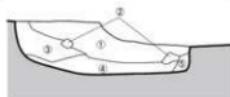
第55図 S-027・S-028・S-029完掘状況

S-030



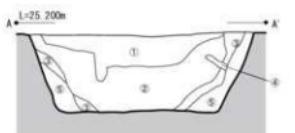
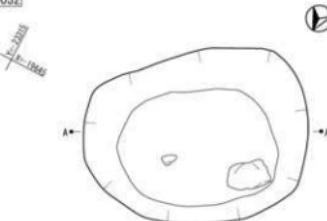
- ① 7.SYR4/4 極
中粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
(地山ブロック混じる)
- ② 7.SYR3/4 緩繩
シルト質粘土 しまり中
- ③ 10YR2/3 緩繩
シルト質粘土 しまり強

S-031



- ① 10YR4/1 極灰 砂質土 しまりあり 黏性なし
1cm大の10YR6/8明黄色砂質土 ブロック少量混じる
- ② 10YR6/2 灰黄褐色 砂質土 ブロック
- ③ 10YR5/3 ぶい黄褐色 砂質土 しまりあり 黏性なし
2cm大の10YR6/8明黄色砂質土 ブロック少量混じる
- ④ 10YR6/3 ぶい黄褐色 砂質土 しまりあり 黏性なし
- ⑤ 10YR6/8 明黄色 砂質土 しまりあり 黏性なし

S-032



- ① 10YR4/4 極
細粒砂混じり粘土質シルト 川砂含、砂岩含 しまり中
- ② 10YR2/2 黒褐
細粒砂混じり粘土質シルト 砂岩含 しまり中
- ③ 10YR3/3 緩繩
細粒砂混じり 粘土質シルト 砂岩少量混じる しまり中
- ④ 10YR3/4 緩繩
粘土質シルト 川砂少量混じる しまり弱
- ⑤ 10YR4/4 緩繩
粘土質シルト しまり弱

S-033

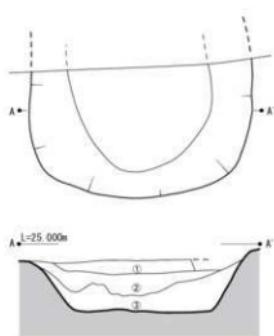


- ① 7.SYR4/3 緩繩
シルト しまり弱い
- ② 7.SYR6/8 極
シルトに7.SYR4/3褐色シルト しまり弱く ブロック状に含む
- ③ 7.SYR4/3 極
シルト しまり弱い 細粒砂混じる

0 1m
Scale 1:40

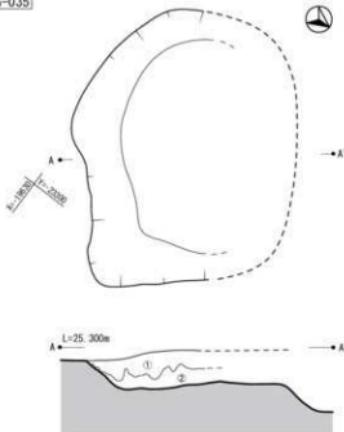
第56図 S-030・S-031・S-032・S-033完掘状況

S-034



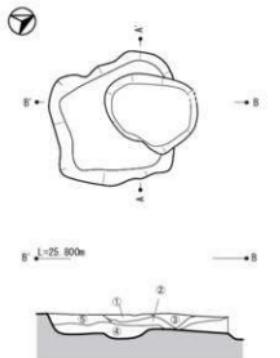
- ① 7.SYR4/3 植
シルト しまり弱く細粒砂まじる 填土層じる
- ② 7.SYR2/4 植場
シルト しまり弱く細粒砂混じる
- ③ 10YR2/4 植場
シルト しまり弱く細粒砂混じる

S-035



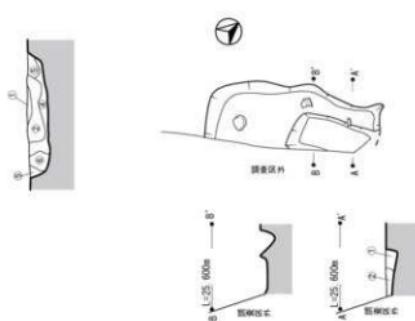
- ① 7.SYR3/4 植場
砂質シルト 細粒砂混じる
- ② 10YR5/3 にぶい黄褐色
砂質シルト しまり弱く 細粒砂 砂岩混じる

S-036



- ① 10YR2/2 黒褐色
細粒砂まじり粘土質シルト しまり弱
- ② 10YR3/3 植場
細粒砂混じりシルト しまり弱
(底部に白色粘土まさる)
- ③ 10YR3/2 黒褐色
細粒砂まじり粘土質シルト しまり弱
(川砂含む)
- ④ 10YR3/4 植場
粘土質シルト しまり中 (川砂含む)
- ⑤ 10YR3/3 植場
細粒砂まじり粘土質シルト
しまり中 (白色粘土多量に混じる)
- ⑥ 10YR4/3 にぶい黄褐色
粘土質シルト しまり弱 (川砂含む)

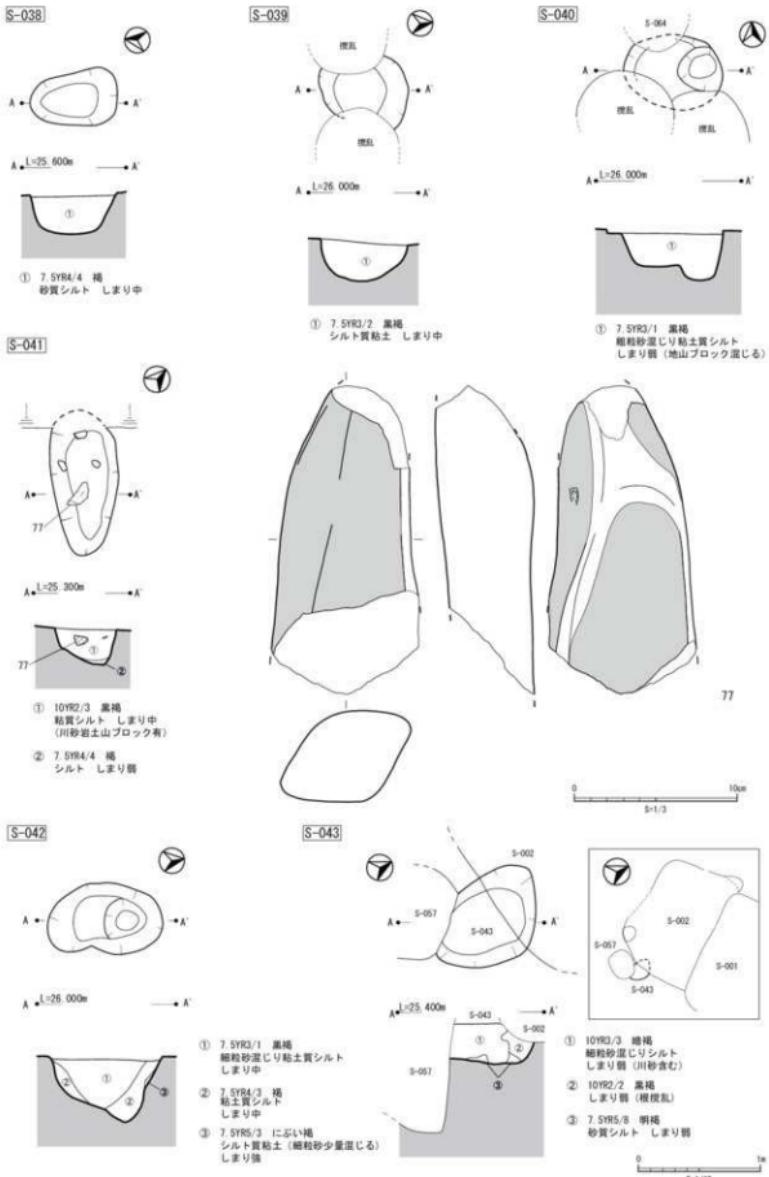
S-037



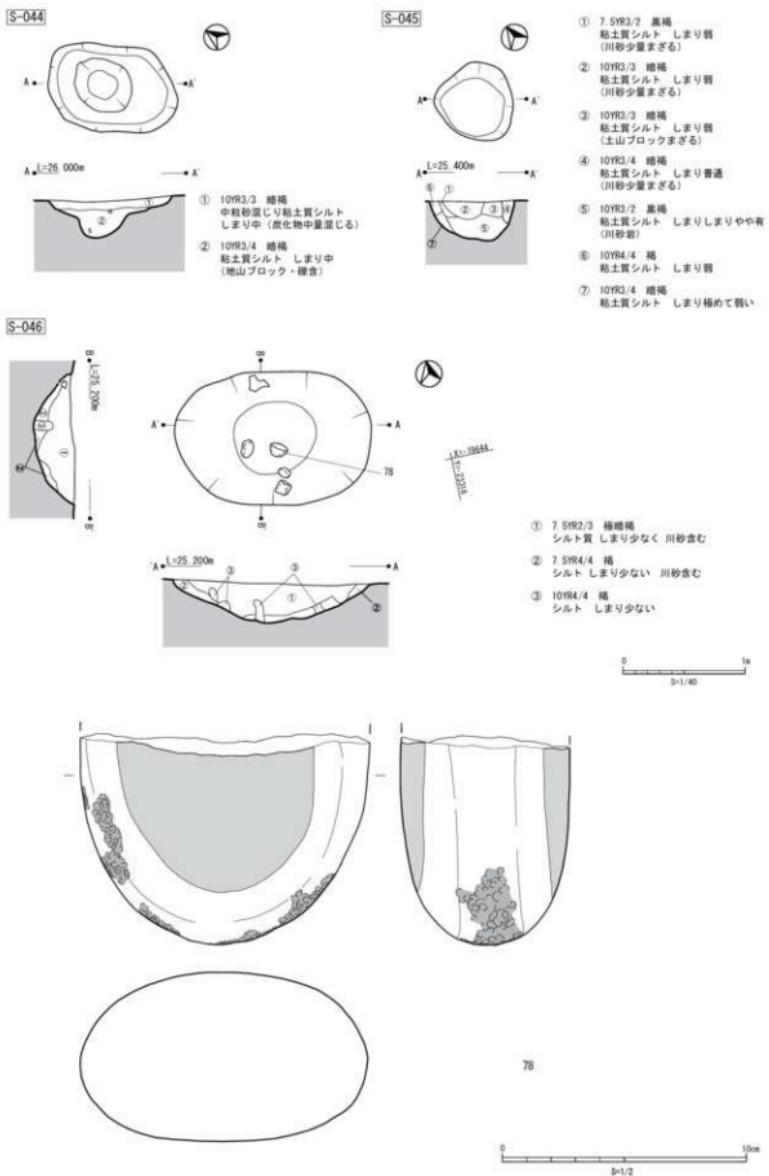
- ① 7.SYR4/4 植場
細粒砂混じりシルト しまり中
(填土・炭化物岩)
- ② 10YR3/4 植場
細粒砂混じりシルト しまり弱
(填土少量混じる)

0 100m
5-1:40

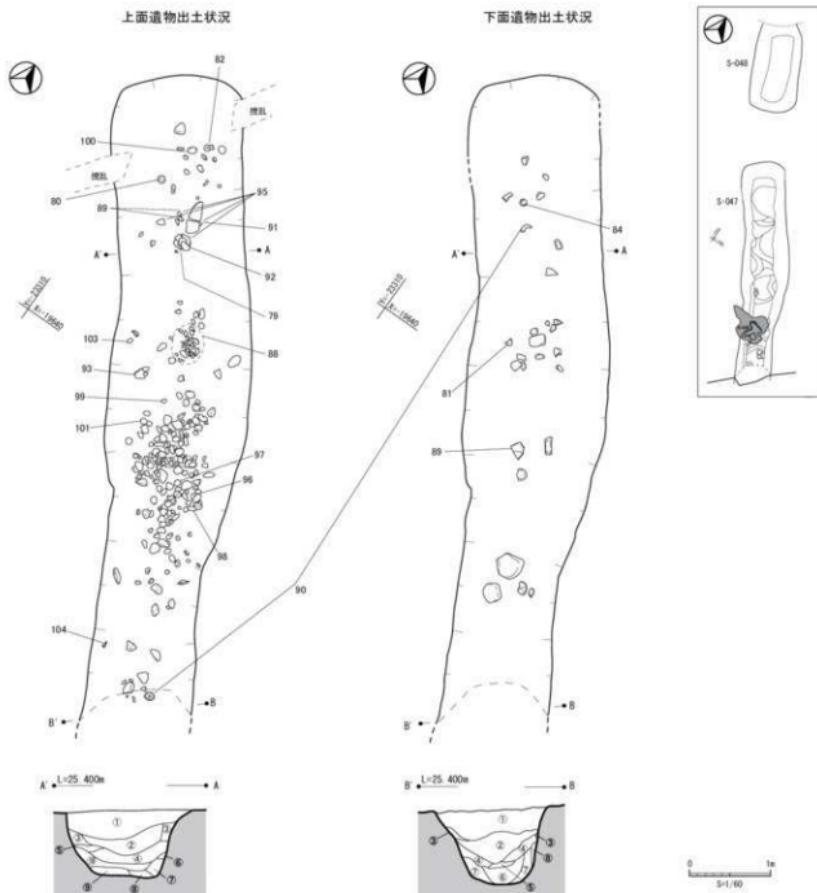
第57図 S-034・S-035・S-036・S-037完掘状況



第58図 S-038・S-039・S-040・S-041・S-042・S-043完掘状況及び出土遺物実測図



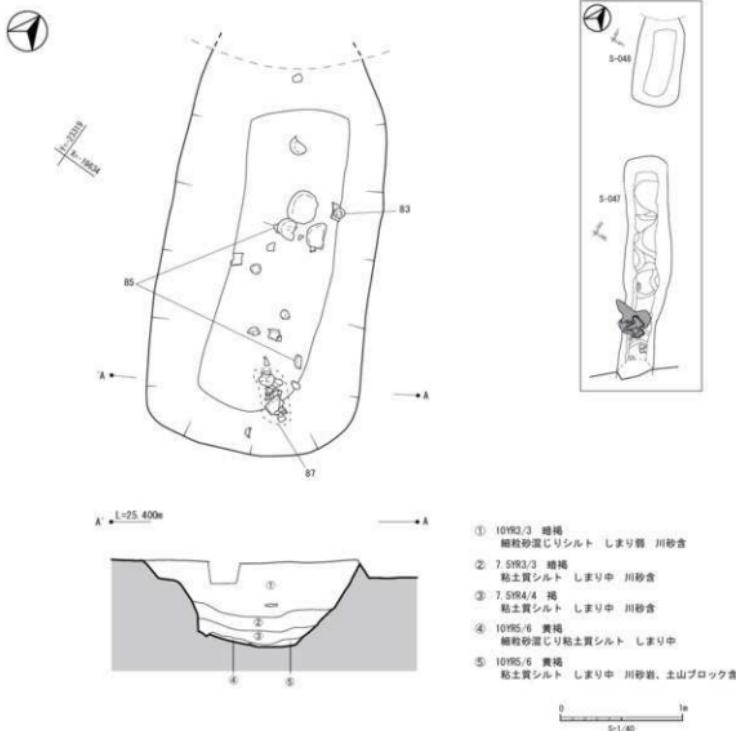
第59図 S-044・S-045・S-046完掘状況及び出土遺物実測図



- ① 10YR3/3 黒褐色 細粒砂混じり シルト
しまり弱 漢水物少量混ざる
- ② 10YR2/4 黒褐色 細粒砂混じり シルト
しまり中 小口砂礫岩
- ③ 10YR5/6 黄褐色 細粒砂混じり 粘土質シルト
しまり弱 土山ブロック岩
- ④ 7.5YR4/3 黒 粘土質シルト しまり中
- ⑤ ③と同じ
- ⑥ ③と同じ
- ⑦ ④と同じ 土山ブロック岩
- ⑧ 7.5YR5/6 にぶい褐色 粘土質シルト しまり中
- ⑨ 10YR2/3 黑褐色 粘土質シルト しまり中
土山ブロック少量混ざる
- ⑩ 7.5YR4/4 黒 粘土質シルト しまり中 土山ブロック混ざる

- ① 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混じりシルト
しまり弱 川砂岩
- ② 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混じりシルト
しまり中 土山ブロック岩
- ③ 10YR4/4 黒 細粒砂混じりシルト
しまり中 土山ブロック岩
- ④ 10YR3/3 黑褐色 細粒砂混じりシルト
しまり弱 土山ブロック岩
- ⑤ 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト
しまり中
- ⑥ ⑤と同じ 砂岩少量岩
- ⑦ 10YR2/3 黑褐色 細粒砂混じり粘土質シルト
しまり中 川砂、土山ブロック
- ⑧ 7.5YR5/8 黑褐色 粘土質シルト しまり弱

第60図 S-047上面・下面遺物出土状況



第61図 S-048遺物出土状況

(溝)

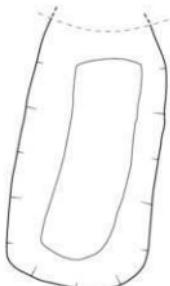
S-047 (S-018 第 60・62～65 図)

1工区 E-3・4, F-4 グリッドにおいて検出した溝状遺構である。長さ約 8.2m、幅約 1.8m を測り調査区の南側に広がっている。主軸は N-36°W である。検出当初は多くの礫を伴う土坑と思いつべルトを設定し掘削を行っていたが、礫の出土数が多い為検出を繰り返したところ溝状遺構と判明した。遺物は礫が上層下位（第①層）より夥しく出土し、下層では数点とその差は大きい。土層は A-A' は水平堆積、B-B' の下位はレンズ状堆積が観察される。また完掘状況を観察すると、床面は鱗状面（第62図）が見られる。これは人力掘削時の単位的な痕跡であろう。また礫出土の中心地の遺物出土状況は上層であり、また出土状況からは西側より放射状に廃棄されたようである。従ってこれらの遺物は遺構に伴うものでなく、後の廃棄であろう。皿状の不明遺物（79～84）について検討したが、口縁部に油煙が確認されることから照明具と想定している。また遺物中に鉄製品（刀子 104）も出土している。廃棄遺物のピークから 8世紀頃であろうか。

90 は須恵器塊で高台を持つ。高台残存部は僅かで、大部分は欠損している。貼付け高台で、坏底部



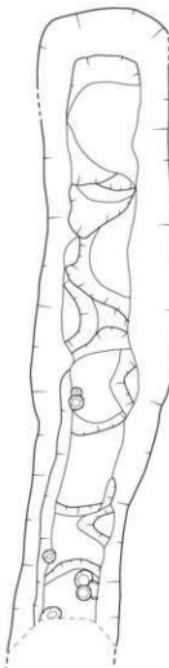
S-048



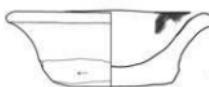
S-1/40

0 10cm

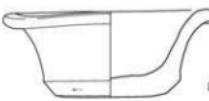
S-047

11/2010
P-1660

0 1cm



79



80



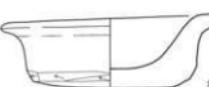
81



82



83



84

第62図 S-047・S-048完掘状況及び出土遺物実測図

に細かな刻みを施しているのは接着を効果的にするためで、現代の陶芸でも行われている作業である。自然釉の灰釉が内器面ではなく高台裏と外器面に見られることから、焼成は逆さまにしていたことが分る。

91は須恵器の环で焼成温度が低く、いわゆる生焼け状態でその発色は、にぶい橙色である。この遺物の内器面は青灰色をしているが、外器面は口唇部より下位に1cm強の輪状の発色で、胸部下位から底部まではにぶい黄橙の生焼けである。この発色は低温の際に発生しやすいため、この91は重ね焼きされた痕跡を現した遺物であると云えよう。86は土師器环片である。外器面は赤彩色を施され、底部には墨書きが確認されるが、断片資料のため判読は困難であった。内器面は油煙が付着し、灯明等の照明具としても使用されたか。87～89は土師器甕である。88・89は小型甕であるが二次焼成を受けており、これも煮炊き具の一つであろう。93は頸のある須恵器壺の肩から胴部屈曲部で、ここにつまみ状突起が付き、さらに穿孔を施す。発色は赤褐色である。

92・94・95は須恵器で92は蓋片でつまみ部を欠損しているが天井部が平坦であることと端部の屈曲から本遺跡で出土している須恵器蓋と差異はない。94はやや大型の鉢で底部から口縁部に向かい、斜め直線に立ち上がる。復元ではあるが口径約21cmを測り、口唇部は小さく外反する。ナデ消してはいるが指圧痕、叩きが僅かに確認できる。95は短頸壺で基部はやや太く直立し端部は内傾する。胸部上位に最大径を持つ球体を呈するが、底部は不明である。僅かに高台が残存した。頸部に回転ナデ後、搔目を文様として意識したか。胸部下位は格子状叩き目が確認される。藏骨器に見られる器形である。

96～99・101は楕円形の磨石類で、その平面を使用した遺物であるが、99以外は敲打痕を有する。また102は短冊状を呈している。100は判断に迷ったが磨石の痕跡はあるが、側面の打痕と対比する側辺にやや壅みがあることから石錘として仮置きした。103は砂岩製の棒状加工工具で全体にいねいな磨きを施され、端部に極小の敲打痕がある。生産具とは考えにくく石棒端部であろうか。

S-048 (S-060 第61～65図)

1工区D・E-3グリッドにおいて検出した溝状遺構である。長さ3.2m、幅約1.8m、深さ0.7mを測る。調査区の北側に広がっており、主軸はN=35°～Wである。遺構検出当初は土坑と思われた遺構であるが、遺構検出を繰り返したところ溝状遺構と判明した。

本遺構はS-047と検出面 規格、土層、遺物出土状態、主軸など類似しているため、これもS-047と連続した性格の遺構であろう。またS-047-S-048間は1.8m離れているためブリッジ状をもつ機能であったか。本遺跡ではS-047は調査区外、S-048は後世の溝(S-051)により消滅しているため詳細は不明であるが、水田等の生産に関与する機能や、鉄製品(刀子104)の出土より館の堀の可能性もあると想定した。85は土師器環で口径約14cm高さ4.7cmを測る。底部は丁寧なナデ調整が施されているため不明瞭であるが、回転ヘラ切りのようである。

S-049 (S-033 第66・67図)

2工区西側にあたるA～C-7・8グリッドにおいて検出された溝状遺構で、西北から南東へとさらに調査区外へ延びN=30°～Wを測る。完掘状況を観察すると、S-047と同様に床面は鱗状面(第66図)が見られる。これも人力掘削時の単位的な痕跡であろう。層は南西侧から入り込んだ形成で人為的な埋立てではなく、自然作用による時間経過を示す。断面はA-A'は三角形、B-B'は椀状と統一感に乏しいが、全体ではその断面は皿状を呈し安定する。S-020を切っていることから、この遺構以後になるであろうが、西北方向は河川が存在することから、後年の水田排水用の機能を持つものか。

遺物は流れ込みであるが、105・106は土師器浅鉢で105の外器面はハケ後ナデ後ミガキ、内器面は

ケズリを施す。口径はいずれも 23 cm 程であるが、105 には口唇部に細い沈線が 2 条入るが、106 はそれが明確でない。また残存資料からも器高に差異があるようである。107 は土師器の小型壺で調整、口縁部の形成などから 105 と同時期であろう。108 は須恵器壺の口縁部から頭部資料で外器面は格子目、内器面は同心円状の叩きがあり、当て具を使用したことが理解できる。残存としては僅かであるが、この遺物は大型の壺の様相を呈する。口縁は強く屈曲し、さらに口唇部には 2 条の沈線を施すていねいな造りである。外器面には焼成時の自然釉が一部釉垂れを発生させていることから、火力の強い位置に置かれていたのであろう。

S-050 (S-003 第 68 図)

2 工区 J・i-26 ~ 30 グリッドにおいて検出された西北西に長さ約 24 m 幅 0.5 m の溝である。深さは 0.3 m ほどで N-72° -W を測り、細長く浅い溝である。弥生住居 S-006・S-007 を切っているためこれ以降の時期であろうが、検出面からも古代遺構と考えにくく、また規格化され、工作も感じる。溝の深さは 0.25m 前後のほぼ水平であるため、溝と仮定したならばその流れは緩やかであり、また白川に沿い緩やかな角度を持つため水田排水の可能性が想定される。

109 は径約 8 cm の小皿で高台ではなく底部は糸切り技法で、全体的に簡素な製作の感を受ける。内器面は褐色に変色しており、外器面は口縁部の一部に油煙も認められることから大量生産された灯明皿であろう。110 は大型の棒状の磨石敲石であり平面使用であるが、端部に長さ 3 cm 幅 0.7 cm ほどの V 字状の刻みがあり、これは磨き作業に使用されたのであろう。

S-051 (S-062 第 69 図)

1 工区 A-6、B-5・6、C-4・5、D-3・4 グリッドにおいて検出した溝状遺構である。長さ 21.2m、最大幅は 2.1m、深さは約 0.7m であり調査区の北側に広がっている。当初は白川に近接し、且つ平行であり土層は粗砂を確認したため、白川が削平した落ち込みに溜まった自然地形であると考えた。掘削中 S-047、S-048 の軸とほぼ L 字状となることに気付き、遺構と意識して調査した。しかし、S-048 は S-051 に堆積していた粗砂を除去後検出した遺構である為、S-047、S-048 とは埋土が異なりその関連性は不明である。

(ピット)

S-052 (S-014 第 70 図)

1 工区東側 D-7 グリッドにおいて検出されたピットである。大きさは径約 0.4m の円形と考えられるが調査区外へ延びている。遺物は出土しなかった。周辺の遺構と並ぶ事が出来なかつたため詳細は不明であるが、土層観察では凝灰の第①層が認められることから、これは柱痕跡の可能性もある。

S-053 (S-015 第 70 図)

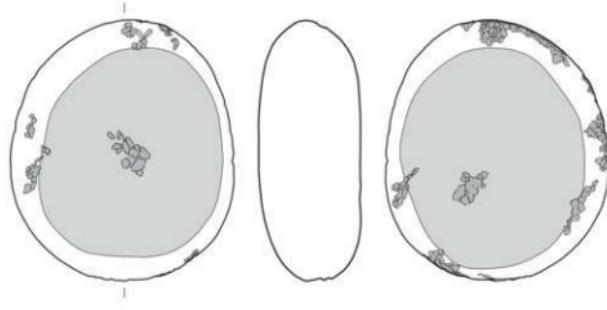
1 工区東側における D-6 グリッドに位置するピットで、長軸約 1.0m、短軸約 0.7m、深さ約 0.7m の橈円形状である。埋土から観察すると掘立柱は北東の方向から第④層、第①層の 2 回建てられた事が想定され、これは最初の柱位置に不都合が生じた場合に、新たに柱穴を構築する掘立建物の隅柱に見られる形状である。111 は土師皿で復元口径約 12 cm を測り、底部は回転ヘラ切りである。内器に油煙が一部見られることから、灯明皿等の照明具に用いたのであろう。

S-054・S-055 (S-016・S-026 第 70 図)

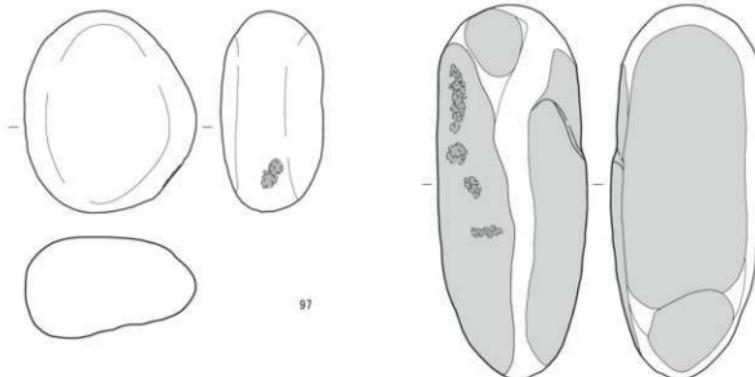
1 工区東側 C-6 グリッドに位置するピットで、重複している。双方径約 0.5m の円形を呈しているが、深さには差異があり、S-055 は約 0.1m、S-054 は約 0.3m である。埋土は灰褐色及び黒褐色で構成されている。また平面及び断面を観察することで S-054 が新しい事が確認できる。



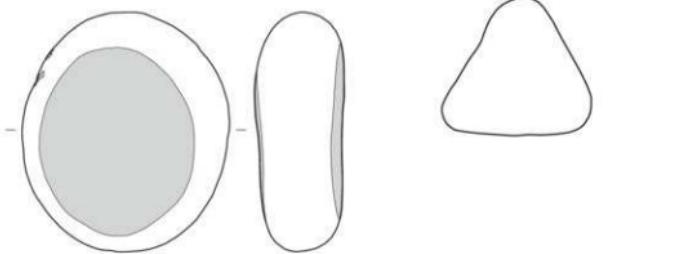
第63図 S-047・S-048出土遺物実測図1



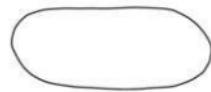
96



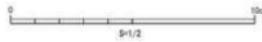
97



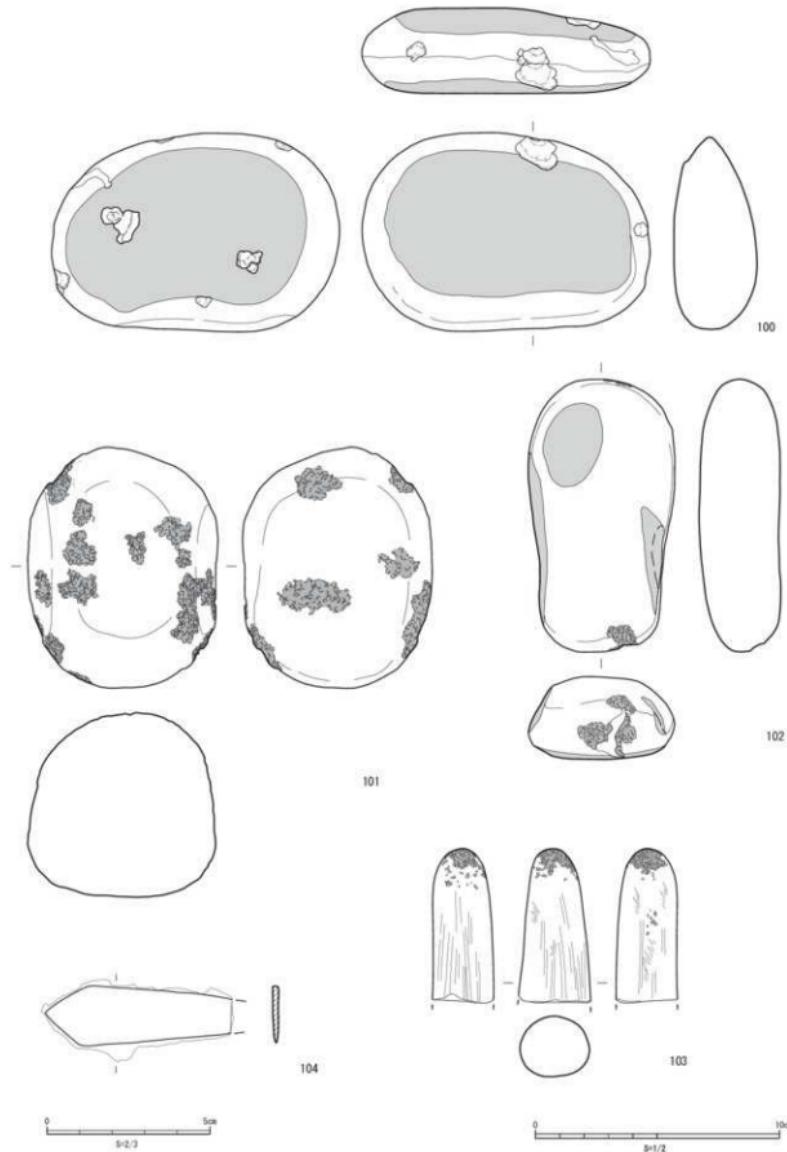
98



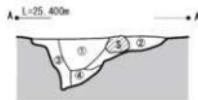
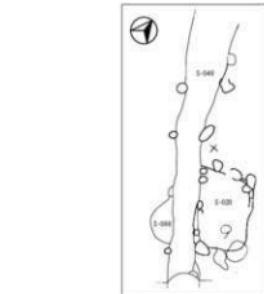
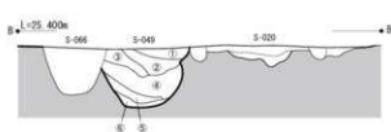
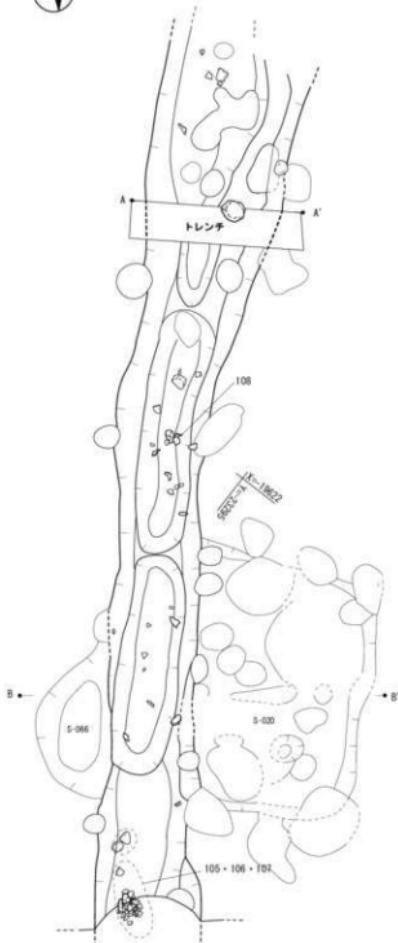
99



第64図 S-047・S-048出土遺物実測図2



第65図 S-047・S-048出土遺物実測図3

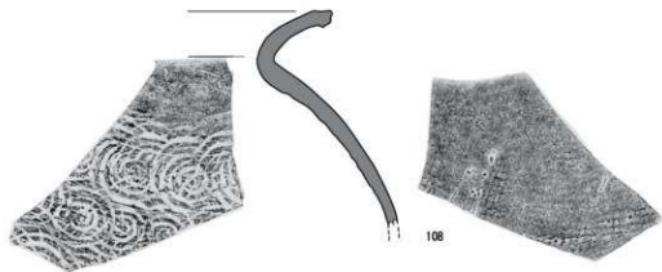
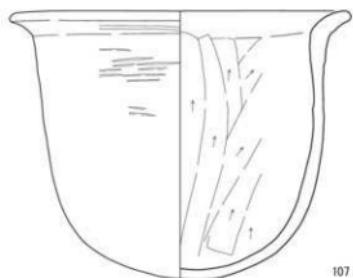
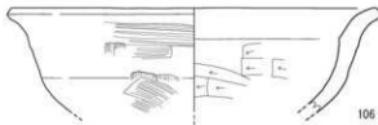
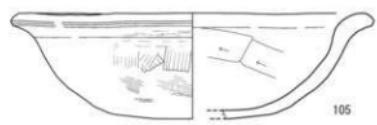


- ① 10F84/4 細粒
中粒砂混じり粘土質シルト しまり強 砂岩含
- ② 10F82/3 細粒
中粒砂混じり粘土質シルト しまり中
- ③ 10F83/3 細粒
中粒砂混じり粘土質シルト しまり中
- ④ 10F84/3 にがい黄褐色
粘土質シルト しまり中

- ① 10F83/4 細粒
中粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
- ② 10F83/3 細粒
粘土質シルト しまり弱
- ③ 10F83/3 細粒
中粒砂混じり粘土質シルト しまり中
- ④ 10F82/4 細粒
中粒砂混じり粘土質シルト しまり中
- ⑤ 10F82/3 黒褐色
粘土質シルト しまり中
- ⑥ 10F83/3 細粒
粘土質シルト しまり中

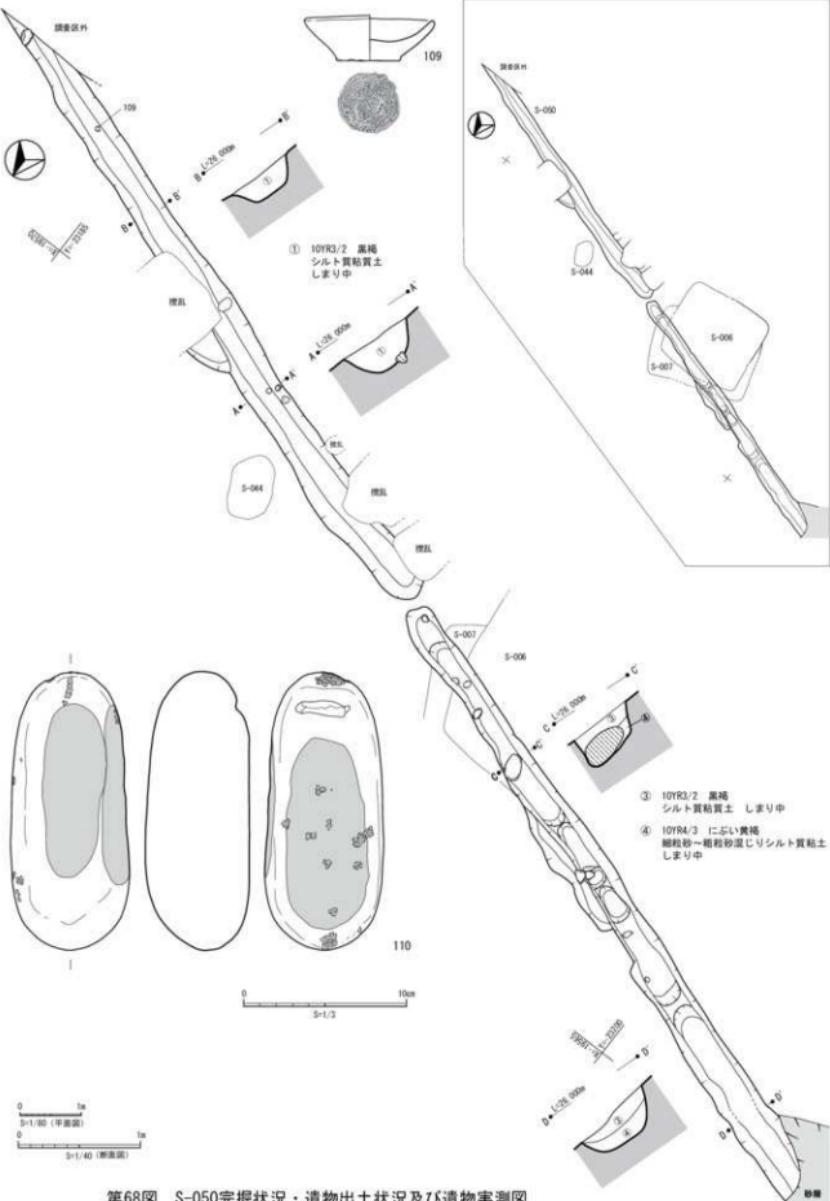
0 1m
5-1/60

第66図 S-049完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

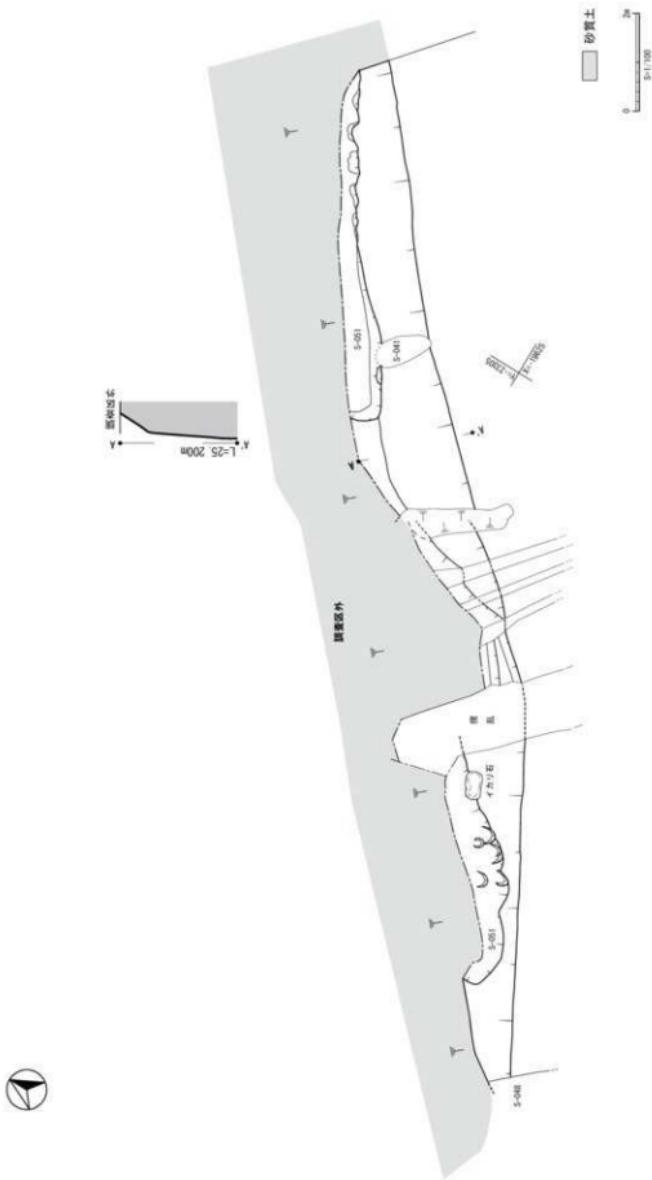


0
5cm
5:1/2

第67図 S-049出土遺物実測図



第68図 S-050完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第69圖 S-051完掘状况

S-056 (S-020 第 70 図)

1 工区東側における D-6 グリッドに位置するピットで、長軸約 1.0m、短軸約 0.5m、深さ約 0.7m である。これも S-057 と性格が酷似し、ピット構築ならば、このような方法を行ったことを窺い知ることができる。

S-057 (S-019 第 70 図)

1 工区東側 D-6 グリッドに位置し、長軸約 1.2m、短軸約 1.0m の橢円形のプランであるが、掘り込み形状は最深部に向かい皿状から U 字状に変化し、その深さは約 0.9m ある。埋土から観察すると先に皿状の掘削を行い、その後、深堀を行っているようである。これもピットの範疇であろうか。

S-058 (S-054 第 70 図)

1 工区東側 D-6 グリッドにおいて検出された土坑である。S-002 と重複しているが、S-058 が S-002 より新しい。長軸約 0.6m、短軸約 0.5m、深さ約 0.7m の円形であるが、全体はピット状の掘り込みのようで、特に最深部は柱が屋根等の重みで沈む際に見られるが、柱痕跡などは見られなかった。これは柱を後に抜取りしたのかも知れず。

S-059 (S-048 第 70 図)

1 工区 D-5 グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は円形を呈し、断面形態は回字状を呈する。径 0.6m、深さ 0.45m の規模である。この遺構も S-058 と同じように中央部に柱痕跡と思われる径 0.15m の窪みを検出した。

S-060 (S-045 第 71 図)

1 工区 D-4・5 グリッドにおいて検出されたピットである。平面形態は円形を呈し、断面形態は回字状を呈する。径 0.45m、深さ 0.6m の規模である。土層では上層に白色粘土（第①層）が混入し、下層には混入していない。この理由は不明であるが、この遺構が柱を伴うものであるならば、柱固定のため粘性のある素材を使用したのであろうか。

S-061 (S-047 第 71 図)

1 工区 F-4 グリッドにおいて検出されたピットである。平面形態は橢円形を呈し、断面形態は U 字状を呈す。長軸 0.35m、短軸 0.25m、深さ 0.35m の規模であることから、これも柱痕跡であろう。

S-062 (S-034 第 71 図)

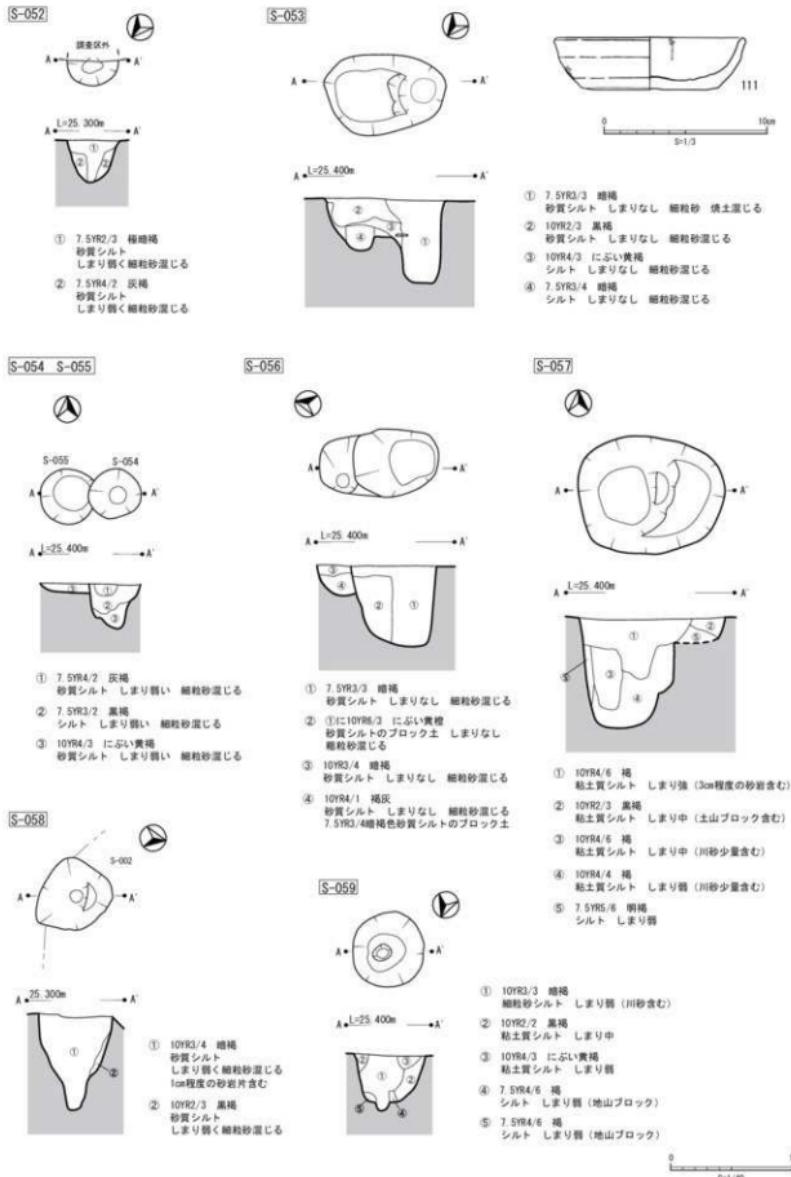
1 工区東側 D-5 グリッドに位置するピットで、径約 0.4m の橢円形状を呈しており、一部は擾乱（現代の導水管部分）に広がっているが、およそそのプランは想定できよう。第①層、第②層が縦状に確認されることから、S-061 と同じく柱痕跡と想定もできる。

S-063 (S-039 第 71 図)

1 工区東側における B-6 グリッドに位置するピットで約 0.35m の円形の形状を呈しており深さが約 0.2m の U 字状を呈する。遺構検出時には S-001 に伴うピットと考えられていたため掘削を開始したが、半裁中に底部から鍍金製の耳環（112）が単独で出土した。6 世紀の遺物であり本遺跡の弥生期、古代（8 世紀）に伴わないので、この遺構は廐棄に伴うものか、他に目的があったのかその性格は不明の遺構である。

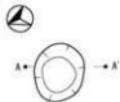
S-064 (S-019 第 71 図)

2 工区中央にあたる I-22 グリッドに位置するピットで、約 0.5m の円形の形状を呈しており深さが約 0.4m の U 字状を呈する。分層されているがほぼ同一層であり、このピットから遺物出土もなかったため性格は不明である。

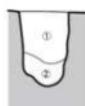


第70図 S-052・S-053・S-054・S-055・S-056・S-057・S-058・S-059完掘状況及び出土遺物実測図

S-060



A L=25.400m A'



- ① 10YR2/3 黒褐色
細粒砂まじり粘土質シルト
しまり弱 (白色粘土 (灰?) まじり)
② 10Y4/6 灰
粘土質シルト しまり弱
(地山ブロックまじり)

S-061

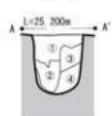


A L=25.400m A'



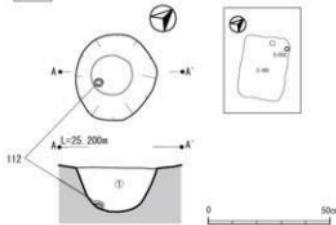
- ① 10YR3/3 黒褐色
細粒砂混じり粘土質シルト
しまり弱
② 7.5YR2/4 灰褐色
しまり極めて弱い
(地山ブロック混じる)

S-062



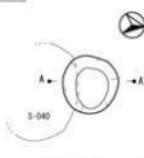
- ① 7.5YR0/3 黑褐色
細粒砂混じる粘土質シルト
しまり弱 (川砂岩)
② 7.5YR4/4 ぶい褐色
シルト しまり弱
③ 7.5YR4/6 灰褐色
細粒砂混じりシルト しまり弱
④ 7.5YR5/6 明褐色
シルト しまり弱

S-063



- ① 7.5YR3/3 黑褐色
砂質シルト (しまりなし 細粒砂含む)

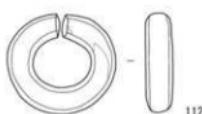
S-064



A L=26.000m A'



- ① 7.5YR3/2 黒褐色
シルト質粘土 しまり弱
② 7.5YR3/1 黒褐色
シルト質粘土 しまり中



第71図 S-060・S-061・S-062・S-063・S-064完掘状況及び出土遺物実測図

(集石)

S-065 (S-007 第 72 図)

1 工区 D-2・3、E-2・3 グリッドにおいて検出された集石である。川原石 20 点を検出した。

検出を繰り返した結果、川原石のみが出土した遺構となり、下位の掘り込みは確認できなかった。やや大型である径 40cm 程の礫を 2 列分並べて敷き詰めている為、家屋等の建造物土台として使用されたか、またこの列間に空間があるため溝機能の要素も考えられるが、遺構把握としては残存部として僅かであるため情報が不足し、その性格は不明である。ここでは集石として仮掲載した。遺構からは近代以降の陶磁器片が出土したため、近現代であると考えられ近年構築されたものであろう。

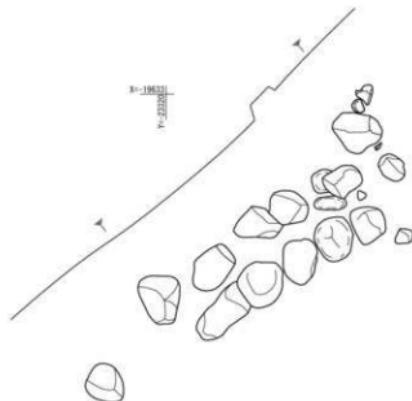
(不明)

S-066 (S-049 第 72 図)

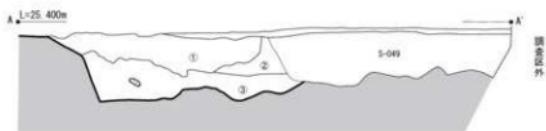
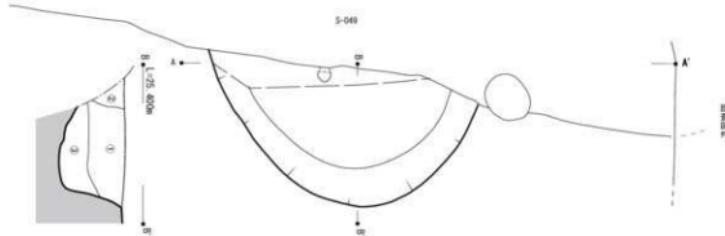
1 工区 C-8 グリッドにおいて検出された遺構である。

長軸残存 2.2m、短軸残存 1.0m の橢円形の一部が確認された。深さ 0.5 m でありその形状から土坑状であるが、S-049 に切られ、また出土遺物もないため詳細は不明である。

S-065



S-066



- ① 10YR4/4 黒
細粒砂混じりシルト しまり弱
(川砂含む)
- ② 7.5YR3/3 黒褐色
細粒砂混じり砂質シルト しまり弱
- ③ 10YR4/4 黒
シルト 細粒砂混粘性シルト しまり中
(地山ブロック含む)



第72図 S-065・S-066完掘状況

第4章 遺物

縄文

早期（第73図113）

113は押型文土器で、その文様は楕円文の断片資料であるが、これは円筒形土器の胴部であろう。押型文の時期で早期に該当する。

後期（第73図114～第76図）

この時期の遺物としては114の胴部下位から底部の資料である。胴部が底部に向かい直前でやや窄まり、ここにケズリと指圧による調整を施す。底部はナデ調整を幾度も行い平面を形成している。南福寺式に該当するであろう。この遺物の中心は後期中葉の北久根山式が主である。この土器は口縁形態に把手や貼付け文を持つことが知られている。115～120は把手の中に空間が生じ橋状を呈し、122・123は口縁に沿って横に粘土紐を瘤状に貼付している。123は口縁部欠損であるがこれも把手の痕跡が窺え、117・119の口唇部には口唇部に注口状の貼付けが見られ、逆に121・123・128には穿孔が確認される。118・119には渦巻状の沈線が施されており、これを受けて124は口唇部にS字状渦巻文様を貼付けた特異なものであり、この系譜としてここに仮置きした。127は僅かであるが波状口縁を確認でき頸部には大きく盛り上がる貼付けに沈線を施す。

口唇部に穿孔、注口などを意識した部位に突起状に貼付けるものが142であり、さらに穿孔を施すものが138・139である。一見、昆虫類の眼光のように見える。141は注口が口縁部まで貫く特異な施工を施す。また口縁部及び口唇部に斜行刻みを施すのは137・140・143であり146は横施文である。145は口縁から胴部に恵まれている。口縁は波状を呈しその山部は突起状を成し、さらに注口を形成する。口縁、胴部何れも施文はなく無文であるが全体にミガキが施されている。144は斜行と横施文の複合体でこれを口縁部に施すが、口唇部には漏斗状の突起を形成している特異な土器である。147は口縁部が帯状をなさず端部のみが少し肥厚し、この部位に線刻を斜行に施す。149も同様であるが施文が貝殻によるもので観察ではハイガイを使用した感が見受けられる。150は口縁端部が肥厚し、波状口縁を成す。斜行に線刻を施すが、これまでの北久根山式とは異なり、後続する中津式であろうか。また148は口縁部に綾杉状に施文しており、器形はやや外反する。これも土器形式は不明である。137・140は口唇部に線刻を施すものであるが、137は平口縁に連続線刻施文、そして穿孔も施す。

波状口縁は145で他は平口縁である。129～136は平坦な口唇部に沈線を施す。さらに129～131・133・134・136には連続した刺突を施す。連続した刺突文の129～131もあれば133・134・136のように部分的な刺突文も見受けられる。口縁資料は頸部の文様まで理解出来る。文様の基本は単線を横、または斜行に連続し、その単線間に磨消繩文を施す。151～153・156・159は口縁部と頸部から胴部資料で横U字状の単線であるが、151～153・155・156・159は胴部最大径の屈曲部付近に渦巻状の施文を施す。この渦巻状の施文は他の単線にも影響を与え、残部資料であるが全体が斜行、または緩やかな線刻である。158は口縁から頸部資料で深鉢であるが沈線間の磨消繩文は弱く、また黒色磨研が見られないが全体にミガキは施されている。157は浅鉢の口縁から胴部資料でL字線刻間に磨消繩文を施すが、胴部最大径から下位は残存資料では無文である。154は口縁部資料で深く沈線を施し、そこには赤彩色が確認される。沈線は横、渦巻など複雑であり、全体的に精製されている。彩色が施されることから特異な遺物である。

160・162・163は口縁から胴部資料で160・162は磨消繩文を施すが、160はこれまでの北久根山式の沈線に比べてやや弱く、さらに162はさらに浅く沈線を施した北久根山式に後続する形式であろう。

161は頸部から胸部資料であるが、これも沈線の入り方が土器に対し直角に傾きを持つU字溝であり、胸部最大径から下位は無文である。全体にミガキを施し、精製されている。これも後続する鳥井原式に該当しそうである。163は口縁部資料で口唇部に刻みを施し、口縁部下位は刻目突帯であり、文様は波状に線刻を巡らす。黒色であるが磨研を施さず粗製土器である。164は底部資料であり、平底で底部近くに2条の沈線を巡らすが、これも細くやや浅い。黒色磨研で精製されている。

166は口縁から胸部最大径を含む資料である。胸部上位は棒状工具による緩やかな放射線の斜行状続した調整を施す。胸部下位はナデ調整のみであり、最大径は意識しておりこの境界は一見、突帯形成にも見える。器形は深鉢であろう。167は口縁から胸部資料で全体をていねいな作りでこのまま底部へと窄まる鉢であり、165も口縁から胸部資料で口縁部に稜線を持ち、ここから胸部が膨らみ、底部へと向かう。無文であるが黒色磨研土器の浅鉢であろう。

晩期（第77図168～172）

168～172は晩期土器に見られる組織痕土器である。網目圧痕で168・169は網目が2mm程の密で170～172は4～6mmのやや幅広で、土器内面は丁寧なミガキを施している。型自体に由来する文様であろうが、何れも小破片であり、また点数も5点を数えるにすぎない。従ってこの資料から多くを述べることは困難であるが、黒川式土器の浅鉢にその傾向が見られることを付加しておきたい。また前述した土器内面の丁寧なミガキは浅鉢の内面を使用とそれを意識したことであろう。

弥生（第77図173～175）

173は弥生甕の底部であるが、この形式に近いのが174である。しかし輪積みによる空間が存在せず、塊を成している。明確な時期も不明であるが、ここに仮置きした。175は弥生土器の甕や高杯に見られる口縁部である。赤彩を施し暗文も確認できるが、口縁内部を欠損しているため明確な形式は不明であるが弥生中期に見られる器形である。

古代（第77図176～第78図）

176は土師器の坏で全体に彩色を施し、また輪状の暗文も確認できる。177は土師器塊である。全体に彩色を施しているが、内部口縁附近に黒煤が多く見られる。これは灯明の痕跡であろう。本来、器としての機能から照明具として転用されたものであろうか。179は土師皿で口径約16cmを測る大振りである。彩色を施され底部には墨書が確認できるが摩耗し僅かに「和太□□」まで判別出来る。178も墨書土器で残存部は「木大□」と読める。底部資料の一部のため器形は不明であるが、何れも彩色土器に墨書が施されている。

180～185は生産具の範疇である。180は紡錘車で、残存は1/3ほどであるが円形状を呈する器形のため復元径は4.8cmとした。181は移動式竈の上位部小破片で両面はていねいに成形されている。小破片のため全体構造は不明である。184・185はていねいな面取りを行っていることから硯と想定した。小破片のため時代設定は不明であるが、硯の出土により文字について連想が可能か。182・183は土錐で「孔径の2倍値L、土錐の長さを最大幅で除した数値Pを計測すると $0 \leq L \leq 0.25$ で、 $1 < L < 7.0$ の刺網のものと $1 < L < 3.0$ の袋網（地曳網、底曳網）に大きく分けることができる」（真鍋篤行 1994）に照らし、183は完形資料ではないがこれも白川を対象とした小規模刺網の存在を窺わせる。186・187は近世磁器破片であるが、187は胸部下位、186は見込みを意図的に円形再加工している。これは中世輸入磁器二次加工の「瓦玉」に酷似しており、「瓦玉」が遊具と考えられているため、これらの遺物も同様の性格を持つものであろう。

石器（第 79 図～第 85 図）

188 ～ 195 は石鎌である。いずれも無茎鎌で、形状が正三角形に近く抉りが僅かな三角鎌の 188、二等辺三角形の 194・195。基部に抉りの入る 189・190。U 字状の深い抉りの 191 ～ 193 である。特に 191 は辺部に細やかな鋸齒状の剥離が確認される精巧な作りである。本遺跡での石鎌の材質は黒曜石 188・191・194、また肉眼観察では 194 は大分県姫島産黒曜石のようである。チャートは 189・190・195、安山岩は 192・193 である。196 は石核で全縁に点状打面があり、作業面に残る剥離痕から不定形な幅広で厚みのない剥片を取ることを目的とし、石鎌等の素材剥片獲得を目的とした石核であろう。石核として一度の使用で、作業面再生が見られないことから、次回に使用することを意図し保管したとも考えられる縄文の遺物である。出土状況は赤生住居地の埋土の中層下位であるため遺構には伴わないと判断し、ここに仮置きした。材質は安山岩である。

197 ～ 201 は二次加工剥片である。縦長剥片の 197 は側面に気泡を含む 198 は左側面に使用痕、200 は節理の多いチャート製のため石核状の剥離であり側辺に使用痕が見える。199 は安山岩製の縦長剥片で小判状を呈し、その側辺に二次加工、使用痕が確認される。この二次加工石器は削器として使用されたものであろう。何れも包含層出土で本遺跡の遺構からの出土ではない。201 はサヌカイト質の縦長剥片を二次加工した石器で自然面も残る。石匙（202・203）が出土している。この石匙の出土状況は遺構埋土中であり住居時期の遺物かの判断が困難であるが、包含層出土遺物としてここに掲載した。204 はサヌカイト製の円盤状石器である最大径 9 cm 強を測り、片手で持ちやすい大きさのため手斧のように使用したのである。

205 ～ 208 までは打製石斧である。205 は小型の打製石斧で材質はサヌカイト質。206 は欠損している。207・208 は完形でやや小型の部類であろう。材質は安山岩である。209 は粘板岩製の局部磨製石斧であるが、これは素材的には強固な岩石ではなく、しかも厚みもないため倒木などの機能より捕種等の土掘り等に使用したものか。211 は磨製石斧の破片である。本来は残存部の半分から 1/3 近くを有していたか。全体に調整され、局部は丹念に磨かれている。半裁されたような残存状態で、これは局部に強い衝撃を受けたことによるものであろう。材質は輝石が確認されることから輝石安山岩である。210 も同様の磨製石斧であるが、この破片は中央部に斜行の窪み部が確認され、この部位は特に磨痕が見られることから、砥石的な二次使用が想定される。

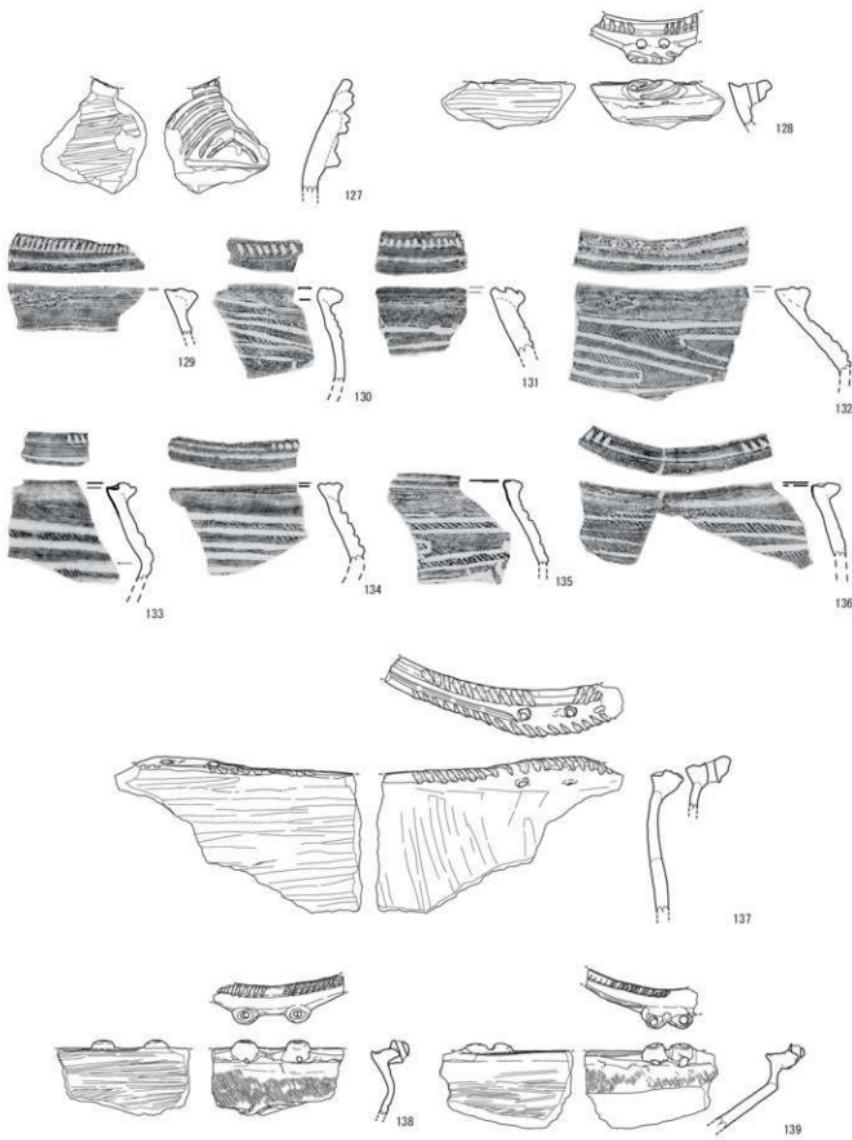
212 ～ 220 は敲石・磨石類である。212・214・215・218 は原形を保っているが、他は使用時に破損し廃棄したものであろう。棒状のものは 214・215 で他は梢円または円形を呈する。また 215 は 3 側面に僅かに擦痕が認められる。213 は打痕が多く認められることから使用時に破損し、廃棄されたものであろうか。218 も平面に多くの打痕が認められ、使用頻度が高いことを窺わせる。216 も破損後、廃棄された遺物でこれも本来は梢円形状を呈していたろう。したがって 213・216・217 は破損し本来の目的を消失したために廃棄した遺物である。219 は側面に磨痕が認められるがこれも廃棄された道具である。220 は風化の激しい安山岩で一見、脆い感じを受ける。これも廃棄された道具である。221 は本来、敲石であるが打痕の激しい箇所は抉り状を呈し、これにより大型石錘の形状を成すように見える。これが石錘としての根拠は乏しいが河川沿いの遺跡立地であることから、石錘の出土の可能性を示唆する遺物である。

222 は小型砥石破片で四面全て使用されている。先端に向けて幅広くなる形状であろう。これは近年においても使用されている砥石にも見られた。材質は天草砥石である。223 短冊型を呈し、その断面は三角形であるが、どの面も磨痕の頻度は多くトロトロする感触である。形状から片手で使用した砥石であろうか。

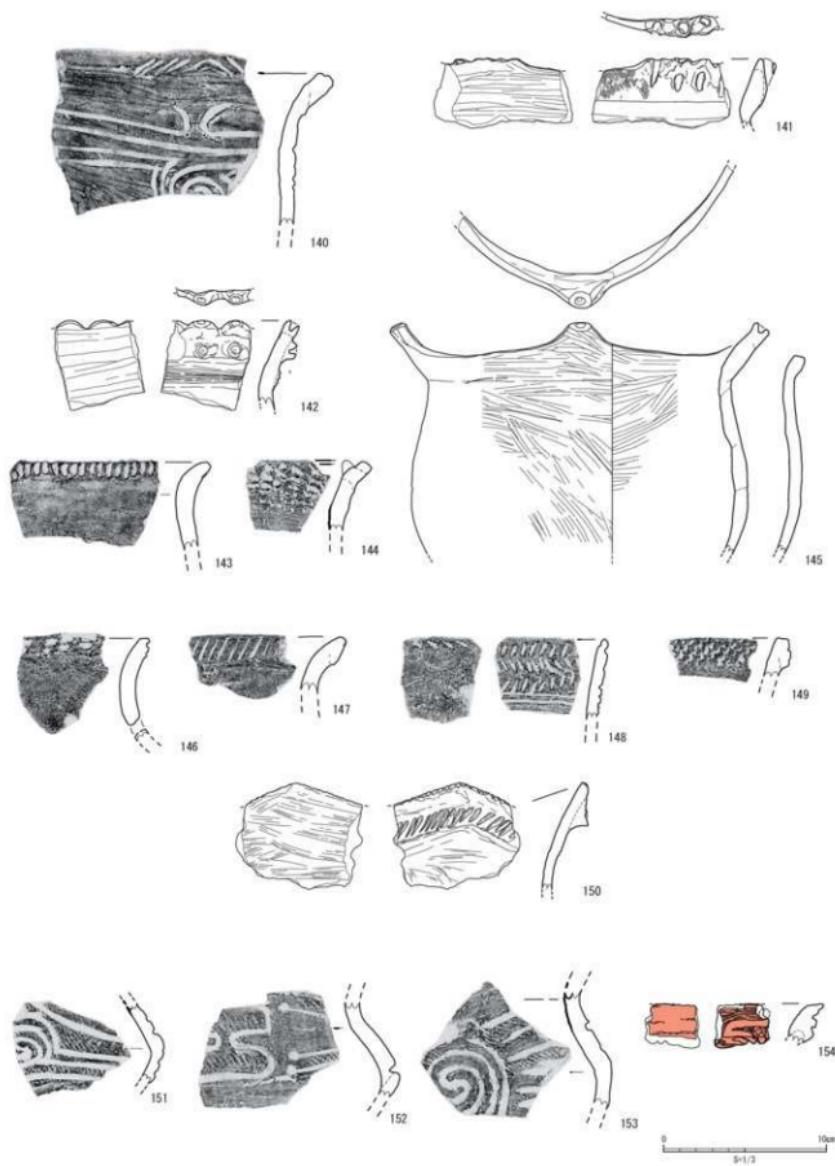


第73図 出土遺物実測図1

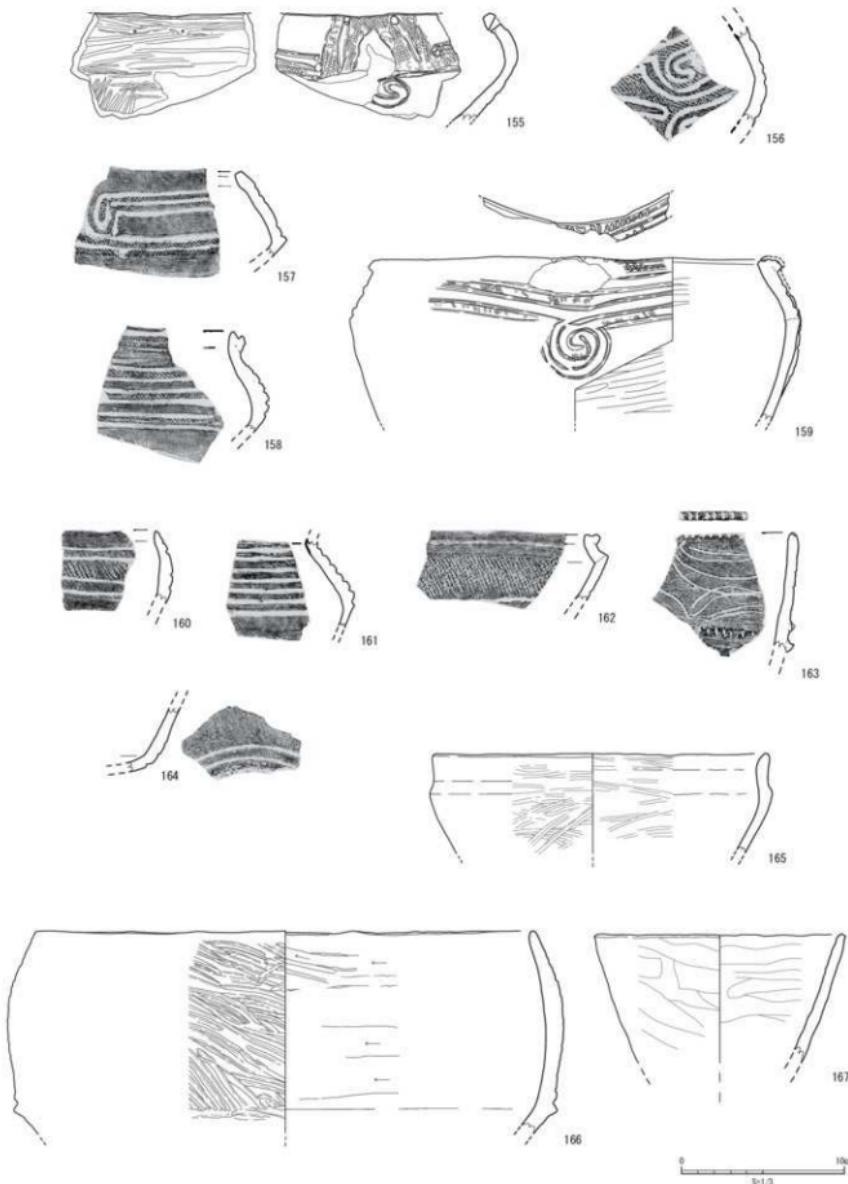
0 5cm 10cm
S-1/2



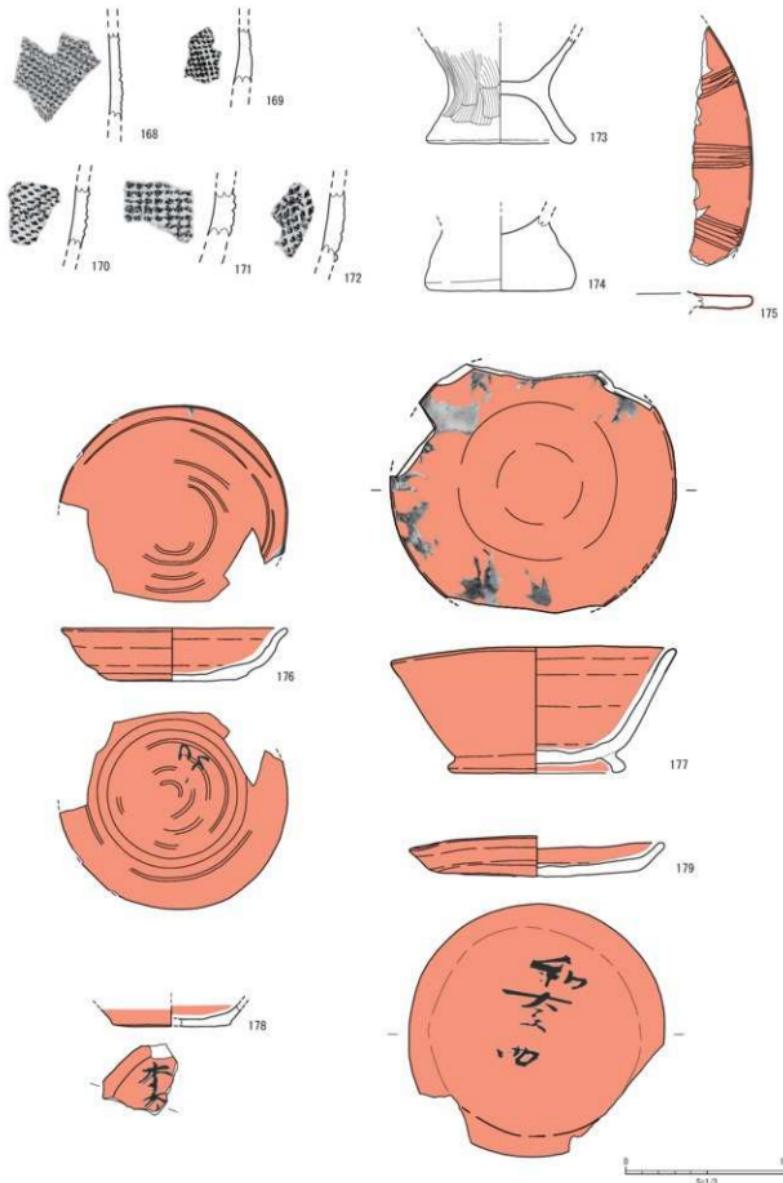
第74図 出土遺物実測図2



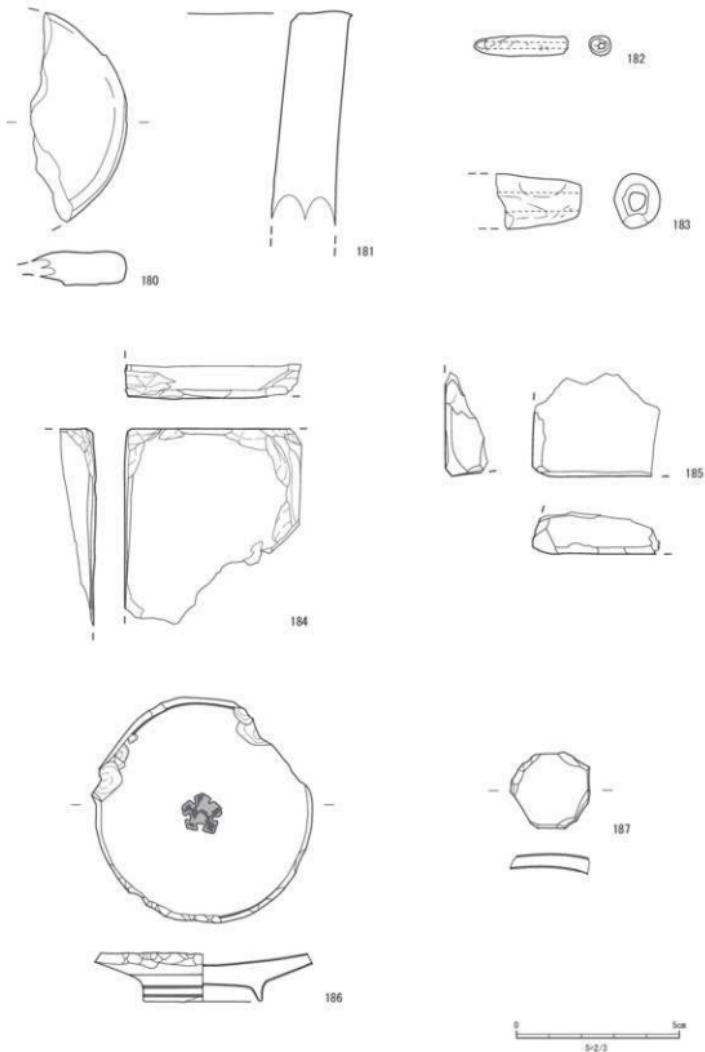
第75図 出土遺物実測図3



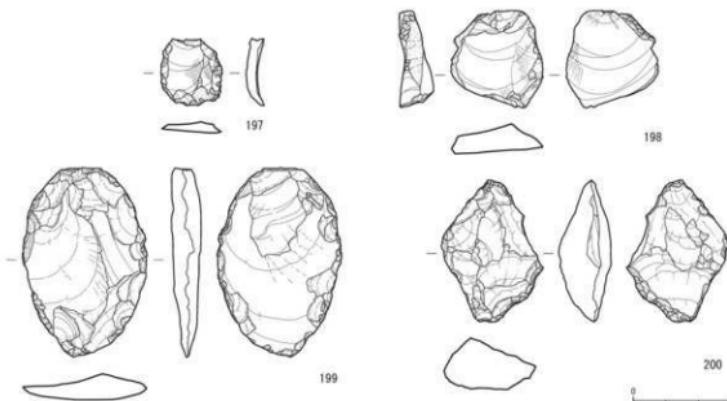
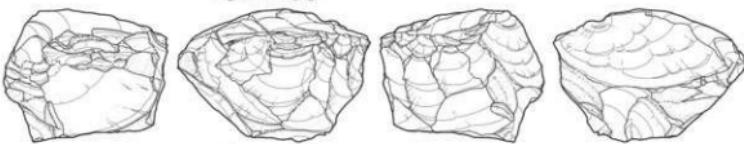
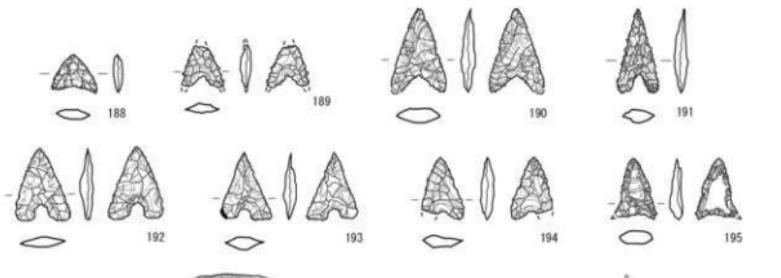
第76図 出土遺物実測図4



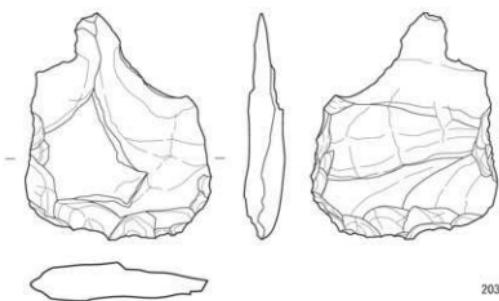
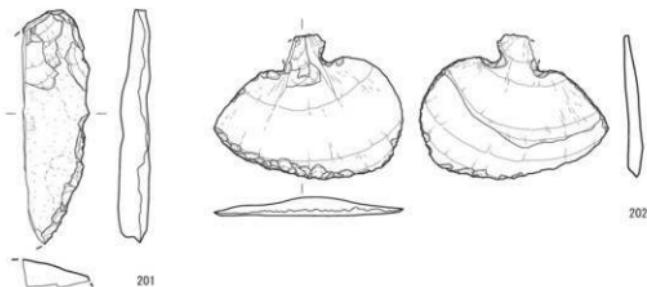
第77図 出土遺物実測図5



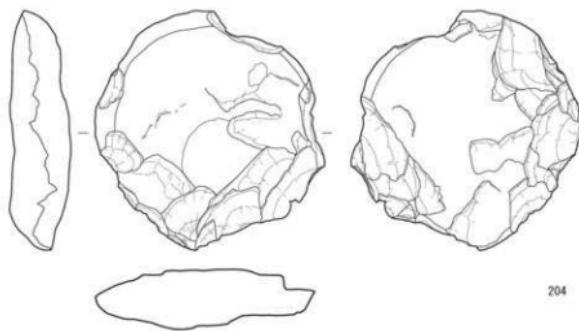
第78図 出土遺物実測図6



第79図 出土遺物実測図7

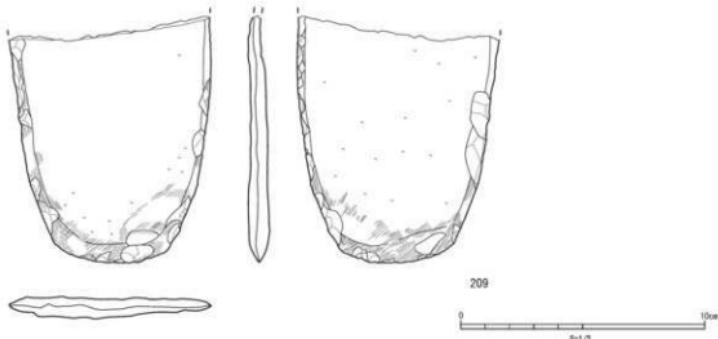
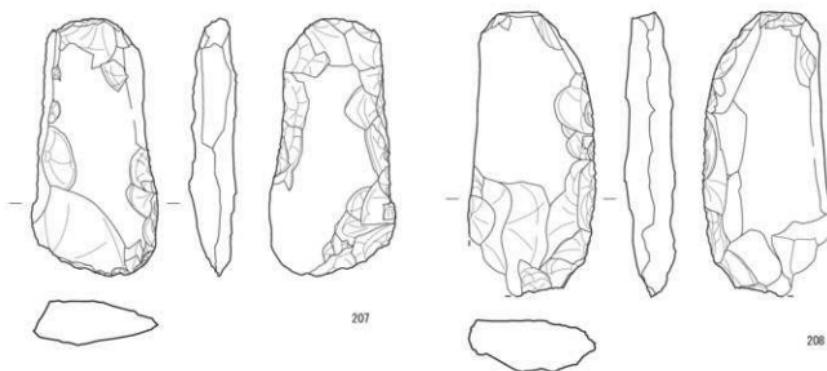
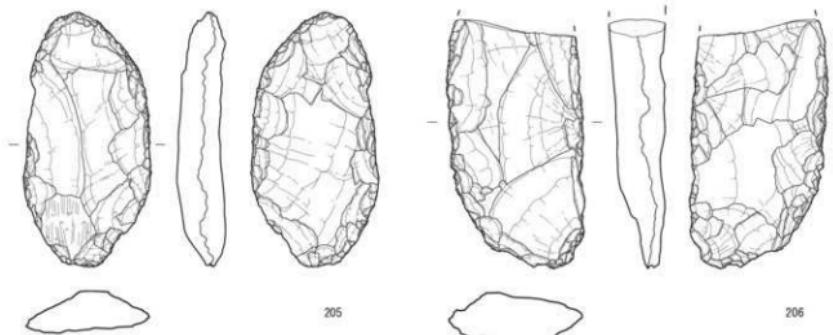


0 5cm
3-2/3

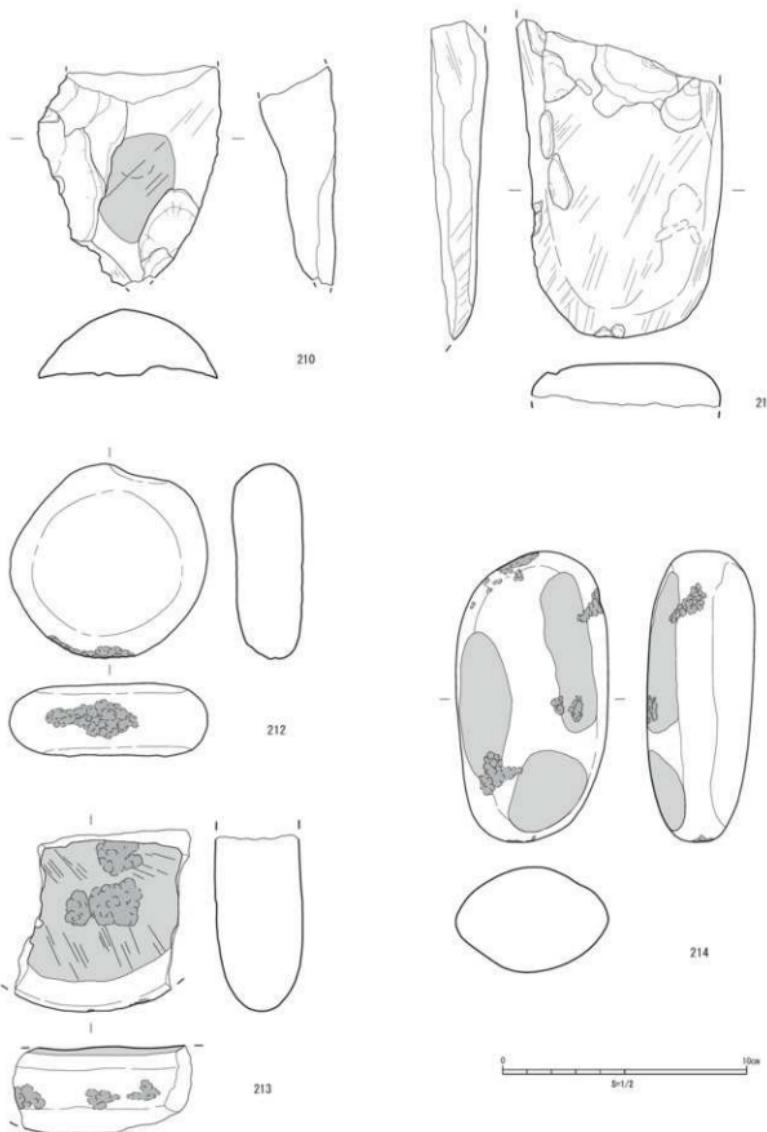


0 5cm
5-1/2

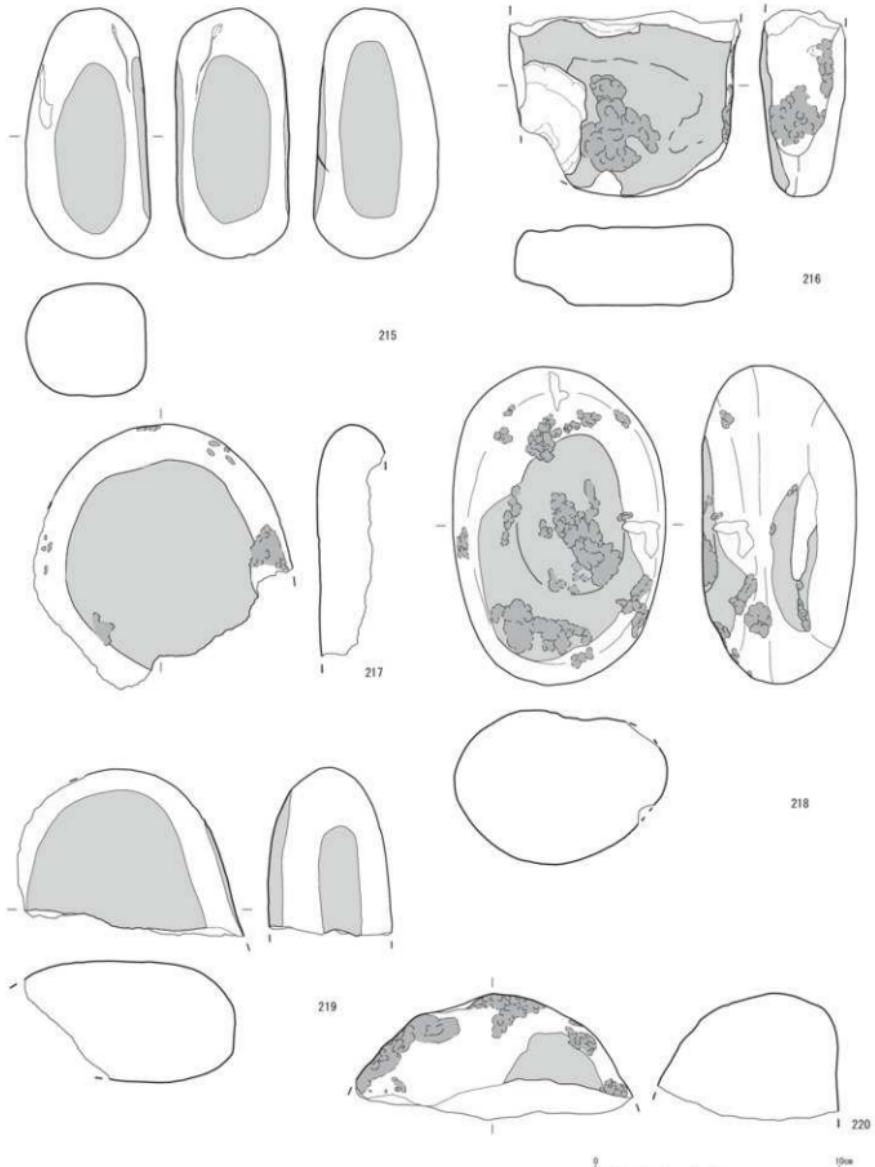
第80図 出土遺物実測図8



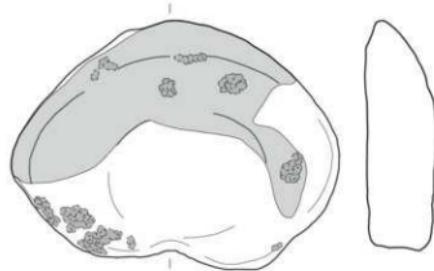
第81図 出土遺物実測図9



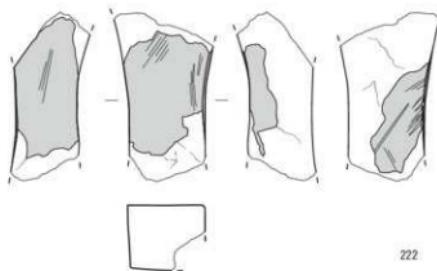
第82図 出土遺物実測図10



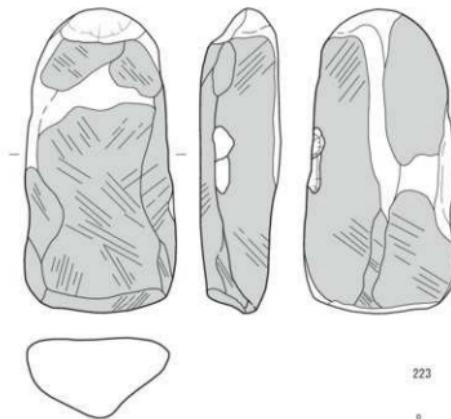
第83図 出土遺物実測図11



221



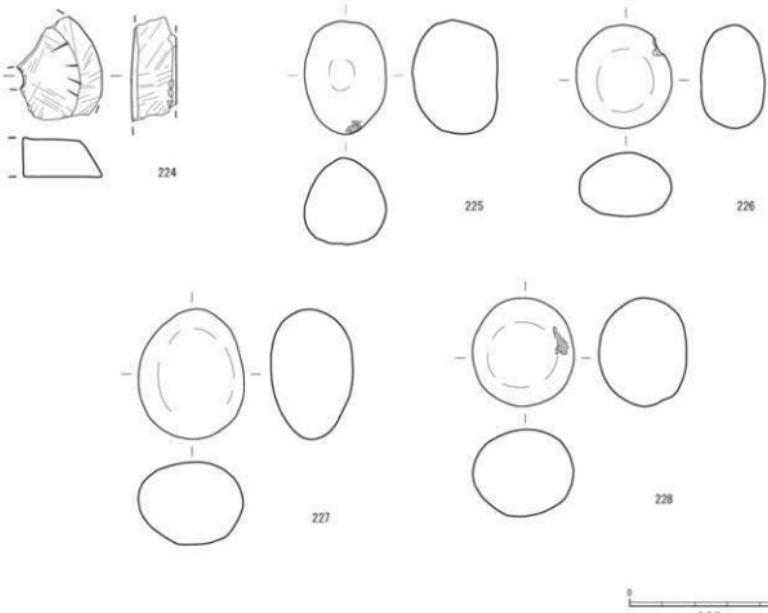
222



223



第84図 出土遺物実測図12



第85図 出土遺物実測図13

224は紡錘車の破片で円形を呈するため復元値として径5cm程であろうか。またこの遺物を観察すると全体にていねいな磨きを施すが、上面に5~6mm間隔で放射状の線刻があり、これを意図的におこなつたならば、なにか目的があったのであろう。

225~228は小型石で特異な加工は見られない自然石であるが、これは菊池川に近接した弥生期水田遺跡の玉名平野条里跡（2014年）でも出土し、後日、山崎純男専門調査員より水田鳥害対策の投石と教示を受けた。この事例を参考とし、その形状も酷似しており、本遺物も草に入る規格を河川にて容易に入手できる立地条件などもある。しかし本遺跡出土遺物は、安易に投石と断定はできないが、遺跡の周間に水田の存在とその生業を想定させる一助にもなろうか。

第5章 総括

第1節 遺構

検出遺構は住居23・土坑23・溝4・ピット13・集石1・不明遺構1である。住居は弥生中期と古代（8世紀）に大別され、従ってこの遺跡はこの時期に比定されるであろう。弥生期の住居は5m四方の規模で、中央に炉を持ち4本柱が主であるがS-008は特異な円形プランである。これまで円形住居地は上の原遺跡（熊本市南区城南町）、谷頭遺跡（阿蘇郡西原村）などで検出されている。またS-005は8m強を測る円形住居地で、また住居地としてもかなり大型である。本遺跡の近隣では上南部遺跡（熊本市東区上南部）においてS-005と同様の遺構（上南部遺跡3号竪穴建物）が検出されている。この大型円形住居には中央部に土坑状の掘り込みが検出され、極小炭化物も存在していることから、この土坑が炉跡と想定されるが、全体の性格としての住居としての機能的な要素を含めうまく説明ができない。今後の類例を重ねていただきたい。

古代住居はN-45°-E前後で方位の規則性が見出されるようで、また住居内の竈位置の大半は北東側に位置する。これは竈の機能を高めるものか、またはムラの規則性であろうか。住居に関してさらに述べると、この白川河川一帯の検出住居地硬化面が明確でないのは氾濫堆積層の砂質土によるもので、また明確な焼土が検出できなかったのもこのことによる。これは類例として砂浜を踏み固めても硬化せず、また焚火をしても砂に熱が加わるだけで焼土は出来ない。そしてその残存としてのみカーボンが存在することと同じである。したがって硬化面や焼土から住居の期間を想定するのは困難であり、またこれに河川氾濫等の自然災害という係数が加わる。

S-012から須恵器蓋が竈内で安置されたような状況で出土した。また天井部にヘラ記号を持つ一種の特殊な器のため、竈廐棄の儀礼に用いたのであろうか。この類例は新南部遺跡群2（熊本市2016）においてSI1004では住居内の燃焼部最奥部から逆位置に据えられた土師器高壙と土師器壙の出土例がある。火は照明、暖房、調理など生活におけるその効果は多大で、やがてそれは靈力を持ち、そして古代から信仰の対象になる。私の経験では県北の民家で「荒神様を拝見させて頂きたい。」と願ったところ、竈のある調理場に案内された。このように火を祀る家も存在することから、竈の機能を失うことは、住居を廃棄することで、それに伴う儀礼が存在すれば、高い精神性を持っていったと云えよう。

他の遺構として土坑が挙げられるが、その時期と性格は明確でなかった。S-041・S-046などは礫や破損した石器などの出土により廐棄土坑が想定され、またS-027・S-028は遺物出土もなかったが、この遺構はその隅丸長方形プランから土壤墓の可能性もあり、これらを土壤墓域と想定したならば遺跡北から西方面は墓域群を示唆するが、調査にてこの区域は後世の河川侵食を受けていることが判明しているため不確実ではあるが、墓域群はこれにより消滅したのであろう。

S-047・S-048は古代の大型溝である。遺物は多彩で蔵骨器に用いられる須恵器の短頸壺（95）、鉢の94や79～84の照明具など特異な遺物が出土した。S-047・S-048は連続した遺構であり、その間にはブリッジも存在することから、この遺構は溝というより堀の様相を呈し、また出土遺物もこれまで検出された住居等と異なる遺物のため支配者階級の存在を窺わせる。

第2節 遺物

土器・石器他

土器は弥生中期の黒髪式土器を中心で、その器種は壺、甕で破片資料ではあるが甕棺（20）も出土した。また弥生土器口縁部を意図的に連続性の打ち欠き（6）や、胸部上位の穿孔（7）など意図的な作為

の土器も見られた。これらの行為の目的は不明であるが、この類例は近隣では新南部遺跡 10 次（2016 年）35 号建物出土の No.123 の胴部下位に穿孔のある壺形土器として提示してある。またこの穿孔を施す彩色土器を多数出土した南小国町所在の地蔵原遺跡（2004 年）は、弥生中期後半の祭祀遺跡と想定されていることから、器としての機能を消失させる魔除儀礼に伴うものであろうか。

古代は壺、甕など二次焼成を受けた土器の窯内からの出土が多く、これらは煮沸具として使用され、その食性の変化を窺わせる。また古代と推定される溝 S-047・S-048 から出土したこれまでと異なる照明具の灯明皿は、生活状況を窺い知る上で今後注目される。

石器は磨石・敲石の出土が頗るであるが、これは河川に近接しているためその供給が充分であったことによるもので、しかも使用による一部欠損もみられるが、その殆どが完形であることが、このことの理由によるものであろう。また棒状の形態を除く、扁平型の磨石には敲打痕も見られ、擦り、敲く、または小型台石的な多岐に亘る用途に使用されていたのか。現在のように道具は明確な細分化せず、この時代は多目的用途の使用が窺える。

また生業の一端として石鍤（221 他）の出土は河川漁を想定させる。この扁平形は漁網を川底に定着させる機能を持ち、これは刺網系漁撈具「土鍤」の素地でもあろうし、古代から川漁に適した刺網系漁法が存在していたのであろう。また近世磁器（186・187）を意図的に打ち欠く、いわゆる連続削離を施した二次加工遺物が出土した。中世輸入磁器にその傾向が見られる「瓦玉」と同質であろうか。この「瓦玉」は遊具と考えられている。

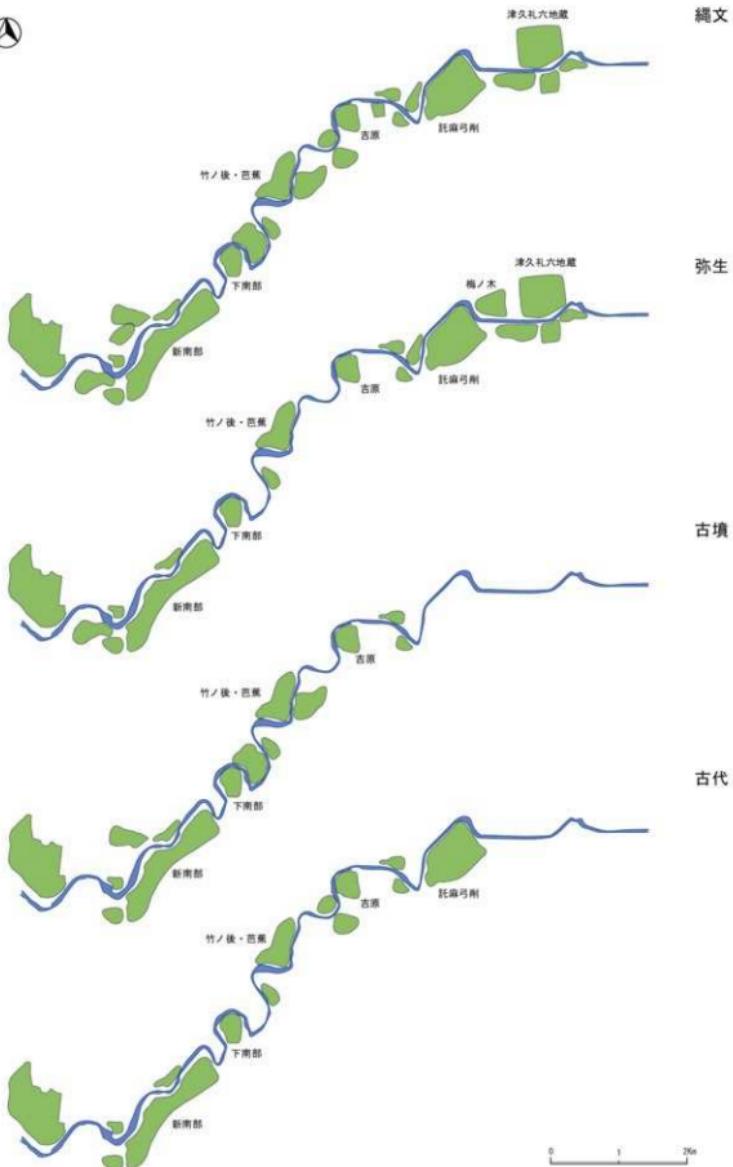
S-063 のピット状掘り込みの中層から耳環（112）が出土した。銅地銀張りで古墳期 6 世紀頃の遺物であろう。埋土は單一層であり、それは流れ込みでもなかった。伝世しやすい性格の遺物でもあるが、遺物だけが本遺跡の時期と異なるため、本遺跡内に古墳期の遺構も存在した可能性も想定される。また周囲にこの時期の遺跡の存在を窺わせるが、耳環という特殊な遺物がピット状掘り込みから出土したことも疑問に感じ、本遺跡では提示に留めたい。

第 3 節 結言

小規模調査地であったがその検出遺構・出土遺物から大別すると弥生時代と古代にピークを持つ遺跡である。本遺跡は遺跡中央部北側が河川氾濫により削平を受けた区域に、後年川砂堆積層が形成されるため、これにより弓状の調査区の中央部が抉れている感を受ける。この区域の情報が欠如しているが、弥生期はその住居跡から遺跡の東端と西端の両端に生活痕跡、古代になると中央よりやや西側と東部端に集中区が見られるよう感じる。これは中央部の欠如部にも遺跡が存在していたならば、弥生期は遺跡西端から東端の手前、古代は西端手前から東端と想定され、これにより若干のずれはあるが、弥生期と古代はほぼ同位置に存在していたと想定される。

本遺跡は本体工事区内の調査であるため、その情報としては僅かであるが、この河岸段丘低位面の蛇行地帯突出部に存在し、弥生時代中期と古代の遺跡であることを改めて確認、そして周知された。そしてその位置と標高からこの突出部全体に広がることも推定される。また遺跡中央部南端、ほとんど調査区外に接する附近で北久根山式土器の出土を認めたため、縄文後期中葉の遺跡が本調査区の北側の突出部である河岸段丘の上位に存在することを窺わせ、近隣の調査報告の成果や、託麻弓削遺跡群 5 区調査（2015 年）の南福寺式土器の大量出土と合わせ、この白川流域に縄文中期から後期にかけて今後、注目する必要も生じる。

ここで本遺跡を中心にして白川流域の時代ごとの図示を試みた（第 86 図）。時代は縄文・弥生・古



第 86 図 白川流域時期別遺跡分布図

墳・古代と大別し、これによると縄文と弥生期について殆ど差異はないが、古墳と古代には白川上流の遺跡が姿を消す。これは遺跡地図を参考に作成した図版で、未調査遺跡も多く詳細な情報ではないため不確実な要素も多いが、「縄文・弥生」と「古墳・古代」に大別できる。縄文期の集落は河岸段丘の上位に形成される傾向があり、これが弥生期になると河岸段丘下位面から低位置に、そして古墳期にはさらに低位面に形成される傾向が指摘されており、古墳後期になると急激に立田山山麓から白川護岸にかけて群集した小型円墳や横穴墓が増加し、「古墳・古代」の遺跡が上流側に存在しないのは、大胆ではあるが遺跡の集約と生活形態の変化があり、ムラの単位も予想されるであろう。それは白川流域の恩恵をうける水田による生産形態が本格化することが想定され、その対象地は近接する上流域、現在での菊陽町辛川附近であり、さらに菊陽町から大津町にも広大な水田地帯が広がり、この近隣に集落の存在を窺わせる。

本県では、現在（2017年）、最古の水田は弥生中期の玉名平野（玉名市）であり、この地帯も菊池川に近接した位置に遺跡は存在し、したがって本遺跡も白川の恵みに適した近隣に水田地の存在を想定する。本遺跡での古代住居から検出された甌や、二次焼成を受けた土師器や投石と想定される遺物の出土が、この生産の基盤の変化を物語る。

本遺跡の内容は多岐に亘るが白川流域の僅かな事例であり、しかも本遺跡は小規模である。そしてその内容も僅かであるが、今後 周囲を含めた遺跡の存在とその様相を思考発信する一助になろう。

第4表 出土遺物觀察表
(十器・十製品)

番号	樹種	樹高	胸高	直径	出芽地	クリップ番号	葉面	葉裏	花被	果被	果被	外觀	肉質	色調	地土		備考
															葉	枝	
1	桑	<0.005			樹幹上	葉1-4	赤毛土楓	無	31.35	22.45	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月16日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
2	桑	<0.005			葉1-1	赤毛土楓	無	無	17.45	9.05	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月16日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
3	23	1-0.005			樹幹上	葉1	赤毛土楓	無	(29.0)	13.4-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月13日付 10月14日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
4	桑	0.005-1			中幹	葉1-11	赤毛土楓	無	(13.6)	12.85-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
5	桑	0.005-1			上部枝上	葉1-5	赤毛土楓	無	18.7	31.4-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
6	桑	0.005-1			中幹	葉2-1	赤毛土楓	無	(29.0)	21.65-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
7	桑	0.005-1			中幹	葉3-9	赤毛土楓	無	21.4	38.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
8	桑	0.005-1			中幹	葉10	赤毛土楓	無	(18.6)	16.85-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
9	桑	0.005-1			上部枝上	葉1	赤毛土楓	無	(28.4)	7.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
10	桑	0.005-1			上部枝上	葉2-10	赤毛土楓	無	(29.0)	8.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
11	桑	0.005-1			上部枝上	葉11-15	赤毛土楓	無	(27.0)	22.15-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
12	桑	0.005-1			上部枝上	葉16-20	赤毛土楓	無	(28.4)	12.15-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
13	桑	0.005-1			上部枝上	葉21-25	赤毛土楓	無	(28.4)	7.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
14	桑	0.005-1			上部枝上	葉26-30	赤毛土楓	無	(28.4)	3.2-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
15	桑	0.005-1			上部枝上	葉31-35	赤毛土楓	無	(28.4)	22.15-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
16	桑	0.005-1			上部枝上	葉36-40	赤毛土楓	無	(28.4)	12.15-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
17	桑	0.005-1			上部枝上	葉41-45	赤毛土楓	無	(28.4)	7.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
18	桑	0.005-1			上部枝上	葉46-50	赤毛土楓	無	(28.4)	2.15-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
19	桑	0.005-1			上部枝上	葉51-55	赤毛土楓	無	(28.4)	1.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
20	桑	0.005-1			上部枝上	葉56-60	赤毛土楓	無	(28.4)	0.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
21	25	2-5.005			用根	葉12	赤毛土楓	無	(29.4)	8.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
22	35	11-5.011			用根	葉15	土楓	無	(29.0)	7.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
23	36	14-5.011			用根	葉6	淡葉	無	(28.0)	2.0-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
27	39	12-5.012			用根	葉12	土楓	無	(18.0)	7.1-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
31	41	15-6.017			用根	葉1	淡葉	無	14.0	3.8-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
32	42	15-6.015			用根	葉1	土楓	無	(18.6)	14.45-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着
34	43	15-6.022			用根	葉2	土楓	無	(18.0)	16.9-	ヨコナデ・ハイカツヨコナデ ハイカツヨコナデ	10月14日付 10月15日付	肉質	石青・淡石	根瘤	無	外観に葉色 異常な付着

探査番号	地質番号	地質名	出土地点	層位	層厚	層位	地質	地質	地質	地質	地質	地質	地質
37	40	5 1-5-001 前	クリック地	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤
38	41	21 1-5-001 前	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	地盤
39	53	105 2-5-010	上砂土(1)	地盤	2.0m弱	地盤	14.0	6.0	14.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
41	54	90 2-5-011	上砂土(1)	地盤	2.0m弱	地盤	13.0	13.0	13.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
42	57	99 2-5-014	上砂土(1)	地盤	2.0m弱	地盤	15.0	2.0	15.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
50	58	110 2-5-014 上砂土(1)	上砂 上砂土(1)	地盤	2.0m弱	地盤	14.0	2.0	14.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
46	60	111 2-5-015	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	12.0	2.0	12.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
48	65	103 2-5-022	上砂土(1)	地盤	2.0m弱	地盤	10.0	2.0	10.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
50	66	88 2-5-020	上砂土(1)	地盤	2.0m弱	地盤	12.0	2.0	12.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
52	69	92 2-5-029	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	11.0	2.0	11.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
53	70	6 1-5-029	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	10.0	2.0	10.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
74	74	112 2-5-037	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	10.0	2.0	10.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
54	75	106 2-5-037	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	10.0	2.0	10.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
76	76	107 2-5-037	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	10.0	2.0	10.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
79	79	89 1-5-013	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	9.0	2.0	9.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
80	80	96 1-5-013	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	8.0	2.0	8.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
81	81	97 1-5-013	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	8.0	2.0	8.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
82	82	100 1-5-013	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	8.0	2.0	8.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
83	83	101 1-5-013	上砂	地盤	2.0m弱	地盤	8.0	2.0	8.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
84	84	102 1-5-013	中・下砂	地盤	2.0m弱	地盤	9.0	2.0	9.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
85	85	1 1-5-020	中・下砂	地盤	2.0m弱	地盤	14.0	4.0	14.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
86	86	3 1-5-020	中・下砂	地盤	2.0m弱	地盤	13.0	3.0	13.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
87	87	20 1-5-020	中・下砂	地盤	2.0m弱	地盤	13.0	3.0	13.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
88	88	26 1-5-013	中砂	地盤	2.0m弱	地盤	15.0	5.0	15.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
89	89	106 1-5-013	中・下砂	地盤	2.0m弱	地盤	13.0	3.0	13.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
90	90	13 1-5-013	中・下砂	地盤	2.0m弱	地盤	13.0	3.0	13.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
91	91	10 1-5-013	中砂	地盤	2.0m弱	地盤	14.0	5.0	14.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m
92	92	24 1-5-013	中砂	地盤	2.0m弱	地盤	15.0	5.0	15.0	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m	7.5mE/4.5mW 7.5mE/1.0m

番号	地名	河川	河川番号	通水地點	断面	断面長(m)	断面積(m ²)	水深	内傾	外傾	色調	内面	底土	質地	備考	
口幅	底幅	底質	断面													
161	62	J-26	佐倉川	新庄土橋	林		4.25	2.68	・砂礫・砂質粘土	2.57/1.5m	2.57/1.5m	灰石・砾石	灰	外傾地帯: 2.57/1.5m		
162	76	J-23	9号	新庄土橋	林		4.0	ナメク・泥炭・砂質粘土	ナメク・泥炭・砂質粘土	2.57/1.5m	2.57/1.5m	灰石・砾石	灰			
163	74	J-26	佐倉川	新庄土橋	林		7.2	ナメク・泥炭・砂質粘土	ナメク・泥炭・砂質粘土	10/10/1.5m	10/10/1.5m	灰石・砾石・角礫	灰			
70	164	80	トランシット 新庄支流	5号	新庄土橋	林	3.2	ナメク・泥炭・砂質粘土	ナメク・泥炭・砂質粘土	8/2/1.5	2.57/1.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
165	100	J-24	佐倉川	新庄土橋	林	22.0	6.2	ナメク・泥炭・砂質粘土	ナメク・泥炭・砂質粘土	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
166	82	J-25	佐倉川	新庄土橋	林	21.0	12.5	砂質粘土・土・砂質	ケズリ・ナメク	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・砾石・全砂	灰			
167	99	J-24	佐倉川	新庄土橋	林	14.4	7.4	ナメク	ナメク	7.57/0.8m	10/10/2.5m	灰石・砾石・泥炭	灰			
168	76	トランシット 新庄支流	5号	新庄土橋	林	5.3	砂質粘土	ナメク・砂質粘土	ナメク・砂質粘土	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
169	83	J-26	佐倉川	新庄土橋	林	3.5	砂質粘土	ナメク・砂質粘土	ナメク・砂質粘土	7.57/0.8m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
170	86	J-24	佐倉川	新庄土橋	林	3.8	砂質粘土	ナメク・砂質粘土	ナメク・砂質粘土	7.57/0.8m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
171	82	J-23	8号	新庄土橋	林	2.0	砂質粘土	ナメク	ナメク	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
172	65	トランシット 新庄支流	5号	新庄土橋	林	4.3	砂質粘土	ナメク・砂質粘土	ナメク・砂質粘土	7.57/0.8m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
71	173	102	J-24	佐倉川	1号	新庄土橋	林	1.2	ナメク・砂質粘土	ナメク・砂質粘土	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰	河床に大小の岩	
174	100	J-25	佐倉川	新庄土橋	林	0.3	4.6	ナメク	ナメク	7.57/0.8m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰			
175	9	1-5-2006 J-25	小谷べんり 新庄支流	新庄土橋	砂質	0.0	0.0	砂質	砂質	2.57/0.8m	2.57/0.8m	灰石・砾石	灰	水文・地形: 2.57/0.8m		
176	72	J-24	佐倉川	新庄土橋	林	14.0	11.0	3.3	砂質粘土・砂・ラグビ	ナメク・砂質粘土	7.57/0.8m	10/10/2.5m	灰石・角礫	灰	外傾地帯: 10/10/2.5m	
177	18	J-4	佐倉川	新庄土橋	林	17.65	11.0	7.6	砂質粘土・砂・ラグビ	ナメク・砂質粘土	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・角礫・砂質粘土	灰	外傾地帯: 2.57/1.5m	
178	20	J-3	佐倉川	新庄土橋	林	0.4	1.3	砂質粘土・砂・ラグビ	砂質粘土・砂・ラグビ	7.57/0.8m	7.57/0.8m	灰石・砾石・砂質粘土	灰	外傾地帯: 2.57/1.5m		
179	19	J-4	佐倉川	新庄土橋	林	15.7	2.5	砂質粘土	砂質粘土	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・砾石・砂質粘土	灰	外傾地帯: 2.57/1.5m		
180	32	トランシット 新庄支流	5号	新庄土橋	林	1.0	ナメク	ナメク	ナメク	10/10/2.5m	10/10/2.5m	灰石・砾石・砂質粘土	灰	外傾地帯: 10/10/2.5m		
181	81	J-13	佐倉川	新庄土橋	林	6.0	工事ダム	工事ダム	工事ダム	1.5/11.1	1.5/11.1	灰石・角礫	灰			
182	25	2-5-042	佐倉川	新庄土橋	林	2.0	0.8	(M)	(M)	1.5/11.1	1.5/11.1	灰石・砾石・砂質粘土	灰	河床正規化		
70	183	16	中央支流	通路一筋	土塀	2.0	0.8	(M)	(M)	1.5/11.1	1.5/11.1	灰石・砾石・砂質粘土	灰	河床正規化		
184	31	7号	新ちこ川	佐倉川	林	1.5	0.5	泥炭	泥炭	0-282	0-282	砂質粘土	灰	水文・地形: 0-282		
185	30	中央支流	通路一筋	土塀	0.5	0.5	泥炭	泥炭	0-144	0-144	砂質粘土	灰	水文・地形: 0-144			

(石器・石製品)

番号	種類	形態	表面	表面	出土品名		標本	尺寸	材質	出土		< 三次標準値		備考
					番号	グリット地				出土(上)No.	番号	層位	層(No.)	
10	骨 42	1-2-009 P-14			No. 6	底突起	実山脈	23.00	15.46	16.40	7250.00	表面凹凸は全体的に鋸歯があり、底部を削除		
12	骨 44	1-2-009 P-15			No. 5	底突起	実山脈	24.30	11.75	10.20	4190.00	表面一側を削り、ほぼ表面に直角面あり。底部を削除		
13	骨 20	1-2-001			No. 6	底突起	実山脈	4.40	3.10	2.50	46.00	表面の裏側面は、斜一二等地・シングル・グリット(コーキング)していなかったと思われる		
13	骨 21	1-2-001			No. 7	底突起	実山脈	3.70	2.20	2.05	26.70			
15	骨 25	1-2-001	底面		No. 1	底突起	砂岩	12.80	6.20	6.20	820.00	底部が全面に鋸歯があり、表面に打痕あり		
14	骨 17	2-2-001	下端 傾斜		No. 8	底突起	実山脈	7.90	6.15	2.10	127.53			
18	骨 16	2-2-005	上端		No. 67	底突起	実山脈	21.25	18.40	5.60	2884.80			
19	骨 63	2-2-005	上端		No. 21	底突起	実山脈	10.05	8.90	4.80	626.20			
19	骨 62	2-2-005	上端		No. 69	底突起	実山脈	12.66	10.75	5.70	1582.80			
21	骨 73	2-2-001	傾斜		No. 1	底突起	実山脈	22.45	20.55	14.80	17010.00	全面に鋸歯あり		
26	骨 77	2-2-002	底面		No. 8	底突起	実山脈	8.90	7.40	5.20	422.50			
27	骨 78	2-2-002	底面		No. 18	底突起	実山脈	9.30	4.45	3.45	206.50	底部が全面に鋸歯あり		
23	骨 54	2-2-002			No. 14	底突起	実山脈	11.80	8.80	6.90	946.50			
26	骨 75	2-2-002	底面		No. 15	底突起	実山脈	12.20	4.00	3.10	202.00	底部が全面に鋸歯あり		
20	骨 60	2-2-002			No. 1	底突起	実山脈	12.95	13.00	2.90	941.40	表面にくぼみ有		
31	骨 61	2-2-002			No. 10	底突起	実山脈	8.80	5.90	2.50	198.00			
24	骨 76	2-2-002	底面		No. 17	底突起	実山脈	15.00	10.00	4.20	991.00			
33	骨 64	2-2-002			No. 2	底突起	実山脈	9.90	9.50	5.90	836.90	一端丸味		
24	骨 58	2-2-002			No. 11	底突起	実山脈	7.80	7.15	4.40	280.00			
37	骨 50	1-2-01	下端		No. 19	底突起	砂岩	(51.60)	17.70	13.00	8650.00	上端尖端、上端部分に鋸歯あり		
38	骨 52	1-2-01	下端		No. 18	底突起	実山脈	20.25	14.45	11.55	6580.00	全面に鋸歯あり		
39	骨 41	1-2-013	地上		No. 1	底突起	実山脈	11.45	9.80	3.00	590.00	表面、裏面に鋸歯あり		
44	骨 29	1-2-02			No. 1	底突起	砂岩	13.90	15.00	13.65	2800.00	上半分に鋸歯あり		
34	骨 36	1-2-02			No. 1	底突起	砂岩	(16.10)	(13.40)	(13.40)	1700.00	丸化したく、裏面側面が不規則		
46	骨 27	1-2-02	底面裏		No. 2	底突起	実山脈	19.20	14.20	13.50	4680.00	全面に打痕		
37	骨 24	1-2-01			No. 3	底突起	実山脈	(39.30)	(34.45)	(31.15)	11500.00	部分に欠損、上側縁、加工痕あり		

番号	標高	岩相	岩名	出土品名		種類	石材	法面	（法面積）	備考	
				番号	グリット地						
37	50	安45	1-2-01			№5	底文貝	砂岩	(18.35)	(13.15)	(15.70) 250.00 全体が二面削していると思われるが、底文層として、複数個底付で剥離
51	51	安22	1-2-01			№1	底文貝	頁岩	24.55	19.40	19.70 1375.00 全体が二面削していると思われるが、底文層として、複数個底付で剥離
38	52	安23	1-2-01			№4	底文貝	砂岩	(14.25)	(18.80)	460.00 異化して、複数個底付で剥離
55	52	安72	1-2-01	上層 壁立石		№1	貝石	安山岩	8.70	6.20	3.50 220.00 住居場の壁面は美しい
47	56	安73	2-2-01	上層		№2	貝石	安山岩	14.65	8.90	4.20 765.50
44	59	安42	2-2-04			貝石	安山岩	3.90	4.60	2.10 36.50	
61	61	安74	2-2-03	底面		貝石	安山岩	8.25	6.20	2.80 260.50	
62	61	安71	2-2-03	上層		貝石	安山岩	14.90	12.35	4.35 964.70 複数個底付で剥離している	
63	63	安57	2-2-04			貝石	安山岩	14.40	10.25	4.80 1031.30 異化貝石	
48	64	安15	2-2-04	7層		貝石	安山岩	8.95	7.10	3.00 271.80	
67	67	29	2-2-03			貝石	安山岩	5.10	4.40	2.75 72.37	
51	68	34	2-2-03	上層 壁立石		貝石	安山岩	(27.80)	(36.80)	(13.25) 1.77 117.00 異化貝石、全般的に複数個	
71	71	安40	1-2-08			№4	丸の丸な貝石	不規	(4.80)	(1.80)	(1.80) 960.00 異化貝石、複数個で複数個
53	72	安31	1-2-08			№5	底文貝	安山岩	29.20	12.90	8.45 460.00 複数個底付し、わずかに複数まで
73	73	安53	1-2-08			№6	底文貝	安山岩	5.50	5.10	1.80 90.70 1.80
58	77	安42	2-2-01			№4	貝石	安山岩	(18.80)	(9.10)	(6.10) 1220.00 上部より下部まで、全層に複数個あり、複数個
59	78	安26	1-2-05			№5	貝石	安山岩	(8.70)	(11.90)	6.95 1120.00 異化貝石、複数・複数に複数個入り
96	96	安31	1-2-08			№147	貝石	安山岩	10.70	8.15	4.20 675.40
97	97	安32	1-2-08			№127	貝石	安山岩	8.25	7.05	4.20 344.00 複数の複数個で複数
64	96	安34	1-2-08			№59	貝石	安山岩	15.35	7.15	5.65 690.70 岩石としても使用
99	99	安32	1-2-08			№1	貝石	安山岩	8.90	8.50	3.70 478.20
100	100	安16	1-2-08			№11	貝石	安山岩	11.80	8.10	3.90 566.20
101	101	安80	1-2-08			№14	貝石	安山岩	9.90	7.60	7.55 614.50
102	102	安26	1-2-08			№13	貝石	安山岩	11.20	6.00	3.40 362.70 一部欠損
103	103	安37	1-2-08			№25	貝石	砂岩	(8.35)	(2.90)	(2.90) 46.20 1.12.40
68	110	安39	2-2-03	空隙		№1	貝石	安山岩	17.15	7.20	6.40 1372.80

番号	種類	岩質	番号	出土品名		種類	材料	尺寸(cm)	測定値(cm)	<		測定方法
				地質	グリット地	層位	出土(げ)	層	地質	層位	(cm)	
70	144	17	144-1	火成岩	漂砾	田	粘土	0.3-20	13.90	(1.90)	25.20	直角法
	145	27		中風化帶	古生層	田	粘土	0.0-20	5.40	(1.30)	12.90	直角法
	146	2	146-2	火成岩	漂砾	田	粘土	1.20	1.40	0.20	0.20	直角法
	149	51	149-51	火成岩	漂砾	田	粘土	1.20	1.20	0.20	0.26	先端と基部六點
	150	53		中風化帶	古生層	田	粘土	2.60	1.70	0.45	1.10	
	151	1	151-1	火成岩	漂砾	田	粘土	2.60	1.20	0.50	0.70	
	152	49	152-49	火成岩	漂砾	田	粘土	2.20	1.70	0.40	0.90	
	153	14		火成岩	漂砾	田	粘土	2.10	1.60	0.40	0.71	
	154	50		火成岩	漂砾	田	粘土	1.90	1.20	0.40	0.64	直角法
70	155	52	155-52	火成岩	漂砾	田	粘土	1.90	1.20	0.40	0.65	一般法
	156	46	156-46	火成岩	漂砾	田	粘土	0.60	0.30	0.40	0.60	かじり法の直角法の測定を併用とした、傾けてたむきの断面を測定した直角法
	157	10	157-10	火成岩	漂砾	二段工事の跡	粘土	2.05	1.85	0.55	1.50	
	158	5	158-5	火成岩	漂砾	二段工事の跡	粘土	3.00	2.80	1.05	6.90	
	159	22	159-22	火成岩	漂砾	二段工事の跡	粘土	5.85	3.85	0.90	18.40	スクレーバーとして使用した直角法
	160	13	160-13	火成岩	漂砾	二段工事の跡	粘土	4.35	3.10	1.40	16.90	
	161	67	161-67	火成岩	漂砾	二段工事の跡	粘土	(7.20)	(2.05)	(0.95)	13.20	一般と直角法
80	162	70	162-70	火成岩	漂砾	田	粘土	4.65	5.80	0.55	10.70	一般と直角法
	163	46	163-46	火成岩	漂砾	田	粘土	7.00	5.80	1.10	20.2	打鍬法と直角法
	164	19		火成岩	漂砾	内窓状隙間	粘土	9.80	9.40	2.50	25.20	
	165	69	165-69	火成岩	漂砾	内窓状隙間	粘土	10.45	5.25	2.30	11.20	
	166	29	166-29	火成岩	漂砾	内窓状隙間	粘土	(10.20)	5.65	2.20	14.00	直角法
E1	167	46	167-46	火成岩	漂砾	内窓状隙間	粘土	10.40	5.20	1.95	11.12	
	168	47	168-47	火成岩	漂砾	内窓状隙間	粘土	(11.70)	5.20	2.10	14.6.2	万能一括式
	169	43	169-43	火成岩	漂砾	内窓状隙間	粘土	(10.10)	8.25	0.90	16.40	直角法

番号	種類	形態	岩名	出土品名		種類	石材	法面		（法面標識）		備考
				形状	骨格			標高	幅(m)	幅(m)	厚(m)	
210	金物	手形	無縫	グリッタ等	断片	地上部	無縫石手	安山岩	9.00	0.50	0.10	111.90 壁片、無縫石手及石一塊
211	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	無縫石手	(13.60)	0.40	0.20	200.20 壁片	
212	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	8.80	0.10	0.00	200.20 壁片	
213	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(7.20)	0.20	0.00	210.40 壁片	
214	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	11.90	0.25	0.20	461.10 壁片	
215	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	10.25	0.10	0.70	418.00 壁片	
216	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(7.70)	0.50	0.50	225.70 大形六角、無縫石手	
217	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(10.80)	0.40	0.25	171.90 7形六角、無縫石手	
218	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	11.65	0.20	0.20	472.20 壁片	
219	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(6.90)	0.30	0.10	386.50 1/2—1/3角片	
220	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(5.20)	0.10	0.40	386.50 壁片、無縫石手	
221	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	12.45	0.10	0.00	585.80 無縫石手	
222	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(6.80)	0.00	0.00	27.80 天青石瓦	
223	金物	2×2×40	2×2×30	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	12.45	0.20	0.20	216.40 全縫石手	
224	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	(8.0)	0.20	0.10	11.70 1/4角片	
225	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	3.90	0.50	0.65	29.70 壁片	
226	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	3.20	0.90	0.00	26.40 壁片	
227	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	4.00	0.25	0.55	26.40 壁片	
228	金物	手形	無縫	無縫	無縫	無縫石手	安山岩	2.25	0.10	0.70	26.20 壁片	

(金属製品)

番号	種類	形態	岩名	出土品名		種類	石材	法面		（法面標識）		備考
				形状	骨格			標高	幅(m)	幅(m)	厚(m)	
65	金物	手形	1×1×0.6	無縫	無縫	無縫石手	千石	5.70	1.65	0.20	16.04 壁片	
71	金物	手形	2×2×0.9	無縫	無縫	無縫石手	千石	3.00	2.40	0.85	22.61 壁片	

遺構一覧表

新遺構番号※	工区	旧遺構番号	新遺構番号※	工区	旧遺構番号
S-001	1	S-008	S-023	2	S-029
S-002	1	S-009	S-024	1	S-028
S-003	1	S-051	S-025	2	S-012
S-004	2	S-001	S-026	2	S-037
S-005	2	S-005	S-027	2	S-022
S-006	2	S-040	S-028	2	S-023
S-007	2	S-041	S-029	2	S-031
S-008	2	S-042	S-030	2	S-004
S-009	1	S-011	S-031	1	S-023
S-010	1	S-012	S-032	1	S-024
S-011	1	S-013	S-033	1	S-063
S-012	1	S-017	S-034	1	S-064
S-013	1	S-022	S-035	1	S-052
S-014	1	S-061	S-036	1	S-037
S-015	2	S-010	S-037	1	S-040
S-016	2	S-011	S-038	2	S-024
S-017	2	S-014	S-039	2	S-021
S-018	2	S-015	S-040	2	S-020
S-019	2	S-016	S-041	1	S-021
S-020	2	S-032	S-042	2	S-017
S-021	2	S-038	S-043	1	S-053
S-022	2	S-013	S-044	2	S-002

新遺構番号※	工区	旧遺構番号	新遺構番号※	工区	旧遺構番号
S-045	1	S-029	S-045	1	S-029
S-046	1	S-010	S-046	1	S-010
S-047	1	S-018	S-047	1	S-018
S-048	1	S-060	S-048	1	S-060
S-049	2	S-033	S-049	2	S-033
S-050	2	S-003	S-050	2	S-003
S-051	1	S-062	S-051	1	S-062
S-052	1	S-014	S-052	1	S-014
S-053	1	S-015	S-053	1	S-015
S-054	1	S-016	S-054	1	S-016
S-055	1	S-026	S-055	1	S-026
S-056	1	S-020	S-056	1	S-020
S-057	1	S-019	S-057	1	S-019
S-058	1	S-054	S-058	1	S-054
S-059	1	S-048	S-059	1	S-048
S-060	1	S-045	S-060	1	S-045
S-061	1	S-047	S-061	1	S-047
S-062	1	S-034	S-062	1	S-034
S-063	1	S-039	S-063	1	S-039
S-064	2	S-019	S-064	2	S-019
S-065	1	S-007	S-065	1	S-007
S-066	1	S-049	S-066	1	S-049



1工区 全景 東一



2工区 全景



S-005 完掘状况

西→



S-008 遗物出土状况

南西→



S-010 完掘状况

北西→



S-013 瓯部分検出状況
東→



S-015 完掘状況
南西→



S-016 遺物出土状況
南西→



S-022 完掘状況

北東→



S-017 遺物出土状況

北西→



S-018 遺物出土状況

南西→



S-047 遺物出土狀況
北西→

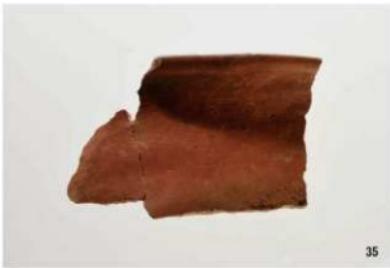


S-027 完掘狀況
北西→



S-063 耳環(112)出土狀況
南東→









54



57



58



60



65



66



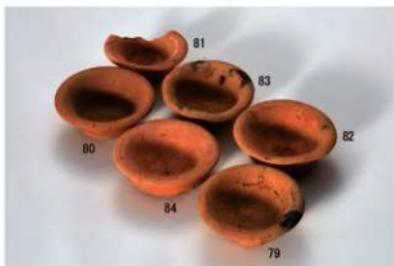
70



75

76

74





92



93



94



95



96



97



98



99



109



111



113



114



115



116



117



118







135



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



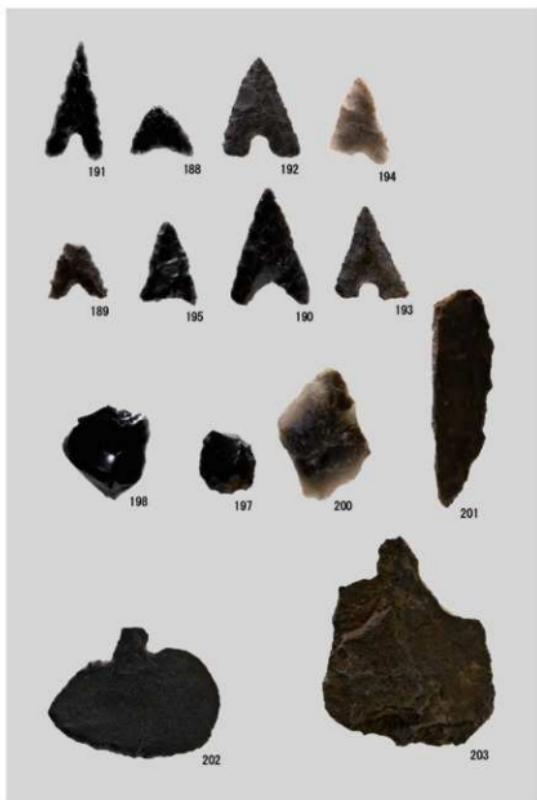
158

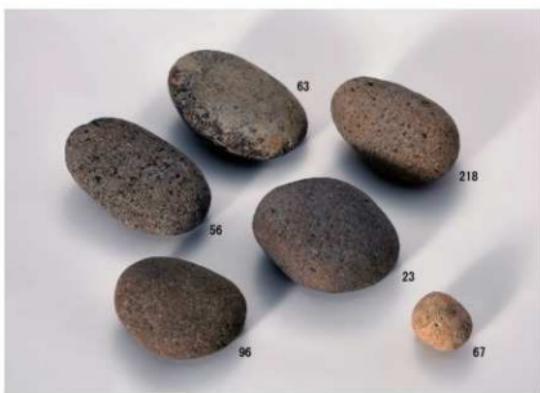
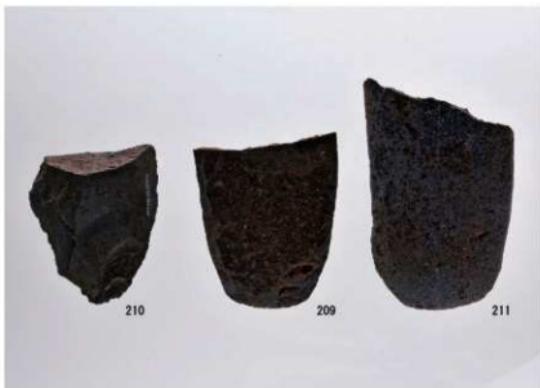




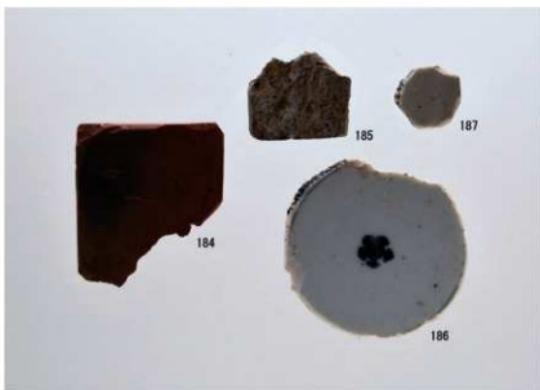
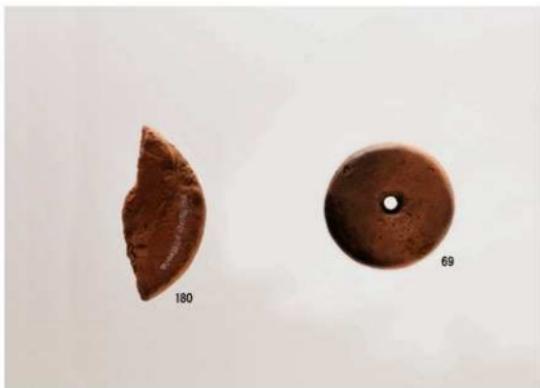














1工区 調査最終日にて 2016.10.17

報告書抄録

熊本県文化財調査報告 第329集	
新南部遺跡群（12次）	
-白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-	
平成30年3月31日	
編集 発行	熊本県教育委員会
	〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
印刷	ホーブ印刷株式会社
	〒861-8007 熊本市北区龍田弓削1丁目4番12号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第329集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：新南部遺跡群（12次）

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2019年8月30日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>